

神岡町埋蔵文化財調査報告第6集  
江馬氏城館跡調査報告書 第6集

岐阜県吉城郡神岡町  
EMA CASTLE SITE  
**江馬氏城館跡 V**  
—下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査—

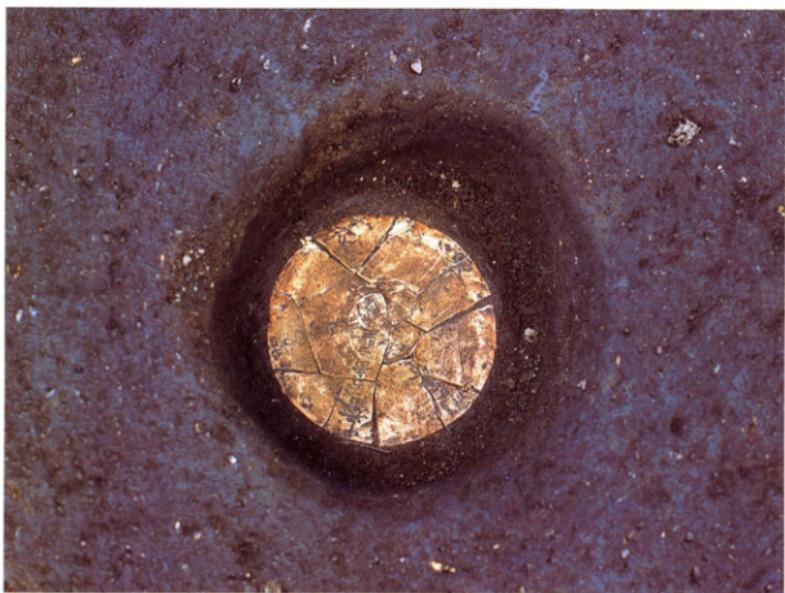
神岡町教育委員会

2001年3月

卷頭図版



1 下館跡堀内地区北西隅部遠景写真(1998年度調査地区、北西から)



2 地鎮遣構SP148墨書き器皿出土状況写真(南から)

神岡町埋蔵文化財調査報告第6集  
江馬氏城館跡調査報告書 第6集

岐阜県吉城郡神岡町  
EMA CASTLE SITE  
**江馬氏城館跡 V**  
—下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査—

神岡町教育委員会

2001年3月

## 序

神岡町は岐阜県の北玄関に位置し、かつての鉱山町のイメージから地ト空間の活用による東京大学のスーパーカミオカンデや東北大学のカムランドによる壮大な宇宙自然の謎に挑む、「宇宙のロマン」を秘めた町として世界から熱い視線を浴びております。

また、神岡町を流れる清流高原川の流域から一億二千万年前と思われる恐竜の足跡の化石が発見され、町政50周年記念事業の一つとして、平成12年の夏に恐竜展を行い、「太古のロマン」をアピールしたところです。

ふるさとを誇りをもって語り継げる町民にしたい。そんな日上のロマンの三つ目は、歴史学者をして言わしめた下館の姿は、「飛驒の花の御所」といわれる「中世のロマン」を秘めた国史跡「江馬氏城館跡」であります。

平成10・11年度の発掘調査では、館の北・西・南側の三方が堀と築地塀で囲まれていたこと、門の構造を考える手がかりを得たこと、地鎮遺構が発見されたこと等、新たな知見を得ることができました。

これまでの成果を受けて、平成10年度には整備の基本構想を、平成11年度には整備の基本計画を策定し、平成12年度からはいよいよ整備工事に着手しております。

町づくりの推進核の一つに文化財を明確に価値付け、位置付けていくことは、その時代時代に生きた人の心をつないでいく最も大切な、今、生きている者の責務だと考えます。神岡町が永遠に生き残るためにも、ここならではの文化財を含む文化に光をあて、保存と活用に力を入れ続けることが、町としての重点課題だと考えます。

今後も更に調査・整備の事業を進める上で、多大な人力と財力に期待せねばなりません。なお一層の関係各位の皆様のお力添えをどうぞ宜しくお願い申し上げます。

平成13年3月

神岡町教育長　堀本　昌義

## 例　　言

- 1 本書は、岐阜県吉城郡神岡町大字殿に所在する中世城館、国指定史跡江馬氏城館跡下館跡の1998・1999年度発掘調査報告書である。
- 2 本調査は文化庁の指導による史跡の環境整備事業（史跡公園化）とともになう事前調査であり、その復元資料となすことを目的として1994年度から実施しており、その5・6年目の調査である。
- 3 調査は、文化庁記念物課、岐阜県教育委員会文化課、江馬氏城館跡調査整備委員会の指導協力を得て、神岡町教育委員会が主体となり、1998年度は県費補助事業、1999年度は国庫補助事業として実施した。報告書の刊行は平成12年度町費事業として実施した。
- 4 本書の編集・執筆は大平愛子が担当した。建物・構造等の復元について吉岡泰英氏（福井県埋蔵文化財センター）、出土陶磁器では、瀬戸・美濃の器種・年代等について藤沢良祐氏（瀬戸市埋蔵文化財センター）、墨書き土器器皿について水野正好氏（奈良大学学長・文学部文化財学科教授）、遺構の石材について若田俊一氏（神岡町文化財審議会委員長）からご教示頂いた。なお、理解・記述等に誤りがあればすべて編者の責任である。また1997年度調査出土カラミの組成分析を神岡鉱業株に依頼し、その報告を本書に掲載した。
- 5 遺跡の電磁気探査は、1998年度は富山大学理学部地球科学科電磁気探査研究室（代表：酒井英男助教授）に、1999年度は徳川尾地研に委託して実施し、その報告を本書に掲載した。
- 6 地区制で使用した国土座標は直角座標第7系国上座標であり、(X=35878.577, Y=13064.049)を原点として調査座標網を設定した。水準はT.P.である。
- 7 土層の色調については「新版 標準上色帳」（小山正忠・竹原秀雄編著、1967 日本文研事業株式会社）を用いた。
- 8 1999年度調査航空写真撮影、本報告書の遺構図のトレースは㈱日本テクニカルセンターに委託し、座標網設置原点杭の再測量は大前測量事務所に委託して行った。
- 9 本書の図版の遺物番号は実測図と写真とを統一している。
- 10 これまでの報告書では、堀内地区と門前地区の建物・欄列番号が重複していたが、今後混乱を来す恐れがあるため、本報告書において堀内地区の建物・欄列番号を再整理し、以後、堀内地区の建物については、変更した建物番号を使用するものとする。なお、変更後の番号及びこれまでの建物番号との対応等については、第3章1に記述した。
- 11 参考文献は本文末にまとめ、報告書抄録は巻末に掲載した。
- 12 現地調査及び本書の作成に際して、江馬氏城館跡調査整備委員会以外にも、下記の諸氏・関係機関からご指導・ご教示、またご協力を得た。記して厚く感謝申し上げる。（順不同・敬称略）  
本中 優（文化庁記念物課主任文化財調査官）、坂井秀弥（文化庁記念物課文化財調査官）、小島道裕（国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授）、小野正敏（国立歴史民俗博物館考古研究部助教授）、千田嘉博（国立歴史民俗博物館考古研究部助手）、前川 要（富山大学人文学部助教授）、玉井哲雄（千葉大学工学部教授）、伊野近富（京都府埋蔵文化財センター）、橋本久和（高槻市役所総務部）、川部 誠（岐阜県教育委員会文化課課長補佐）、松野晶信・小林宏行（岐阜県教育委員会文化課学芸主事）、三鍋秀典（富山県立山町教育委員会）、内堀信雄（岐阜市教育委員会）、三宅唯美（恵那市教育委員会）、山田哲也（高富町教育委員会）、岩佐信雄（御所町教育委員会）、耕原滋高（青森県市浦村教育委員会）、中田貴矢（青森県黒ヶ浜町教育委員会）、古宿 稔（神岡町社会福祉協議会事務局長）、都竹清隆（神岡町役場福祉衛生課長）、大前洋司（大前測量事務所）、降矢哲男（奈良大学文学部文化財学科学生）、佐伯哲也（岐阜県中世城館総合調査員）、北陸中世考古学研究会、岐阜県城館研究会
- 13 調査に際して、吉中公男・今井悌二郎（大字殿区長）、山本 登・家越一三（江馬遺跡保存会長）、沖野好夫、堀 進、田中幸一、川上定義、宮前 稔、保木 薫、清水邦宏、川上真人、新家康孝、新家久雄、中田康孝、沖野 寛、岩垣達蔵、伊勢米蔵（殿地区地権者）、日影広男、森腰賢三をはじめとする殿地区および神岡町内の方々にご協力戴き、神岡鉱業株式会社からは給水について便宜を計って戴いた。記して厚く感謝申し上げる。
- 14 出土遺物・記録書類は、神岡町教育委員会で保管・公開している。

# 目 次

	頁
第1章 調査の概要 .....	1
1 調査に至る経緯と目的及び事業の経過 .....	1
2 下館跡の現状 .....	3
第2章 遺跡の立地と歴史的環境 .....	4
1 遺跡の立地 .....	4
2 歴史的環境 .....	8
3 高原郷の街道と中世城跡 .....	10
第3章 下館跡の概要と調査の経過 .....	13
1 下館跡の概要 .....	13
2 調査の方法 .....	18
3 調査の経過と調査組織 .....	20
第4章 発掘調査の成果 .....	23
1 調査の目的と調査範囲及びその概要 .....	23
2 墓 位 .....	24
3 遺 構 .....	32
4 遺 物 .....	51
第5章 小 結 .....	60
付 章 自然科学的調査の成果	
1 1998年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡における電磁気調査 酒井英男・田中保士・大平愛子 .....	65
2 1999年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡における地中レーダ探査 酒井英男・中埜貴元・笹井 隆・新谷 崇・大平愛子 .....	73
3 1997年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡出土カラミの組成分析結果報告 .....	79
参考文献 .....	86
別 表 .....	89

## 挿図目次

第1図	江馬氏下館跡の位置	4
第2図	江馬氏下館跡と周辺の城跡・遺跡	5
第3図	江馬氏下館跡付近絵図トレース図(江戸末~明治初年)	7
第4図	江馬氏下館跡付近地籍図(明治21年)	7
第5図	中・近世の古城都の交渉路	10
第6図	調査地区周辺の地形と発掘区位置図	14
第7図	堀内地区八期建物配置図	17
第8図	1998年度調査参加者写真	22
第9図	1999年度調査参加者写真	22
第10図	1998・1999年度調査地区割り・トレンチ・遺構配置図	25
第11図	1998・1999年度調査地区における既調査範囲図	25
第12図	1998・1999年度調査地区遺構平面図	27
第13図	調査地区整土層断面図	29
第14図	西堀箱塙実測図	33
第15図	石列SV01・SV02・SV03実測図	36
第16図	石列SV01・SV02・SV03石材番号図	37
第17図	1978年度調査K地区(X座標48~54, Y座標6~12付近)検出状況写真	37
第18図	門跡実測図	41
第19図	築地柱穴列SA55・SA56実測図	43
第20図	築地塙に伴う盛土断面層位図・横列SA57実測図	44
第21図	II地区WAトレンチ北壁断面層位図	44
第22図	横列SA51・SA52・SA53・SA54・SA58実測図	46
第23図	地鈎遺構SP148土師器皿出土状況実測図	47
第24図	堅穴住居SI 21実測図	48
第25図	不明土坑SX41実測図	49
第26図	SD22断面層位図	50
第27図	江馬氏下館跡出土上の上器皿分類図	54
第28図	出土遺物実測図(1)	57
第29図	出土遺物実測図(2)	58
第30図	出土遺物実測図(3)	59
第31図	1998・1999年度調査地区における遺構の主軸方位	61
第32図	地中レーダ探査測線配置図	66
第33図	電気探査比抵抗マッピング図	68
第34図	Y軸における地中レーダ探査の結果	70
第35図	X軸における地中レーダ探査の結果	71
第36図	探査測線配置図	74
第37図	測線1~5の225MHzアンテナでの探査結果	75
第38図	測線1~5の900MHzアンテナでの探査結果	75
第39図	探査測線A~II配置図とその周辺の発掘調査地区概略図及びWAトレンチ北壁断面層位模式図	76
第40図	測線A~IIの900MHzアンテナでの探査結果	77
第41図	探査結果から推定される柱穴位置と発掘調査結果との対応	78
第42図	試料No.751・No.752・No.754のXRDチャート及び同定結果	81

## 表 目 次

第1表	江馬氏下館跡の発掘調査実績表	2
第2表	江馬氏下館跡史跡指定地の土地買い上げ事業実績表	3
第3表	江馬氏関係年表	9
第4表	江馬氏下館跡周辺の城跡一覧表	12
第5表	堀内地区建物番号対応一覧表	17
第6表	調査基準点網設置原点杭の国土座標値	19
第7表	調査地区壁基本層序対照表	31
第8表	1998・1999年度調査地区出土中世陶磁器の種類・器種別組成表	53
第9表	1998・1999年度調査地区出土中世陶磁器の用途・種類別組成表	53
第10表	1998・1999年度調査地区的遺構変遷表	61
第11表	地中レーダ探査測線一覧表	65
第12表	XRD同定結果	82
第13表	XRF法での半定量結果	82
第14表	各試料の酸化換算XRF法での半定量結果	83
第15表	主成分及び貴金属分析結果	84
第16表	各カラミの組成推定結果	84
第17表	柱穴断面形分類表	95

## 別 表 目 次

別表1	堀跡計測表	91
別表2	門跡計測表	91
別表3	柵列計測表	91
別表4	堅穴住居計測表	91
別表5	土坑計測表	91
別表6	溝跡計測表	91
別表7	柱穴計測表	92
別表8	石列SV01・SV02・SV03石材計測表	96
別表9	1998・1999年度調査の出土遺物計測表	97

## 写真図版目次

巻首図版	1 下館跡堀内地区北西隅部遠景写真(1998年度調査地区、北西から)	
	2 地鎮造橋SP148墨書き器皿出土状況写真(南から)	
図版1	1 調査地域航空写真(1947年撮影)	
図版2	1 神岡町遠景写真:1978年撮影(北から)	
	2 調査地域遠景写真:1999年度調査時(上が北東)	
図版3	1 調査地域遠景写真(西から)	
	2 調査地区I地区発掘後全景(北東から)	
図版4	1 調査地区II地区発掘後全景(南東から)	
	2 調査地区III地区・IV地区発掘後全景(北西から)	
図版5	1 西堀箱堀北半部発掘後全景(北から)	
	2 西堀箱堀北半部南北縦断面層位(Y座標-8ライン、北西から)	

- 3 西堀箱堀北半部東西横断面層位(X座標46.3ライン、北から)  
 図版 6 1 築地塙基底部石列SV01・SV02・近世耕地石組み畦SV03発掘後全景(北西から)  
 2 築地塙基底部石列SV01発掘後全景(南から)  
 3 築地塙基底部石列SV02・近世耕地石組み畦SV03裏込め土検出状況(東から)  
 図版 7 1 築地塙基底部石列SV02発掘後全景(北から)  
 2 築地塙基底部石列SV02裏込めY座標2.66ライン断面層位(南東から)  
 3 近世耕地石組み畦SV03発掘後全景(北から)  
 4 近世耕地石組み畦SV03裏込めY座標3.76ライン断面層位(西から)  
 図版 8 1 脇門SB61発掘後全景(東から)  
 2 SP144断面層位(南から)  
 3 SP190断面層位(西から)  
 4 庭園への通用門SB62発掘後全景(南から)  
 5 SP11断面層位(南から)  
 6 SP13断面層位(南から)  
 図版 9 1 櫛列SA51～54・57・築地塙柱穴列SA55・56発掘後全景(南から)  
 2 櫛列SA51～54・57・築地塙柱穴列SA55・56発掘後全景(北東から)  
 3 櫛列SA51・53・築地塙柱穴列SA55・56発掘後全景(I地区内、北から)  
 図版10 1 櫛列SA52・54・築地塙柱穴列SA55・56発掘後全景(II地区内、南から)  
 2 築地塙基礎地盤部検出状況(北から)  
 3 築地塙基礎地盤部断面層位(WAトレンチ北壁内、南から)  
 4 布掘り溝SD21発掘後全景(櫛列SA55aの一部、南から)  
 5 築地塙に伴う盛土部分断面層位(X座標0ライン、南から)  
 図版11 1 地鎮造構SP148 墨書き土師器皿出土状況(1)(1枚目の土師器皿、南から)  
 2 地鎮造構SP148 墨書き土師器皿出土状況(2)(2枚目の土師器皿、南から)  
 図版12 1 積穴住居SI21発掘後全景(北から)  
 2 積穴住居SI21断面層位(北東から)  
 3 SD22検出状況(I地区内、北東から)  
 4 SD22検出状況(II地区内、南西から)  
 5 SD22・SV06・SF01・SD23・SV07検出状況(III地区内、北西から)  
 6 SD22断面層位I(III地区X座標49.7ライン、北から)  
 7 SD22断面層位2(II地区南壁内X座標6.5ライン、北から)  
 8 SD22内縫検出状況(II地区内、南西から)  
 図版13 1 不明土坑SX41検出状況(上が南西)  
 2 不明土坑SX41断面層位(南西から)  
 3～6 調査地区東壁断面層位：  
 3 III地区北側部分(堀外地区、西から)  
 4 III地区南側部分(9トレンチ西壁北半分、南東から)  
 5 II地区X座標30ライン付近(1976・77年度調査時の畦部分、西から)  
 6 I地区X座標3ライン付近(西から)  
 図版14 1 III地区北壁断面層位(南西から)  
 2～4 II地区北壁断面層位：  
 2 Y座標-10～-6 西堀箱堀南半部断面層位(南から)  
 3 Y座標-7～-3(南から)  
 4 Y座標-4～-6(南西から)  
 5・6 II地区南壁断面層位：  
 5 Y座標5～-1(北西から)

- 6 Y座標-2～-5 1976・77年度調査・1994年度調査地区との境付近(北から)  
7・8 I地区1トレンチ北壁断面層位：  
7 Y座標-9～-1(南東から)  
8 Y座標-6～2(南西から)  
図版15 出土遺物写真(1)  
図版16 出土遺物写真(2)  
図版17 出土遺物写真(3)

## 付 図

付図1 江馬氏下館跡遺構平面図

# 第1章 調査の概要

## 1 調査に至る経緯と目的及び事業の経過

### (a) 調査に至る経緯と目的

岐阜県の北部、旧飛騨国に位置する神岡町を流れる高原川と山田川の川筋には、中世にこの地域の豪族が築いたと伝わるいくつかの城跡が点在している。高原川右岸に広がる殿段丘上の神岡町大字殿地区は、古文書・古絵図等に「江馬氏之下館」と記されており、地元では古くから、字上井ノ内の水田の中に残る5つの大きな石を「五ヶ石(御花石)」と呼び、中世高原郷を中心に活躍した地方有力武家である江馬氏の館・庭園跡であると言いつてきてきた。

神岡町教育委員会は1973~1977年にかけて、この殿地区一帯において土地改良（基盤整備・客土）工事に先立つ試掘調査を実施し、庭園跡、南・西の掘跡や建物跡の一部を確認した。特に庭園跡は、故森 蘭庭園文化研究所所長により、室町時代の庭園として貴重なものであるという評価を受け、1977年には岐阜県史跡「江馬館庭園」の指定を受けている。

1978年には国史跡指定を前提とした国の埋蔵文化財緊急発掘調査補助事業として、遺構規模・館跡規模の四方向からの確認を目的として本格的な発掘調査を実施した。これらの調査によって、当遺跡は中世武家居館跡として全国的に見ても非常に保存状態のよい遺跡であることが明らかとなり、1980年、遺存状態の良い間違の6つの山城跡とあわせて「江馬氏城館跡」として国の史跡指定を受けた。

1993年、神岡町教育委員会では、江馬氏城館跡は国民共有の文化遺産であるという認識のもとに、遺跡の保護・保存は言うまでもなく、遺跡を広く一般に公開・活用することも大切なことであると考え、その歴史的意義をさらに追及するための発掘調査と、その成果に基づいた整備事業を計画した。

この整備事業では、史跡の公有化及び保護・保存を目的に、地元住民の意志を尊重し、さらに科学的な調査研究結果に基づき、将来的には歴史公園としての整備復元を目指している。

これらの事業は、神岡町教育委員会が事務を担当し、それぞれの学識経験者で構成した調査整備委員会及び文化庁・岐阜県教育委員会から発掘調査の指導や助言、整備方法の提言等を受けながら進めている。調査整備委員会の構成は、下記の通りである。

### 江馬氏城館跡調査整備委員会

委員長：	牛川喜幸（考古学・造園）	長岡造形大学教授
委 員：	加藤允彦（造 園）	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 保存工学研究室長
委 員：	吉岡泰英（建 築）	福井県埋蔵文化財センター
委 員：	宇野隆夫（考 古 学）	富山大学人文学部教授（～1999年9月） 国際日本文化研究センター教授（1999年10月～）
委 員：	川上 伍	神岡町長
委 員：	山本 登	江馬遺跡保存会長（1998年度）
	家越 一三	江馬遺跡保存会長（1999年度）

なお、これまでに以下のとおり整備委員の変更があった。

1994年度：	前川 要（考古学）	富山大学人文学部助教授
	田家幸夫	江馬遺跡保存会長
1995年度：	宇野隆夫（考古学）	富山大学人文学部教授
	洞口英夫	江馬遺跡保存会長
1996年度：	前川 要（考古学）	富山大学人文学部助教授
1997年度：	沖野好夫	江馬遺跡保存会長

#### (b) 発掘調査の経過（第1表）

発掘調査の主体は神岡町教育委員会であり、調査整備委員会の指導に基づき、遺跡の保護・保全のため、また整備に必要な資料を得るために調査を、1994年度から計画的に実施しており、その概要是第1表にまとめたとおりである。1994年度から1996年度は富山大学人文学部考古学研究室に委託し、1997年度からは町単独の調査体制に移行し、調査を実施している。

なお、各年度の調査の目的および概要については、第3章に記述しているので参照されたい。

第1表 江馬氏下館跡の発掘調査実績表

年 度	調査地区	調査面積 (m <sup>2</sup> )	事業費 (千円)	備 考
1976年度	庭園周辺	2,940		殿地区の土地改良工事に先立つ試掘調査
1977年度	堀内地区北東部建物群 南端・西堀端部周辺 南堀外側地区	2,610		殿地区的土地改良工事に先立つ試掘調査 岐阜県史跡「江馬氏庭園」指定
1978年度	遺跡範囲確認調査	3,060	10,000	公良国立文化財研究所・福井県教育庁朝倉氏遺跡 発掘調査研究所の指導を受ける(●)
1994年度	堀跡地区	1,630	24,357	整備のための発掘調査 富山大学人文学部考古学研究室に全面委託(●)
1995年度	門前地区 園池地区	1,210 140	25,764	整備のための発掘調査 富山大学人文学部考古学研究室に全面委託(●)
1996年度	南辺地区	890	19,573	整備のための発掘調査 富山大学人文学部考古学研究室に全面委託(○)
1997年度	南堀延長部周辺地区	1,429	17,205	整備のための発掘調査 町単独の調査体制に移行(○)
1998年度	堀内地区北西隅部	288	6,020	整備のための発掘調査(○)
1999年度	堀内地区西辺	500	4,650	整備のための発掘調査(●)
総計		14,697	107,569	

\* 備考の●印は国庫補助事業であること、○印は県費補助事業であることを示す。

## (c) 整備事業の経過

1976～1978年度および1994～1997年度までの発掘調査成果の蓄積を受けて史跡整備事業を具体化するため、平成10年度(1998)に『史跡江馬氏城館跡整備基本構想』(以下『基本構想』とする)を策定し、以下の基本理念と整備テーマを設定した。『基本構想』では、下館跡地区を他の史跡整備のパイロット地区と位置づけ、平成11年度(1999)から平成20年度(2008)までの10年間を史跡江馬氏城館跡整備の当面事業計画期間として、主に下館跡地区公有地部分の整備を行うものとしている。またその後、平成21年度(2009)以降、概ね20ヶ年をかけて、状況に応じて適宜事業計画を見直しつつ、山城跡等の整備事業を進めるものとしている。

## 〈史跡江馬氏城館跡整備基本理念〉

- ・大前提としての遺跡の保存
- ・歴史的価値の追求と整備による活用
- ・地域住民の意向を尊重した歴史公園としての整備

## 〈史跡江馬氏城館跡整備テーマ〉

- －神岡の歴史と文化の発信基地「江馬の館」－いま、飛騨の地に蘇る花の御所づくり

この基本構想を現実化するため、平成11年度(1999)には『史跡江馬氏城館跡下館跡地区整備基本計画』(以下、『基本計画』とする)を策定し、平成12年度(2000)から平成20年度(2008)の予定で下館跡の整備工事を行っていく計画である。また、整備に必要な知見を得るために発掘調査も継続していく。

## 2 下館跡の現状(第2表)

下館跡史跡指定地の総面積はおよそ24,782m<sup>2</sup>である。神岡町教育委員会では、史跡指定地のうち下館跡遺構保存地区の公有化事業を進めており、その進行状況は第2表にまとめたとおりである。平成10年度(1998)国庫補助事業として、2,170m<sup>2</sup>の土地の公有化を実施している。

平成10年度(1998)末の未公有化面積4,686m<sup>2</sup>のうち、道路水路以外の約2,936m<sup>2</sup>の民有地は5人の地権者が農地(水田及び畑地)・宅地として利用しており、指定地内に2戸の住宅、その他倉庫などの付属建築物、庭木等の樹木がある。指定地内の東側の史跡内を南北に町道が、中央部には同方向に農道が走っている。

第2表 江馬氏下館跡史跡指定地の土地買い上げ事業実績表

事業年度	面積 (m <sup>2</sup> )	事業費 (千円)	備考
昭和53年度(1978)以前	4,197		
平成7年度(1995)	3,575	116,661	家屋移転補償1件含む
平成8年度(1996)	8,176	224,077	家屋移転補償1件含む
平成9年度(1997)	2,178	52,597	付属構築物移転補償1件含む
平成10年度(1998)	2,170	48,174	
公有化済面積	20,296	441,509	
未公有化面積	4,686		
下館跡遺構保存地区総面積	24,982		

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

### 1 遺跡の立地

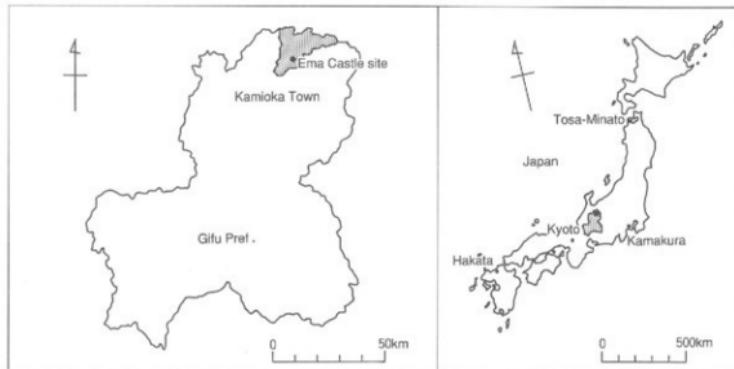
#### (a) 神岡町の地勢と遺跡立地（第1・2図）

神岡町は岐阜県北部、旧飛驒国古城郡高原郷に位置する。その人口は約11,600人、面積は312.34km<sup>2</sup>であり、うち耕地面積8.72km<sup>2</sup>、宅地面積2.32km<sup>2</sup>、山林面積221.52km<sup>2</sup>である。その広い土地のほとんどは山地・森林であり、標高差が700mもある複雑な地勢である。町や集落は山々の間を流れる谷や川に沿って立地し、神岡町市街地は河川の浸食により幾階層かに分かれた河岸段丘状の土地に成立している。市街地中心部の標高は約400mを測る。この地域は、昭和25年(1950)に舟津町・阿曾布村・袖川村が合併し、町制を施行したものであり、江馬氏下館跡の所在する殿地区は、古くは阿曾布村に属していた。

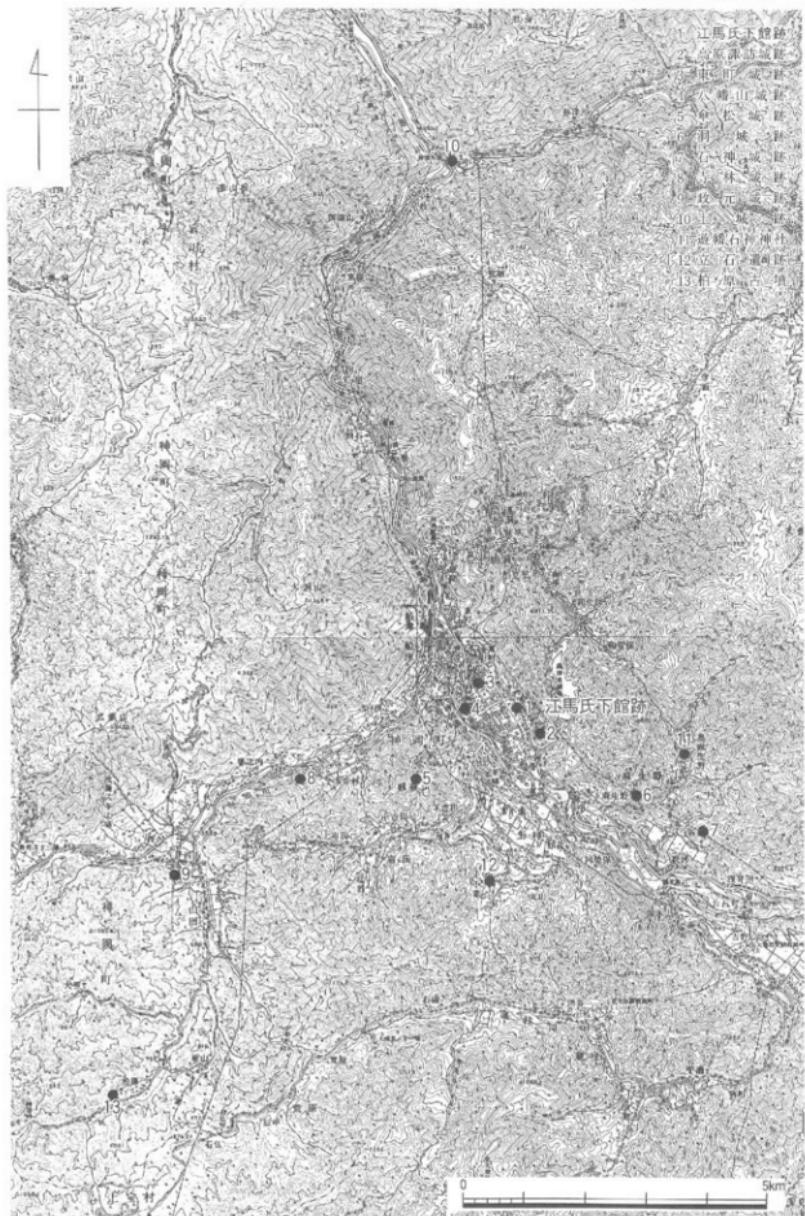
江馬氏下館跡は高原川中流域にある段丘の中央部、標高約455mに立地する。段丘は北アルプス連峰に源を発する小谷および蒲田川、双六川が合流し山峡を北流して日本海に注ぐ高原川（神通川水系右支）と、神岡町東北端に位置する北アルプスの支脈二十五山（標高1,327m）および天蓋山（標高1,527m）付近に源を発する和佐保谷の浸食により形成された河岸段丘である。

遺跡の背後にあたる東側は二十五山から南に向かって伸びる支脈が屏風のように段丘をさえぎり、尾根の南端頂および接線延長には「高原諫訪城」がある。現在は二十五山に発電所の導水管が通ったためその水量は減ってしまったが、かつては山麓裾部に豊富な湧水や谷水があり、この地域への水源となっていたようである。

遺跡西側は西堀跡から約55m西の付近において、旧高原川が南から北西に蛇行し段丘を分断して形成した標高差約7mの崖が自然の要害をなしている。その対岸の段丘を向野と呼び、現在は神岡鉱業の社宅街・一般住宅地となっている。



第1図 江馬氏下館跡の位置



第2図 江馬氏下館跡と周辺の城跡・遺跡 縮尺1/85,000

遺跡南側は、和佐保谷が二十五山から延びる支脈を浸食・切断して形成した低位段丘が南約1kmの付近まで広がっている。この地区はかつては耕地であったが、現在は工業団地や運動公園となっている。

北側の段丘端部には東町城が位置している。この遺跡は『飛州史』に「江馬之御館」と記すものであり、現在の神岡城である。この下館跡北側は段丘上で最大の広がりをもち、農耕地として利用していたが、第2次大戦後、神岡鉱業の社宅拡張や都市計画による住宅地化、学校建設等によって市街地化している。東町城から眺望できる最下位段丘上は江戸時代、舟津町村として周辺農村の商業地として発展し、現在も市街地が広がっている。

また、現在の神岡町・上宝村である旧飛驒国吉城郡高原郷の中心をなす集落は、いずれも高原川およびその支流に形成された段丘上に位置している。高原郷に活動した中世地方豪族に関連すると伝えられる城館跡は、下館跡の東側背後にある高原源氏城のほか、高原郷では東町城（「江馬之御館」）・洞城・石神城・寺林城・政元城・土城・尻高城・牛生茂城・天元城などがあり、これらの河岸段丘上に成立した集落の背後に立地しているものが多い。なお、荒城郷（現在の国府町・吉川町）の梨打城、越中の中地山城なども江馬氏との関係が伝えられている。

#### (b) 古絵図・古文書から見た下館跡の土地利用の変遷（第3・4図）

殿地区に現存する土地に関する最も古い記録として元禄檢地水帳（元禄7年、1694年）がある。しかしこれに付随するもしくは同時期の絵図がないため、水帳にあげている孫字名の正確な位置を知ることはできない。

第3図は江戸時代末～明治初年の江馬氏下館付近の絵図のトレース図である。この図を見ると「土井ノ内」・「土井ノ上」・「田ノ下」・「ほりはた」などの地名の地区を畠として利用していることから、周辺の田よりもやや高い地形であったことが予想される。明治初年頃は、このように僅かではあるがかつての館の地形・施設の名残を留めている。

館跡周辺地区に当たるであろう字「土井之内」には庭園遺構が遺存していたと推定できるが、江戸時代末期の文化年間（1804～1817）に、江馬氏と関係の深い臨済宗瑞岸寺12世陽堂泰旭がこの地区を再開発した。また文化末年に再建した瑞岸寺本堂の境内拡張に際して、その石垣として庭園の景石を利用したようである。

第4図は明治21年の地籍図であるが、これをみると明治初年には畠があった字中通り一帯が、すべて水田になっていることがわかる。ここには掲載しなかったが、昭和初年頃に撮影した当地の写真をみると、田の畔にかつては池の景石であったであろう巨石を用いていることがわかる。

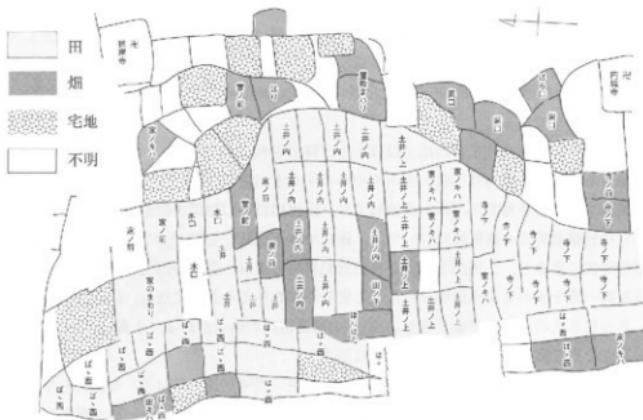
このように後世の耕地化等によって、地形に残っていたかつての館の痕跡は次第に失われ、明治の中頃には字名にその名残を残すだけになったようである。

#### (c) 遺跡周辺の現地形と原地形

神岡町大字殿地区一帯は1972年から実施した土地改良事業によって、その地形が大きく変わっている。土地改良事業施行前の地形（原地形）は、「土地改良事業計画概要書」（昭和47年10月31日付、岐阜県知事平野三郎宛、神岡町営土地改良事業実行認可許可申請書）では、「旧来の開拓は極めて小さく、そのうえ起伏多き複雑な地形をなしている。地形は東西1/60・南北1/350の傾斜で、地質は洪積層に属する。地質は地表から0～30cmまでは茶褐色粘質土質腐食土壤、30～80cmまでは黒色泥質土壤で花崗岩礫が混っている。80cm以上は黄褐色礫層で径30cmの礫および玉石が混じっている。」としている。

このように中通り一帯は南北に細長く緩傾斜で広がり、東側山麓から河川敷跡までの幅は南北に比して狭く、傾斜が急な地形であった。そして土地改良事業の施行に伴い、山麓の起伏が多い高地を削り取り、その土砂によって段丘端部の低地を埋めた。その結果、館跡西部の外郭部分は土砂の著しい

移動がなされ原地形は失われた。また中通り一帯、江馬氏下館跡を南北に縦断している町道周辺の変貌は著しく、土地改良事業とあいまって埋立て、宅地化、工場敷地等の開発が進み、市街地近郊として様相を一新し、かつての地形とはその姿を大きく変えてきている。



第3図 江馬氏下館跡付近絵図トレース図（江戸末～明治初年、小島道裕氏原図を一部改変）



第4図 江馬氏下館跡付近地籍図（明治21年）

## 2 歴史的環境（第2図・第3表）

高原川水系の河岸段丘上には古くから人々の営みがあったようである。石神・麻生野・殿・小萱・釜崎・朝浦・吉田など、高原川・吉田川によって形成された河岸段丘上や、山田など山田川沿いの河岸段丘上では縄文時代の土器・石器が出土している。麻生野地区からは縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土し、また同地区的遊轡石神神社は、縄文時代中期の硬土製人珠をはじめとする石器類を保管している。石神地区からも縄文時代中期の赤色顔料付有孔鉗付土器や石器・石棒などが出土した。上小萱の立石遺跡は縄文後～晚期のものであろう環状列石遺構であり、周辺から土器・石器なども出土している。遺跡の範囲やその変遷等、不明な点は多いものの、縄文時代を通してこれらの河川沿いに入々が暮らしていたようである。

一方、高原郷からは弥生式土器の出土はほとんど確認されていない。

飛驒における古墳の確認例は国府・古川を中心とする古川盆地と、高山盆地の宮川水系に集中している。本遺跡が立地する高原川水系の高原郷では、山田川沿いの柏原古墳が唯一の確認例である。

古代から中世鎌倉時代の高原郷については、確認できる遺跡や史料が少なく、明らかではない。

中世室町時代に至ると、江馬氏下館跡から13世紀以後の遺構・遺物が出土するようになる。また江馬氏が高原郷一帯を治めるようになったことを史料から知りえるようになる。江馬氏関連の史料については、葛谷鈎彦氏の詳細な考察（葛谷1970）、小島道裕氏の論考がある（小島1996・1998）。葛谷・小島氏の研究を第3表にまとめ、以下に簡略に示す。

高原郷の江馬氏は、13世紀中頃に伊豆國方郡江馬庄（現伊豆長岡町付近）を領有していた鎌倉幕府執権北条氏か、その在地御家人である伊豆の江馬（江間）氏のいずれかの一族が飛驒に所領を得て高原郷に入ったものようである。その後、南北朝の内乱を経て在地領主として成長して行ったと推定できる。

江馬氏が史料上に表われるのは14世紀後葉のことであり、「山科家文書」応安5年（1372）の記録がその初見である（岐阜県教育委員会1969）。「山科家文書」応安5年（1372）から嘉慶2年（1388）までの記録では「江馬伊四郎」、「江馬能登三郎」、「江馬民部少輔」の名前が確認できる。この3人の出自、系譜、また高原郷で伝えられる江馬氏と同族なのかも明らかではない。しかしすでに14世紀末には、高原郷にいた江馬氏の一族が室町幕府と直接結びついてその公務を執行したり、逆に反抗する力をもっていたことがわかる。「山科家記」文明3年（1471）・同4年（1472）の記録からは、江馬氏が室町幕府の有力者と強い繋がりを持ち、また認められるだけの力を持つ地方豪族であったことがわかる。「梅花無尽藏」延徳元年（1489）の記録、「北野社家日記」延徳3年（1491）・同4年（1492）の記事からは、江馬氏が高原郷から荒城郷近辺、つまり高原川流域に留まらず、既に古川盆地にまでその勢力を拡大し、また15世紀末まで在地の勢力としての室町幕府との関係を保っていたことが判る。

戦国時代になるとその動乱の中の江馬氏の活動が記されている。北飛驒高原郷は次節でも述べるように、信州、美濃を介して太平洋側と日本海側を結ぶ交通路の分岐点として戦略上の重要地である。江馬氏は甲州の武田氏と越後の上杉氏という二大勢力の間でその双方から圧力を受けつつも、越中に進出するだけの力を蓄えていたようである。

天正10年（1582）、本能寺の変によって織田信長が没すると、江馬輝盛は飛驒の支配権をめぐって南飛驒の三木白綱と戦ったが敗れて討死にし、高原譚坊城も落城した。このようにして、中世の北飛驒に雄飛した江馬氏は、近世への転換期に領主としての姿を消すこととなった。

第3表 江馬氏関係年表

暦年	江馬氏の動向	日本史上の動き
13世紀 1300	北条氏の一門または伊豆の江馬氏の一族、高原郷に入る	鎌倉時代
14世紀 1372	「江馬但馬四郎」 広瀬氏を通じ、管領細川頼之から室町幕府の指示実行命令を受ける	南北朝時代 1321 後醍醐天皇 雄武の新政 1336 足利尊氏 京都に入る 南北朝の分裂
1381	「江馬但馬四郎」 伊勢貞長を通じ、管領斯波義詮から室町幕府の指示実行命令を受ける	[1]
1383	「江馬能登三郎」 山科家源飛驒国江名子・松橋を押領する	[1]
1388	「江馬民部少輔」 室町幕府の指示実行命令を受ける	[1]
1400		1392 南北朝の統一
14世紀 1471	「江馬左馬助」伊勢真宗、飯尾為信・之種から室町幕府の指示実行命令を受ける	[2]
1472	「江馬左馬助」管領細川勝元から山科家に忠筋を尽くすよう指示を受ける	[2]
1489	万里集丸、高原郷、荒城郷を訪れ「江馬氏」の妻応を受ける	[3]
1491	「江間殿」室町幕府奉行人松田長秀・飯尾為規から北野社領飛驒国芦木郷の回復を命ぜられる 以後、「江馬氏」北野社領の飛驒国芦木郷の所領経営を委託される	[4]
1492	「和爾平太」江馬氏の使いとして、北野社に年貢を南院院に納める旨の返答を行う	[4]
1500 前葉		戦
中葉 1565	甲州武田氏、越後上杉氏の両勢力から圧力を受ける この頃の江馬氏の当主は「左馬介時盛」であるが、息子「常陸介輝盛」と対立する この頃、越中まで勢力を伸ばす	国
後葉 1572	「輝盛」、父「時盛」を殺害、本城高原諏訪城支配	1551 第1回川中島の合戦
1576	上杉氏の軍勢、飛驒侵攻	1572 武田信玄没
1582	「輝盛」、織田信長を後盾とした市飛驒の三木自綱と対立。 「輝盛」、吉城郡荒城川で三木自綱軍に敗れ、討死 高原陣跡城落城	1578 上杉謙信没 1582 本能寺の変、織田信長没
1600		1600 関ヶ原の合戦

・(江馬氏に関する記述がみられる古文献)

[1]『山科家文書』、[2]『山科家礼記』、[3]『梅花無尽藏』、[4]『北野社日記』。

・16世紀中葉以降の記事は『岐阜県史』通史編中世 1969 岐阜県、『岐阜県史』通史編近世 1968 岐阜県による。

### 3 高原郷の街道と中世城跡（第5・6図・第4表）

(a) 高原郷の街道と江馬氏 (第5図)

江馬氏城館跡の所在する高原郷は飛驒国の最北端に位置し、越中・信州と接していることから古くより交通の要所となっていた。中世鎌倉時代において交通上最も重要であったのは、幕府が所在する政治の中心地鎌倉との交通である。この鎌倉への道を鎌倉街道と呼ぶ。飛驒のみならず、北陸諸国から鎌倉のある関東方面に向かうには、日本アルプスを越え、信州・甲斐に抜けるのが最も近道であり、飛驒の鎌倉街道は北陸諸国と鎌倉とを結ぶ道としても重要であった。この鎌倉街道の一つが越中から高原郷を抜けて信州に至る有峰街道であり、鎌倉幕府が倒れた後は飛驒・北陸諸国と信州を結ぶ道として信濃街道・信州街道と呼ばれるようになった。また飛驒と越中を結ぶ街道を越中街道と呼び、主要なものは越中東街道・越中中街道・越中西街道の3つである。高原郷内にはこれらの主要街道を連絡する幾つかの脇街道も通っていた（第5図）。

江馬氏下館跡は、越中東街道と信濃（有峰）街道とを結ぶ上宝道沿いの河岸段丘上に位置する。さらに館の南には山之村道と吉田街道の分岐点があり、これらを通じても街道と連絡がとれる。また江馬氏城館跡に指定されている城跡は、これらの街道沿いやその分岐点など交通上の重要地に位置している。江馬氏にとって、軍事・商業の両面において大切な意味をもつ交通路を掌握することが、高原郷を支配する上で重要な意味をもつことであったのだろう。

(b) 周辺の中世城跡 (第5図, 第4表)

高原郷には下館跡のほかにもいくつかの中世城跡がある。第4表に下館跡周辺の中世城館跡を一覧表にまとめ、第5図には街道と城跡との位置関係を示し、先学の研究を参考に以下に簡単に記す。



第5図 中・近世の吉城郡の交通路 縮尺1/450,000

**高原源訪城跡**：江馬氏下館の東側背後、二十五山から南に向って延びる尾根の南端頂および稜線延長上、保木戸平（城山）山頂に位置する。周囲の山々の峰はいずれもこれより高く、包囲された印象をうけるが、南方は水かさの多い高原川の急流に臨んでおり、比較的攻撃しにくい位置にある。高原源訪城の南側において山之村道が上宝道から分岐し、山之村で鎌倉（有峰）街道と連絡する。高原源訪城は江馬氏の本城であると伝えるが、築城年代・築城者とともに不明である。

本丸は南北30m・東西16mの長方形の平場であり、その下には幅6～10mの腰曲輪がある。本丸北側尾根の延長に堅堀や堀切を設け、尾根筋からの攻撃を防いでいる。本丸の南方、直高12m下に東西の方向に山地を掘り切った長さ42m、幅18mの堀切がある。この堀切より5.5m下った所に、東西9.6m・南北20mの二の丸（出丸）があり、幅5m前後の腰曲輪がめぐる。二の丸の南端に堅堀と堀切を設けている。

**洞城跡**：神岡町の中心地から高原川をややさかのほった麻生野地区の山上にある。「飛州志」には城主は麻生野右衛門大夫直盛と記している。彼は永禄7年（1564）に55歳（一説には57歳）で没しており、築城は天文頃と考えられる。直盛の跡を継いだ慶盛が本家の輝盛と不和になり天正6年（1578）8月18日夜、輝盛の軍勢に攻められ、慶盛は自害し、城も焼け落ちたと伝わっている。

山頂に東西42m、南北13mの長方形の本丸を設け、本丸西側に東西33m、南北14mの曲輪がある。この曲輪から南側・北側それぞれの斜面に1本ずつの堅堀を設ける。また、本丸北側には堀切を設け尾根筋の防御としている。

**石神城跡**：神岡町石神地区にある。洞城と石神城は共に高原郷と鎌倉（有峰）街道を結ぶ上宝道沿いに立地し、また二つの城の間に広がる河岸段丘面を守るように立地する。江馬時経の築城とされる。

本丸は東西27m・南北19mの楕円形の平場であり、東側に南北方向の堀切、西側南北それぞれの斜面に1本ずつの堅堀を設ける。この堅堀の西に平場があるが、送電線の設置によって地形がかわっている。この平場の南西端部に東西方向の堀切を設けている。

**寺林城跡**：神岡町寺林、玄蕃山の頂部に立地する。高原郷の主要街道である越中東街道沿いである。本丸は東西23m・南北10mの方形の平場であり、西に3段の平場が達なるが、堀切、堅堀はない。

**政元城跡**：神岡町西にある。高原郷の主要街道である越中東街道はこの地で巣山・十三峠を越える本道と、数河畔を越える脇道（数河街道）に分かれ、政元城はその分岐点の抑えであったと推定できる。江馬氏の家臣吉村政元の居城とも、正主本馬の居城とも伝える。本丸は東西20m・南北10mの楕円形の平場であり、幅4～10mの腰曲輪がめぐる。西側に東西16m・南北10mの曲輪がある。その南に堀切を設け、尾根筋への防護としている。

**土城跡**：神岡町教、高原川と跡津川の合流点の岩山である牛首城山にある。高原郷の主要街道である越中東街道と、鎌倉（有峰）街道を結ぶ脇街道である有峰道はこの城の麓の大字土より分岐して大多和峠を経て有峰・富山に至る。土城はその分岐点にあり、北方に備えると共に、江馬氏との関係が伝えられる越中中地山城（富山県上新川郡大山町）との連絡にあてられたものであろう。江馬氏の家臣一ノ瀬清四郎の居城であったとも伝えられている。頂部に二段の平場がある。

**江馬之御館跡**：現在の神岡町東町、江馬氏下館の北方、殿段丘の段丘端部に位置する。「飛州志」によれば、江馬氏が武田氏に属した後、武田信玄の越中侵攻のため、その家臣山県昌景の縛張りで造り、後の金森長近の入国際には、その家臣山田小十郎が人れ置かれたとされる。

**梨打城跡**：吉城郡国府町八日町、古川盆地を流れる宮川の支流荒城川が東の山峡に入つてまもなく、北岸の桐谷と十三峠の向峡谷に挟まれた標高749mの山頂にある。越中東街道はこの城の東側を抜けた大阪峠から高原郷に入り、梨打城はその守りであったと考えられる。「飛州志」には高原郷源訪城城主江馬當介輝盛の持ち分と記され、江馬氏が南方を固めるために造った出城と考えられるが、築

城者、築城年共に不明である。天正10年の荒城川の合戦で輝盛が三木氏に破れた際、本城高原諭訪城と共に落城したと伝わる。本丸は南北36m、東西24mの不整三角形の平場であり、幅4~8mの腰曲輪がめぐる。本丸を中心に三又状に伸びる尾根上に曲輪を設け、掘切、堅壁で防御している。

その他江馬氏持ち分と伝わる関係城跡には「八幡山城」・「笠松城」(神岡町)、「尻高城」・「天元城」・「牛生茂城」(上宝村)、「中地山城」(富山県上新川郡大山町)などがある。

第4表 江馬氏下館跡周辺の城跡一覧表

番号	城跡名	説 明	類 型	標高 (m.)	北支 (m.)	アカカラ の城跡群 (m.)	立 地	現 状	序 号	参考文献
1	下館跡	しもやかたあと		496			西岸斜面下部 河山底あきりやまじょう	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	2,5,4,5,6,7, 9,10
2	高岸頭跡	たかはらわきやまじょうあと		610	364	0.5	堤根跡先端部 堤根跡	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	2,3,4,5,6,7, 9,10
3	東丸跡	ひがしまじょうあと		423			政光院 町史跡	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	2,3,4,5,6,7, 9,10
4	八幡山跡	はちまんやまじょうあと		451	30	1	山頂 町史跡	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	4,5,9
5	鬼松城跡	かしまつじょうあと	青平城主なしじょう	807	373	2.1	山頂 町史跡	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	4,5,9,10
6	用城跡	ようじょうあと	雄空野跡あそやじょう	530	74	2.6	平野丘陵地 堤防跡	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	2,3,4,5,6,7, 9,10
7	若神城跡	わかみみじょうあと	雪城あんづじょう 二軒宿ふたこゑじょう	703	483	3.7	山腹 山腹	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	2,3,4,5,6,7, 9,10
8	寺原城跡	てらばやしにじょうあと	玄蕃城げんぱじょう	622	26	3.7	平野丘陵地 堤防跡	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	2,3,4,5,6,7, 9,10
9	欽光城跡	きんこうじょうあと	山田城やまだじょう	741	39	6.2	堤防跡先端部 堤防跡	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	2,3,4,5,6,7, 9,10
10	上城跡	じょうじょうあと	鬼ヶ城跡がじょう	355	62	9.2	山腹 山腹	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	2,3,4,5,6,7, 9,10
11	鶴町城跡	なしうじょうあと		749	197	12.5	山腹 山腹	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	2,6,7,10
12	式高城跡	しきたかじょうあと			7			要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	7,8
13	天元城跡	てんげんじょうあと				9.5	尾熊跡先端部 尾熊跡	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	8,9,10
14	牛生茂城跡	おうじょうあと				4.8			越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	8
15	中村庄城跡	なかむらやまとじょうあと		380	35	26	丘陵 町史跡	要害跡 二ノ馬氏城跡	越後守・城跡 二ノ馬氏城跡	1,2,6,7,10

・番号は第5回と一致する

## 第2章3(b)・第4表の参考文献

- 1 大山町教育委員会 1994 「大山の歴史」
- 2 神岡町教育委員会 1979 「江馬氏下館跡発掘調査概報」
- 3 神岡町教育委員会 1981 「江馬氏下館跡保存管理計画策定報告書」
- 4 神岡町教育委員会 1981 「神岡の文化財」
- 5 神岡町教育委員会 1994 「飛驒の神岡」
- 6 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995 「江馬氏城館跡下館跡発掘調査報告書Ⅰ~」
- 7 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1996 「江馬氏城館跡Ⅱ下館跡門前地区と庭園の調査~」
- 8 上宝村 「上宝村誌」
- 9 森本一雄 1987 「定本飛驒の城」 郷土出版社
- 10 吉岡熙・村瀬一郎・横山泰 1979 「岐阜県」「日本城郭大系」第9巻 新人物往来社
- 11 佐伯哲也氏提供の絵図 (『江馬氏城館跡下館跡発掘調査報告書Ⅰ~』掲載) を参考にした。

## 第3章 下館跡の概要と調査の経過

### 1 下館跡の概要（第6図）

江馬氏下館跡は北飛騨を治めた中世武家である江馬氏の居館跡であり、1980年に国の史跡指定を受けた江馬氏城館跡の中心遺跡である。

1973年度に江馬氏居館跡・庭園跡との伝承をもつ神岡町大字殿地区において土地改良工事に先立つ試掘調査を行い、広範囲にわたる遺構の存在を確認している。この調査によって庭園遺構の概要をほぼ確認し、園池に隣接した建物跡、館を囲む堀跡の存在も明らかになった。以後、1978年にかけて、調査区を拡大しつつ堀内外の発掘調査を行い、建物跡、館の西・北・南の三方を囲む堀跡などを検出している（神岡町教育委員会1979）。

1994年度は、それまでの調査によって部分的に確認していた館の三方を囲む堀跡の規模と年代を確認することを主目的とする調査を行った（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995）。

1995年度は、館の門前の利用のあり方と堀内外を結ぶ道路を確認するための門前地区的調査と、堀内の園池地区的トレレンチ調査を行った（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1996）。

1996年度は、門前地区で確認した南北道路の南への延長の有無と、史跡指定地南辺での遺構の状況を確認するための南辺地区的調査を行なった（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1997）。

1997年度は、門前地区と南辺地区的境を明らかにし、堀外地区西側から南側区画の様相を明らかにするため、南堀延長部周辺の調査を行なった（神岡町教育委員会1998）。

これらの調査成果を受けて、1998年度には、史跡整備事業に向けて「史跡江馬氏城館跡整備基本構想」（以下、「基本構想」とする）、1999年度には「史跡江馬氏城館跡下館跡地区整備基本計画」（以下、「基本計画」とする）を策定し、その検討作業時にこれまでの調査で確認した建物構造・遺構配置・地区名称等の再検討・変更等を行なった（神岡町・神岡町教育委員会1999・2000）。

なお、建物構造の再検討とともに、本報告書において堀内地区の建物・横列番号の再整理と変更を行い、今後はこの番号で表示するものとする。これまでの報告書等における建物番号との対応は第5表にまとめ、再検討した礎石建物の構造とともに、次項に示す。

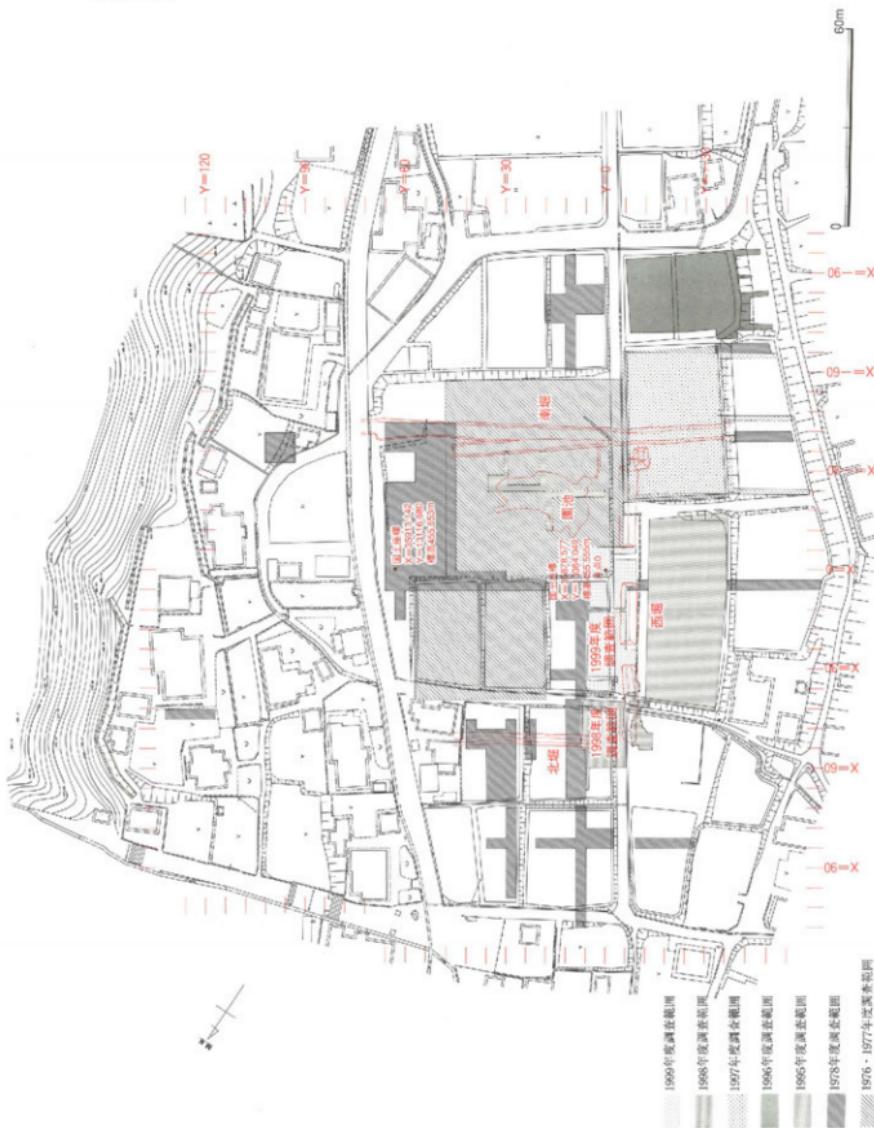
以下に、これまでの調査成果の概要をまとめる。

#### (a) 堀内地区的調査成果（第7図・第5表・付図1）

堀で囲んだ館の中心部（堀内地区）の規模は東西推定114m、南北97m程度であり、東側の山を背にして残りの三方を堀で囲んでいる。建物配置と薙研堀の位置からみて、正面は西を向く。

北堀：幅約1m、深さ約1mの箱堀である。西堀の延長ラインよりも東側でその東端部を確認し、西堀とは直接つながらない。堀の内側に接して、幅3m、高さ0.5~0.8mの土壘状の高まりがある。

南堀：幅約4m、深さ約1.1mの箱堀であり、角度をやや東に振って新たに掘り直している。掘り直した新堀は幅約5m、深さ約0.7mの箱堀である。堀埋土の土壠の検討から南堀は新旧2時期、6段階の変遷をたどることが判った。旧堀の壇上には堀内地区側からの流れ込み層があり、土壠を伴っていたと考えられる。新堀にはこのような層が堆積しない。旧堀の西方には園池の排水路と推定される石組み溝が接続する。南堀新堀は、この石組み溝以西では旧堀跡をそのまま利用している。南堀旧堀は西堀南端部とは直接つながらず、これを越えてさらに西に伸び、西堀から約30m西にある地形の段差部において、その西端部がそのまま西に向かって開いて終わっている。



第6図 検査地区周辺の地形と発掘区位置図 縮尺1/1,470

**西堀**：館の正面であり、館への導入部となる二つの土橋がある。北側の土橋1は幅約3m、南側の土橋2は幅約7mを測る。堀は、上橋1の北側では幅約4.4m、底幅約1.8m、深さ約1.4mの箱堀であり、南側では幅約4.5m、底幅約0.2m、深さ約3mの素研堀である。西堀兼研堀はその南端部で西に屈曲する。屈曲部は南北長約7m、東西幅約4mの箱堀になる。この箱堀部の堀底の北半部がさらに一段低く、南側は深さ約1.2m、北側は深さ約2mである。西堀の埋土は自然の堆積ではなく、整地土で一度に埋め戻している。この埋土の流れ込みの方向から、西堀の内側に土塁の存在が想定できる。なお、堀内地区の建物配置と土橋の規模から、土橋1を脇門、土橋2を主門と考えている。

これらの堀は、その機能時にはわずかに水が溜まる程度であり、基本的には空堀であったようである。出土遺物のうち最も新しい年代を示すものは16世紀前葉のものである。

**庭園**：館の南西隅に位置する。1995年度に行なったトレンチ調査により東西約28m、南北約14mの規模であり、中央部には東西約7m以上、南北2.5m以上の中島を築くものであったと推定している。池底は素掘りの状態であり、地山層まで削った後に、掘削土を用いて池の汀部と中島に盛土している。池辺の施設や付属する建物の配置、石材の使い分け、景石の据え方などから、京都の庭園様式にならって造ったものであると推測している。層位観察による南堀・盛土との関係から、圓池は館の造成時に印堀・土塁と一緒に施設として成立したと考えている。最も新しい年代を示す出土遺物は16世紀初めのものである。

**建物**（第7図・第5表）：1978年度までの調査において、堀内地区では第1～3期の3時期の遺構群の存在を確認している。館の成立期を含めて3回の大規模な整地を行ったと考えられるが、第3期の遺構面を構築した造成土の大部分は後世の削平によって失われている。第1期の遺構については、第2・3期の遺構検出面である最上層遺構面構築上層直下の整地土層から掘り込む柱穴等をトレンチ調査によって部分的に確認したのみであり、その全般的な配列や時期決定は今後の課題としている。最上層遺構面で検出した堀内地区的建物跡には、礎石建物9棟、掘立柱建物1棟、横列4列、溝跡等がある。これらの建物群はその主軸方位の違いから2時期あったことを確認し、1978年度概報ではこれをA期・B期（第2期・第3期）にわけて整理している。両者の新旧関係については一部の礎石の抜き取り穴の重複（SB43・SB51）や、礎石の検出レベルから、A期（SB41-44・46、SA42・43・45・47）がB期（SB48～51）に先行することが判明している。A期建物は遺構の残存状態が良好で平面規模も推測できるが、B期建物については削平を受け、平面規模は明瞭ではない。

建物と南堀との主軸方位をみると、古いとしているA期建物と南堀新掘の主軸方位が一致し、南堀新掘段階にA・B向期の建物が伴うと指摘できる。これら各期の遺構には、建物跡の主軸方位、堀の重複状況、庭園と堀の関係等にみられるように前構築工法の跡襲の意識が強くうかがわれる。

1999年度の『基本計画』策定に際して、史跡整備事業の対象時期となるA期建物（SB41-44・46、SA42・43・45・47）の構造の再検討を行い、第7図のように整理した。

SB41は東西5間（7尺等間）、南北3間（南から9尺・10尺・9尺）、南側に5尺の縁が付く。

SB42は東西5間（西から9尺・7尺×3間・14尺）、南北5間（7尺等間）である。

SB43は東西7間（西から4尺・8尺・6.5尺・8尺×2間・6.5尺×2間）、南北4間（南から7尺×3間・9尺）、南側の西から3間分に幅7尺の縁を持つと推定する。

SB44は母屋は東西6間（6.5尺等間）、南北4間（6.5尺等間）、北側に1間（6.5尺）の縁を持ち、西側に4間分（6.5尺等間）延びるものと考えられる。

SB46は東西5間、南北3間（ともに6.5尺等間）の身舎の西・南・東の三方に10尺の庇が回り、南西隅部南辺に幅4尺、西辺に幅8尺のすの子縁が付くと考えられる。

SB41とSB42、SB42とSB44、SB44とSB46は、それぞれ渡り廊下で繋がっていたと考えられる。SB41は連侍または馬屋、SB42は主殿、SB43は台所、SB44は常御殿、SB46は会所と推定している。

(b) 堀外地区の調査（第6図、付図1）

1978年度調査では遺構の広がりを確認するため、堀の外側でもトレンチ調査を行っている。館の北側・南側では南北に長軸をとる十字型のトレンチをそれぞれ1本・1本設定した。西側は西堀から段丘端部まで伸びる東西トレンチを1本、段丘端部に東西方向に2本、南北方向に1本のトレンチを設定した。各トレンチでは柱穴・土坑・堅穴住居等を検出したようであるが、1978年度概報では、館外での明確な遺構の広がりは確認できなかつたと報告している。

1995年度から1997年度にかけて、西堀西側から史跡指定地南辺にかけての調査を行い、堀外地区は南堀延長部を境として、その北側を館正面の門前地区（区画5～7）、南側を館で使用する諸道具類の制作・修理等を行う職人の工房地区（区画1・2・4）に分けていることがわかった。なお、1997年度報告では、南堀延長部の南側の区画1～4を「南外部地区」としていたが、「工房地区」と変更する。

門前地区では道路や柵列によってさらに3つの方形の区画（区画5～7）を設けており、掘立柱建物8棟、柵列8列、井戸11基、竈跡1基などを検出し、大きく3時期の変遷をたどることが明らかになった。門前地区第1段階は館を整備する前であり、総柱式掘立柱建物（SB01・SB06～08）が散在する。門前地区第2a段階は館の整備に伴って建物を建てる時期であり、柵列（SA01）によって土橋1（脇門）前の区画7、土橋2（主門）前の区画6に分けている。区画6では堀内地区的A期建物に主軸を揃えた建物が建ち並び（SB02・03・05、SA02）、区画6・区画7は広場という景観が出現する。西堀南端部前面の区画5と主門前の区画6の境は未調査のため明らかではないが、区画6側で道路を確認しており、その南側に柵列を設けて区画していたと推定できる。門前地区2b段階は、堀内地区と共に建物を建て替える時期であり、区画6と区画7の境の柵列SA01を堀内地区的B期建物に主軸を合わせて馬屋SB04、さらにSA02に建て替える。区画6の建物はなくなり、門前地区的全ての区画が広場状になっていたと考えられる。

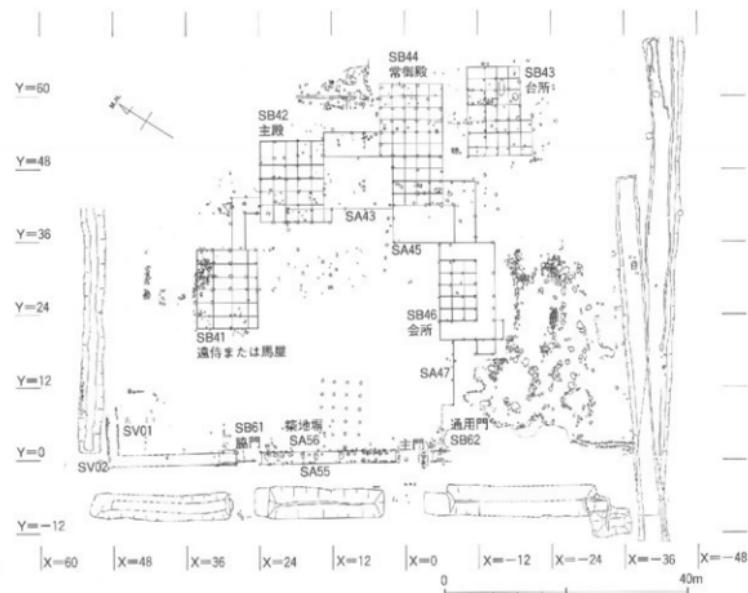
工房地区でも、柵列や道路、地形の段差を利用して3つの区画（区画1・2・4）を設けている。掘立柱建物17棟、柵列11列、堅穴住居3棟、上間状上坑8基、土坑、炉跡等を確認した。堅穴住居に炉跡が伴うこと、カラミや生漆が付着した漆塗膜が出土したことから、館の南辺は職人の作業場の地区であったと考えられる。江馬氏下館I期には区画4で総柱式掘立柱建物SB21ができる。館を整備する江馬氏下館II A期には、道路と柵列、地形の段差を区切りとした3つの区画（区画1・2・4）それぞれに、堀内地区的A期建物に主軸を揃えた掘立柱建物と広場を設けている（区画1にSB11、区画2にSB15、SI02、区画4にSB22・26）。同II B期には、各区画ごとにその配置を踏襲して建て替えを行っているが（区画1ではSB12、区画2ではSB16・17、SI01）、その主軸方位は堀内地区的B期建物と一致しない。区画4ではそれまで広場であった西側部分にもさらに堅穴住居や掘立柱建物ができる。館としての機能を他所に移転する江馬氏下館III期にも作業場としての利用があったものと推定している。下館では館の整備時に堀外地区においても館に必要な施設を計画的に配置し、その区画の使い分け、身分による住み分けを行っている様子が明らかになった。

また、下館がある殿地区の近世村落の復元を行ったところ、近世には殿段丘の南端部に諏訪社と天神社が、北東端部に加茂社が、北端部に白山社があったことがわかった。これらの宗教施設は、下館の時代にこの地に勧請されたものと考えられ、殿段丘全体に下館の施設が広がるものと推定される。

第5表 堀内地区建物番号対応一覧表

	本報告書以降の 署内地図 建物番号	「基本計画」に おける建物番号	1978～1997年度 報告における 建物番号	建物形式	性 格	検出年度
A 期建物	S B41	S B 1	S B01	礫石建物	造作または周屋	1978
	S B42	S B 2	S B02	礫石建物	主殿	1978
	S B43	S B 3	S B03	礫石建物	台所	1978
	S B44	S B 4	S B04	礫石建物	常御殿	1978
	S B46	S B 6	S B06	礫石建物	会所	1978
	S A45	S A 5	S A05	掘立柱柵列		1978
	S A47	S A 7	S A07	掘立柱柵列		1978
	S A42		S A02	掘立柱柵列		1994
	S A43	S A1		礫石柵列		1999
	S B52		S B12	礫石建物		1994
	S A41		S A01	掘立柱柵列		1994
B 期建物	S B48		S B08	掘立柱建物		1978
	S B49		S B09	礫石建物		1978
	S B50		S B10	礫石建物		1978
	S B51		S B11	礫石建物		1978

神西町・神岡町教育委員会



第7図 地内地区A期建物配置図 縮尺1/800

### (c) 出土遺物の概要

中世の遺物は上層器皿を中心として5800点ほどが出土しており、その出土量は堀内地区に多い。堀外地区においては門前地区では極端に少ないものの、工房地区では一定量の出土があった。出土土器・陶磁器の種類は、土師器、瓦器、中国陶磁器、白瓷系陶器、瀬戸・美濃、珠洲、八尾、常滑などである。13世紀後半から16世紀中葉にかけての各時期の遺物で構成され、15世紀前半の遺物量が最も多く、館の最盛期と考えられる。また、全体的な量は少ないものの16世紀中葉までの遺物が見られる。

### (d) 江馬氏下館跡の変遷

以上の調査成果に基づき、江馬氏下館全体の変遷を、次のⅠ～Ⅲ期に時期区分している。

**江馬氏下館Ⅰ期**（13世紀後半～14世紀）：一定の遺物が出土するようになり、この地の利用が始まる。縦柱式建物が散在し、堀はまだ造っていない段階である。1994年度報告の江馬氏下館Ⅰ期、1995年度報告の門前地区第1段階に相当する。

**江馬氏下館Ⅱ期**（14世紀末～16世紀初め）：方約一町の館を整備した段階である。建物主軸の方位の変化に基づき、ⅡA期・ⅡB期に細分できる。

江馬氏下館ⅡA期（14世紀末～15世紀前半）には堀・庭園を造成し、館としての機能が出揃う。また堀外地区にも計画的に区画を設け、門前地区の宿直屋や馬屋、広場、工房地区の手工業生産の場など、館に必要な施設を計画的に配置している。1978年度概報のA期建物の時期である。遺物の出土量は最も多く、館の最盛期である。1994年度報告の江馬氏下館2-a1期、1995年度報告の門前地区第2a段階に相当する。

江馬氏下館ⅡB期（15世紀後半～16世紀初め）には堀内地区と門前地区では主軸方位を変えて建物の建て替えを行い、門前地区には馬屋が出現する。工房地区でも建物配置を継承しつつ建て替えを行うが、その主軸方位は堀内地区とは一致しなくなる。1978年度概報のB期建物の時期であり、1994年度報告の2-a2期、1995年度報告の門前地区第2b段階に相当する。

**江馬氏下館Ⅲ期**（16世紀中頃～16世紀末）：江馬氏が下館の機能を他所に移してから、1582年に三木氏に敗れ領主としての江馬氏の歴史が終わるまでの時期である。1994年度報告の江馬氏下館2-b期と3期の一部に相当する。地図図や絆張図等の検討から江馬氏下館Ⅲ期には、東町城・高原源訪城が本拠であった可能性が高い。

なお、A期建物に先行する1978年度概報の堀内地区第1期については、遺構の配置等不明な点が多く、この時期変遷中には対応できていない。第1期も館の創立に関わる時期であるとされ、Ⅱ期はⅡA期の前にもう一時期細分できると想定できるが、その対応、細分については今後検討していく。

## 2 調査の方法

**遺跡の標示**：岐阜県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はGO7K00093である（岐阜県教育委員会1989）。遺跡略号は、Gifu Emayakata をあらわしたGEとし、調査年度を組合わせてGE98・GE99と標示した。

**調査区の設定**：基準点網の設定は、1978年度調査時に使用した座標をもとに行っている。これは当時の保存原点である杭1（直角座標第7系国土地標X=35878.577, Y=13064.049, Z=455.555）を原点0として、杭1と杭2（直角座標第7系国土地標X≈35913.142, Y=13116.680, Z=455.653）を結ぶ軸線を基準として、この軸線をY軸、杭1を通りこれに直交する軸線をX軸とした。座標は1mを単位とした数値によって表示している。この座標の方向は堀内地区のA期遺物の軸線にあわせたものであり、X軸が磁北から西へ約33度振っている。

なお、調査地区内の杭は6mごとに設定し、遺構実測・遺物取り上げの基準として用いた。

**調査地区基準杭の再測量について**（第6表）：1999年度調査中に、発掘調査現場における基準点網の設定に使用している保存原点杭1が1994年度調査終了時に転倒し、それでいてことがわかったため、倒れた保存原点杭1の再測量を行い、同時に以後の発掘調査の基準点網設置時の基準とするため、史跡指定地外の道路上等に正しい基準点網座標の測量ビンの設置を行った。再測量の結果は、第6表のとおりである。転倒している現地の保存原点杭1については、今後、保存原点杭11（直角座標第7系国土座標X=35878.374, Y=13064.107, Z=455.543, 調査座標X=0.06, Y=0.10, レベル455.543）と読み替えるものとする。杭2については移動していなかった。1995～1998年度調査時は、杭11（調査座標X=0.06, Y=0.10）を原点0とし、杭11と杭2（調査座標X=0, Y=62.86）を結んだ軸線をY軸、杭11を通りこれに直交する軸線をX軸として、基準点網を設置して現場の図化・記録作業を行っており、今後、必要に応じて記録図面等の修正を行っていく。1998年度調査時の図面・記録等の座標値は、本報告書の作成作業時に正しい基準点網座標値に修正した。

**調査の方法**：1998年度は、調査予定地東辺を1978年度調査時のトレント（9トレント）に合わせ、まずこのトレントを試掘坑として、表土、旧耕作土から地山層に及ぶ基本層序を確認した。1999年度は前年度調査地区と隣接していたため、試掘坑は設けず、前年度の知見を参考にした。調査地区全体の旧耕作上層までを重機を使用して掘削し、それより下層は人力により発掘した。個々の遺構調査については、柱穴は柱痕跡や抜き取り跡を平面的に観察した後、半裁して断面観察を行ない、掘り残した埋土はそのまま埋め戻した。土坑等の大型の遺構は二分法、あるいは四分法を用いて発掘した。なお柱穴の完掘、半裁の区別は、巻末の別表7に記した。

**遺構番号の付し方**：江馬氏下館跡の発掘調査では、奈良国立文化財研究所の標示方法に準じて、遺構の性格に応じて以下の記号を用い、各記号毎に通番で番号を付している。

SB：建物・門 SA：橋・柱列 SI：堅穴住居 SD：溝 SK：土坑・倒木痕

SP：穴・柱穴 SV：石積み・石列 SF：道路

SX：その他の遺構（土間状上坑・炉跡・竈跡・不明石列等）

第6表 調査基準点網設置原点杭の国土座標値

下鉄跡 発掘調査地内 保存原点杭	本年の調査基準点網設置原点 杭の座標値(1994年測量)		1995～98年度調査時の調査基準点 網設置原点杭の座標値(1999年測量)		備考
	直角座標第7系 国土座標値	調査座標値	直角座標第7系 国土座標値	調査座標値	
(X座標)	35878.577	0.00	35878.674	0.06	今後、現地保存原点杭1は「杭11」と読み替える
杭1 (Y座標)	13064.049	0.00	13064.107	0.10	
(レベル)	455.555		455.543		
(X座標)	35913.142	0.00	35913.145	0.00	
杭2 (Y座標)	13116.680	62.86	13116.678	62.86	
(レベル)	455.653		455.652		

※レベル値単位はm

前節に記述したとおり、本報告において、堀内地区の建物・柵列番号の付け直しを行った。今後の調査によって新たに検出した遺構については、これまでの遺構番号の付け方を踏襲し、遺構の性格(記号)毎に本報告書で使用した番号以降の番号を付すこととする。なお、今後の調査検討により、すでに確認している遺構の性格が変わった場合(柵列から建物等)は、前の記号番号を欠番とし、新たな記号番号を付け直し、その対応関係を明記することとする。

なお、本年度の遺構番号は、SB61・SA51・S121・SD21・SV01・SX31から数えたが、整理作業時の遺構の性格の変更等に伴い、欠番になった番号もある。SPのみは調査年度毎に1から数えているが、二年度分をまとめて報告する本報告書では、1998年度調査地区検出分の柱穴については、現場での柱穴番号に百の位を加え、百の位を3として300番台の番号に付け直して報告している。

**実測・記録:** 遺構の全体平面図・断面図は、縮尺二〇分の一で割り付け実測を行った。柱穴の断面図は堆積に層位があるものについて作成した。ただし全ての遺構は、断面形・法量等を記録した遺構観察表から断面図の作成が可能なようにしている。

出土遺物の取り上げは、前述した座標を用いたX・Y座標、出土レベルを少数点以下2桁(レベルは小数点以下3桁)まで記録しておこなった。

写真撮影は遺構検出状況、土層断面、遺構完掘状態等を中心に行なった。調査区全体の発掘後全景写真は高所作業車を用いて撮影した。1999年度調査については、完掘状況空中写真を(株)日本テクニカルセンターに委託し、ラジコンヘリコプターによって撮影した。

**遺構の埋め戻し:** 柱穴・土坑等は掘削部分を山砂で埋め戻した。1998年度調査地区SV01・SV02等の礫部分は土糞を積み上げて遺構を保護した。遺構検出面全体に山砂を撒いた後、重機を用いて調査地区全体を耕作土で埋め戻した。西堀は掘り残した堀上の断面にブルーシートを掛けて断面の保護と埋め戻し土との区別とし、完掘した部分は耕作土で埋め戻した。

### 3 調査の経過と調査組織

#### (a) 1998年度調査の経過

9月2日 調査地区的設定。

9月9日 富山大学理学部助教授渡井英男氏の指導のもと、山中地質コンサルタントが表土はぎ取り前の地下遺構の状態を確認し、発掘後の遺構の解釈を助けるデータを得るための電気探査・レーダ探査を行う。

10月5日～ 手掘りで層位確認用9トレンチを掘削。重機による表土掘削を行う。

築地盤基底部石列SV02を検出する。

調査地区杭の設定を行う。

平板による調査地区概略図作成開始。

岐阜県中世城館総合調査員高田 徹氏来跡。

手掘りによるIV地区南半部の掘削開始。

第1回江馬氏城館跡整備基本構想検討部会開催。委員各氏による現地指導、「基本構想」検討作業。

10月6日 地面化作業開始。IV地区北半部の精査を行い、西堀北端部を確認する。

10月12日 築地盤基底部石列SV02南側の旧耕作土の掘り下げ開始。遺物が出土。X座標42.7ライン上にならぶ3つの柱穴SP301・302・303を検出する。

10月19日 富山大学考古学研究室学生1名来跡。

10月20日 北堀の北側で竪穴住居SI21検出。

10月23日 SI21の掘り下げを開始。株洲・越前の大甕などの破片が多く出土。

10月28日 第2回江馬氏城館跡整備基本構想検討部会開催。委員各氏による現地指導、「基本構想」検討作業。

10月30日 文化庁坂井秀弥調査官、岐阜県教育委員会松野晶臣氏来跡。現地指導。千葉大学玉井哲雄氏、富山大学前川要氏、富山大学考古学研究室学生5名来跡。

11月1日 神岡町教育委員会主催「おもしろ探偵団」の児童来跡。

11月2日 NHK高山支局池之端善衡氏取材。

11月5日 記者発表。報道関係者6名取材。

11月6日 岐阜県中世城館総合調査員佐伯哲也氏来跡。

11月8日 現地説明会。町民を中心に100名の見学者が来跡。岐阜県教育委員会高木洋氏、内堀信雄氏、岐阜市教育文化振興財團恩田裕之氏、恵那市教育委員会三宅唯美氏、閔市教育委員会伊藤聰氏、小矢部市教育委員会大野淳也氏来跡。

11月24日 高所作業車による全体写真の撮影。

11月27日 埼玉県寄居町教育委員会石塚三夫氏来跡。

12月1日 神岡町文化財審議会委員長若田俊一氏来跡。石材について指導を受ける。全ての開化・記録作業を終了する。

12月2・3日 遺構への砂入れ埋め戻し開始。石積みは上蓋を積み上げて覆う。

12月4日 重機による調査区の埋め戻し開始。調査器材撤収。

12月11日 重機による埋め戻し完了。全ての現場作業を終了する。

#### (b) 1999年度調査の経過

6月10日 富山大学理学部助教授笛井英男氏を中心とする村尾地研探査チームが表土はぎ取り前の地下遺構の状態を確認し、発掘後の遺構の解釈を助けるデータを得るための電気探査・レーダ探査を行う。

神岡中学校3年生選択社会科生徒18名・教師1名来跡。

6月11日 調査地区的設定、発掘器材の搬入。

6月14~23日 重機による表土掘削を行う。調査地区的大部分が1976~1978・1994年度調査地区と重複しており、埋め戻し跡、ブルーシートを自安に、重機によって表土を掘削。その後、人力によって前回の遺構検出面を再検出し、I地区から遺構の検出手作業を行う。西堀東辺から約3.8mのところで、西堀に平行に南北方向に伸びる2列の柱穴列を検出する。

6月21日 I地区の遺構概略図の作成開始。

6月24日 梅雨の人雨の中、文化庁本山真主任文化財調査官、奈良国立文化財研究所加藤允彦氏、福井県埋蔵文化財センター吉岡泰英氏、岐阜県教育委員会文化課小林宏行氏来跡。現地視察後、江馬遺跡保存会長家越一氏、(株)空間文化開発機構真鍋達男氏、池畠和子氏、町関係者、調査担当者を加え、第7回江馬氏城館跡調査整備委員会を行う。

6月28日 I地区遺構検出手作業終了

6月29日 大雨により、調査地区冠水。

7月2日 II地区遺構検出手作業開始。I地区で検出した柱穴列の続きを検出す。

7月5日 神岡東小学校6年1組児童27名・教師1名来跡、現地見学。

7月6日 神岡東小学校6年2組児童27名・教師1名来跡、現地見学。

7月7日 調査地区壁断面図実測開始。II地区遺構概略図作成開始。

7月11日 大前測量事務所に委託し、調査地区的原点杭の再測量を行い、調査地区杭を設定し直す。

7月15日 遺構平面実測開始。

7月後半は大忙しで作業が進まず。

8月4日 第1回江馬氏城館跡整備検討部会開催。委員各氏、国立歴史民俗博物館小島道裕氏来跡。現

地指導、「基本計画」検討作業。

8月9日 主門の柱穴の有無を確認するため、主門推定位置の掘り下げを行なうが、柱穴は確認できなかった。

8月10日 I地区の柱穴の半裁開始、終了。

8月17日 II地区の柱穴の半裁終了。SP14が脇門の南側主柱穴であることを確認。SP148から内合せで納めた墨書き跡器皿2枚が出土。地鎮遺構と考えられる。

8月18日 山口市教育委員会古賀信幸氏来跡。平面実測図のレベルングを開始する。

8月23日 I地区SP11・13で柱穴内礎石を確認。庭園への通用門の柱穴であることがわかる。

8月26日 文化庁坂井秀弥調査官、岐阜県教育委員会川部誠氏、富山大学前川要氏来跡、現地指導。

8月27日 現地で調査成果の記者発表を行う。報道関係者7名、神岡町議会議員5名が参加。

8月29日 現地説明会を行い、地元の方々を中心に行なう。国府町教育委員会岩花秀明氏、押井正行氏、恵那市教育委員会三宅唯美氏、富山県埋蔵文化財センター宮田進一氏、小矢部市教育委員会伊藤隆三氏、富山市教育委員会吉川知明氏、城端町教育委員会大平余央子氏、石川県埋蔵文化財センター布尾和史氏、布尾幸恵氏、金沢市埋蔵文化財センター景山和也氏来跡。

9月7日 脇門周辺部の再精査。脇門の北側主柱穴SP190、築地塀の基礎地盤範囲検出。

9月14日 (株)日本テクニカルセンターに委託し、ラジコンヘリコプターによる完掘状況空中写真撮影を行う。高所作業車による完掘状況の撮影。

9月15日 台風15号による大雨で調査地区冠水。

9月19日 完掘状況の写真撮影を行う。婦中町教育委員会堀内大介氏来跡。

秋雨前線による連日の雨で作業できず。

9月24日 台風18号による大雨で調査地区冠水。午後、神岡町中央公民館において、第2回江馬氏城館跡整備検討部会開催。

9月29日 神岡町文化財審議会委員長若田俊一氏来跡。石材についての指導を受ける。すべての開化・記録作業を終了。

9月30日 遺構内及び調査地区全体の砂入れ終了。器材撤収。

10月13日、重機による埋め戻し開始。

10月19日 埋め戻し完了。すべての現場作業を終了する。

#### (c) 整理作業

1998年度~2000年度発掘調査中及び冬期間に随時整理作業を継続し、報告書の作成を行った。

#### 江馬氏下館跡1998年度調査組織

調査指導機関：江馬氏城館跡調査整備委員会

調査員：大平 愛子（神岡町教育委員会）

調査作業員：沖野 好夫，小野 健太，数井佐登美，上平 繁男，谷口恵利子，出井 正藏

半田和加子，洞垣 利造，堀辺 英臣，道上 義紀，宮垣 秀雄，森田 英博

整理参加者：数井佐登美，谷口恵利子，半田和加子

事務局：堀本 昌義 神岡町教育委員会教育長

村井 充佳 神岡町教育委員会教育課長

洞垣 満雄 神岡町教育委員会社会教育係長

大平 愛子 神岡町教育委員会学芸員

#### 江馬氏下館跡1999年度調査組織

調査指導機関：江馬氏城館跡調査整備委員会

調査員：大平 愛子（神岡町教育委員会）

調査作業員：小川 康二，沖野 好夫，小野 健太，数井佐登美，上平 繁男，下野 正夫

出井 正藏，中林 郁美，半田和加子，堀辺 英臣，道上 義紀，宮垣 秀雄

整理参加者：小川 康二，数井佐登美，中林 郁美，半田和加子，堀辺 英臣，道上 義紀

三好 清超（2000年度・神岡町教育委員会嘱託）

事務局：堀本 昌義 神岡町教育委員会教育長

村井 充佳 神岡町教育委員会教育課長

洞垣 満雄 神岡町教育委員会社会教育係長

大平 愛子 神岡町教育委員会学芸員



第8図 1998年度調査参加者写真



第9図 1999年度調査参加者写真

## 第4章 発掘調査の成果

### 1 調査の目的と調査範囲及びその概要（第10・11図）

第3章1で述べたように、1994～1997年度の4年間の調査は堀外地区を中心に行い、1976～1978年度調査による堀内地区の知見も含めて、下鉛跡の概要を把握することができた。これらの知見を受けて、1998・1999年度は、堀内地区と堀外地区の区画施設の状況を確認するため、堀内地区の北西隅部から西邊にかけての調査を実施した。調査地区・トレンチ・遺構の配置は第10図に示した。また、今回の調査地区の大部分が、1976～1978年度調査及び1994年度調査範囲と重複しており、その範囲は、第11図に示した。過去の調査時の掘削状況については、次節に記す。

#### (a) 1998年度調査の概要

1998年度は堀内地区北西隅部の調査を行った。この地区では、1978・1994年度調査において北堀の西端部を確認し、北堀と西堀が繋がらないことがわかつていた。また、北堀には土塁が伴うと推定していた。そこで、西堀の北端部の確認と、堀内地区北西隅部を閉塞するための土塁等の区画施設の有無を確認し、館中心部の区画施設の状況を明らかにすることを目的として発掘調査を実施した。

調査地区は、史跡指定地中央を南北に通る農業用水を境に2地区に分かれる。X座標38.8～59.5、Y座標-6～7の範囲を「Ⅲ地区」、X座標38.8～54、Y座標-13～-7.2の範囲を「Ⅳ地区」とする。北堀外側の土塁の堆積状況を確認するため、Ⅲ地区東辺を北へ延長して5トレンチを設けた（X座標59～66.2、Y座標5～6）。調査前の現況は、Ⅲ地区は水田と農道、Ⅳ地区は住宅移転後の旧宅地である。調査面積は288m<sup>2</sup>である。

この調査によって、西堀の北端が北堀中軸線の延長ラインまで終わること、北堀と西堀箱塙部分の堀内地区側にはその基底部を石積みとした築地塙が伴っていること、堀内地区北西隅部は築地塙によって閉塞しており北に向かって開く門等の出入り口はないことが明らかになった。

#### (b) 1999年度調査の概要

1999年度は、1998年度調査地区に南接し、西堀築研堀に面する堀内地帯に西邊の調査を行った。1994年度調査において、西堀の埋土の堆積状況から、西堀の堀内地区側は土塁が伴うものと想定していたが、1998年度調査によって、西堀箱塙部分には築地塙が伴うことが明らかになった。このため、西堀築研堀部分に伴う区画施設の様相と、館正面の出入り口である西堀の土橋1・2に伴うと推定される門遺構の確認を目的として調査を行った。

調査地区的設定は、その東辺を1978年度調査地区と重複しないようY座標5.8までとした。西辺についてはY座標-4以西は1994年度調査地区と重複するが、想定される区画施設と西堀との位置関係を現地で確認するため、西堀の東側肩部と土橋を再検出した。堀内地帯から西堀内への土層の堆積状況を確認するため、1994年度調査時の上層觀察用畔に合わせてY座標-4ラインに幅約2m、Y座標6ラインに幅約1mの上層觀察用畔を設定した。Y座標6ライン畔を境として、その南側のX座標-7～-11.2、Y座標-9～-5.2の範囲を「Ⅰ地区」、北側のX座標12.6～37、Y座標-9.5～-5.8の範囲を「Ⅱ地区」とする。調査面積は500m<sup>2</sup>である。調査前の現況は、水田と農道である。

この調査によって、西堀築研堀にも築地塙が伴う時期があること、脇門は掘立柱建ちであることを確認し、主門は礎石建ちと推定できた。また、土門の南東側に掘立柱建ちの庭園への通用門を確認し、脇門の北東側において墨書き土師器皿を納めた地鎮遺構を検出した。

## 2 層位

### (a) 調査地区の基本層序（第12・13図・第7表）

層位は各調査地区壁およびトレチ断面において観察した。調査地区壁については、I地区1トレチ北壁・II地区南壁・II地区北壁およびIV地区南壁・III地区北壁の上層断面図を本報告書に掲載した（第13図）。堀内地区における調査は1978年度・1994年度にも行っている。今回の調査では、過去の調査における基本層序を再確認し、その理解をふまえて、今回調査で確認した遺構の理解に努めた。

今回の調査地Xにおいて確認した基本層序は、上層から、「表土」、「土地改良土」、「旧耕作土」、「A・B期遺構面構築土」、「下館基盤土」、「地山」に大別でき、さらに人為的な作業の順によって細分できる。以下の報告では細分層序を示す場合は（括弧）を付けて記述する。各調査地区壁の基本層序及び細分層序の対照関係は第7表にまとめた。1978年度概報・1994年度報告の基本層序と本報告における基本層序の対照関係も同表に記している。

以下に過去の調査時の基本層序の知見をふまえつつ、今回の調査で得た基本層序と堀内地区における遺構検出面についての知見をまとめる。

#### 基本層序

**表土：**1972年度から1978年度発掘調査後にかけて行なった土地改良工事の客土による耕作土である。

〈1994年度調査埋め戻し土〉と〈現耕作土〉に細分できる。1994年度調査の「表土」に対応する。

**土地改良土：**土地改良工事時の客土の際の盤土であり、石英小礫を多く含む明黄褐色砂質土である。1994年度報告の「土地改良土」に対応する。

**旧耕作土：**下館廃棄後の一帯の耕地化から上地改良工事までの耕作土であり、中世～近世の遺物包含層である。人為的な作業の順序によって、上層から〈1978年度調査埋め戻し土〉・〈1976・77年度調査埋め戻し土〉、〈旧耕作土〉、耕作によって沈着した〈鉄分堆積層〉、下館廃棄後の近世以降の耕地化の際の「帝の埋めたて土」である〈耕地造成土〉及び〈SD22埋土〉に細分できる。なお、I・II地区で確認した〈耕地造成土〉の一部は、その堆積状況と土質から、下層のA・B期遺構面構築土を削平、堀内地区側から堀外地区側に押しならした土であると考えられる（第13図1地区1トレチ北壁第26層・II地区南壁第18～23層・II地区北壁第23～26層）。

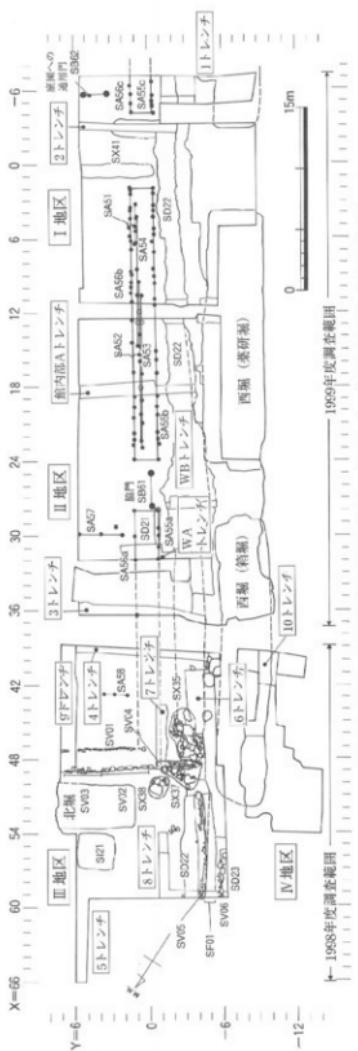
「表土」も含めて、1978年度概報の「第I層表土・耕作土・土地改良土層」、「第II層床土」に対応する。「旧耕作土」は1994年度報告の「カドミ汚染土」に対応する。

上記3層は館廃棄後の耕地化に伴う造成土層であり、堀の内外を問わず確認できる。

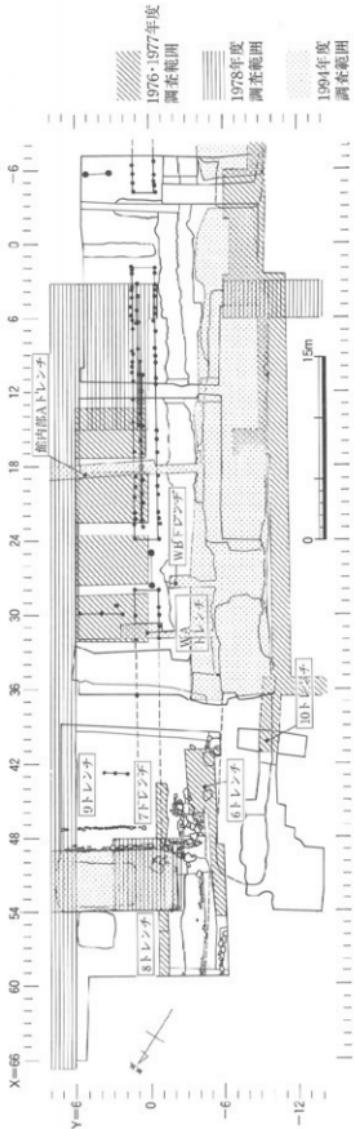
**A・B期遺構面構築土：**堀内地区的礎石建物（1978年度概報のA期・B期建物）機能時の生活面を構築する盛土造成土層であり、堀内地区でのみ確認できる土層である。0.5～1cm大の小礫を多く含む暗褐色～褐色粘質土である。

1978年度概報の「第III層褐色上層」に相当し、「A期・B期の建物跡群（第2・3期の遺構群）は第III層褐色土に包含される」としている。

1994年度調査の館内部Aトレチにおいて、「A・B期の遺構群は地山1に広範囲な埋め立て整地（1994年度報告：Aトレチ第13層・第14層・第23層）を行って構築していることを確認」している。また館内部地区において、この土層の面上（1994年度報告：館内部地区西壁M-M'断面第11層）でA期建物に作ると考えられる溝等およびB期建物SB10・SB12の礎石およびその掘形を検出しているが、その深さが極端に浅く、後世の削平を受けている可能性を指摘している。



第10図 1998・1999年度調査地区割り・トレンチ・道標配置図 縮尺 1/400



第11図 1998・1999年度調査地区における既調査範囲図 縮尺 1/400

今回の調査地区においては、I・II地区では部分的に薄い堆積を検出したのみであり、近世以降の耕地化の際の削平によってそのほとんどが失われているが、III地区の築地塀基底部石列SV02以南の堀内地区内では約10~60cmの堆積を確認できる。III地区において、この土層の上面でA期建物に伴うと考えられる築地塀基底部石列とB期建物に伴うと考えられるSA58柱穴とともに検出している。この状況は、1994年度調査館内部地区における知見と同様であり、残存しているA・B期遺構面構築上もその上層は削平をうけており、特にB期建物機能時の生活面構築土は失われているものと考えられる。

また、A期建物に伴う遺構には、築地塀基底部石列SV02や築地塀柱穴列SA55・SA56のように、A期の生活面構築土であるA・B期遺構面構築土下層の下鉢基盤上層面上から掘り込むものがある。これらは、その機能時の生活面構築土であるA・B期遺構面構築土を除去しないと、遺構そのものの掘り込みは確認できない。一方、1994年度調査ではA期建物に伴うと考えられる溝をA・B期遺構面構築土層面上で検出しており、生活面の構築後、その面上から掘り込んで構築した遺構もあると考えられる。今後の調査において、遺構の検出、時期変遷を考える上で、留意すべき点と考える。

**下館基盤土：**中世時期の基盤層と考えられる黒褐色粘質土層であり、館の南・西・北を跨む堀がこの面上から掘り込む。

1978年度概報の「第IV-I層黒色砂質土」、1994年度報告の「地山1」に対応する。

1978年度概報では、「(館の創立期にわたる時期の)第1期の遺構は、第IV-I層黒色砂質土の上層および第IV-II層茶褐色土と、地山である第V層緑青色砂質土層を掘り込んで構築されたものが多く、館の構築時に土地の削平、埋め立て等が広範囲にわたって行われたようである」としている。

1995~1997年度調査の門前地区・工房地区的西堀の外側の堀外地内では確認できない。

今回の調査では、I・II・III地区において確認できるが、西堀の外側にあたるIV地区では確認していない。III地区SV02以南の堀内地区内では、上層のかわらけ細片や繩紋土器片を含む人為的な堆積(基盤造成土)と、下層の遺物を含まない(自然堆積土)に細分できるが、土質に大差はない。III地区的SV02の北側の堀外地区では遺物の出土はなく(自然堆積土)のみと考えられる。1978年度調査の知見にみると、堀内地区内においては、館の構築に際し広範囲の造成を行ったと考えられる。

北堀、西堀築研堀がその面上から掘り込む状況は、今回の調査でも再確認した。堀の他にも、築地塀基底部石列SV02、築地塀柱穴列SA55・SA56柱穴等の堀内地区のA期建物に伴う遺構が下館基盤土層面上から掘り込んでいる。また、柱穴の切り合いから、A期建物に伴うSA56に先行すると考えられるSA53・SA51も下鉢基盤土層面上から掘り込んでおり、これらが1978年度概報の第1期の遺構と対応する可能性もあるが、今回の調査において次段階のA期建物に伴う遺構にも同一面上から掘り込むものがあることがわかったことから、その対応については今後の検討課題としたい。

1978年度概報の「IV-II層茶褐色土」に対応する土層は、今回の調査地区内では確認できなかった。

**地山：**この地域一帯の基盤層である。暗灰紫色~暗青灰色砂礫土であり、全地区で確認できる。

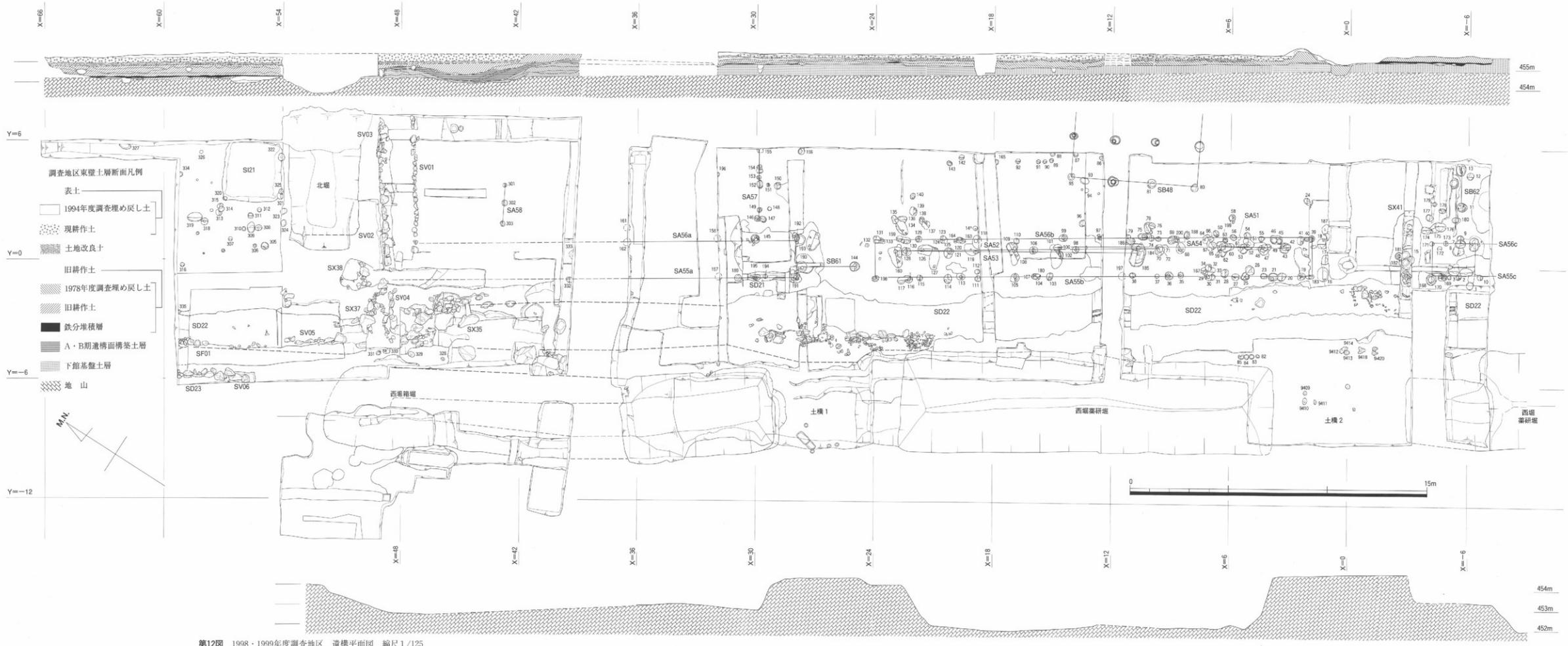
1978年度概報の「第V層地山」、1994年度調査の「地山2」に対応する。

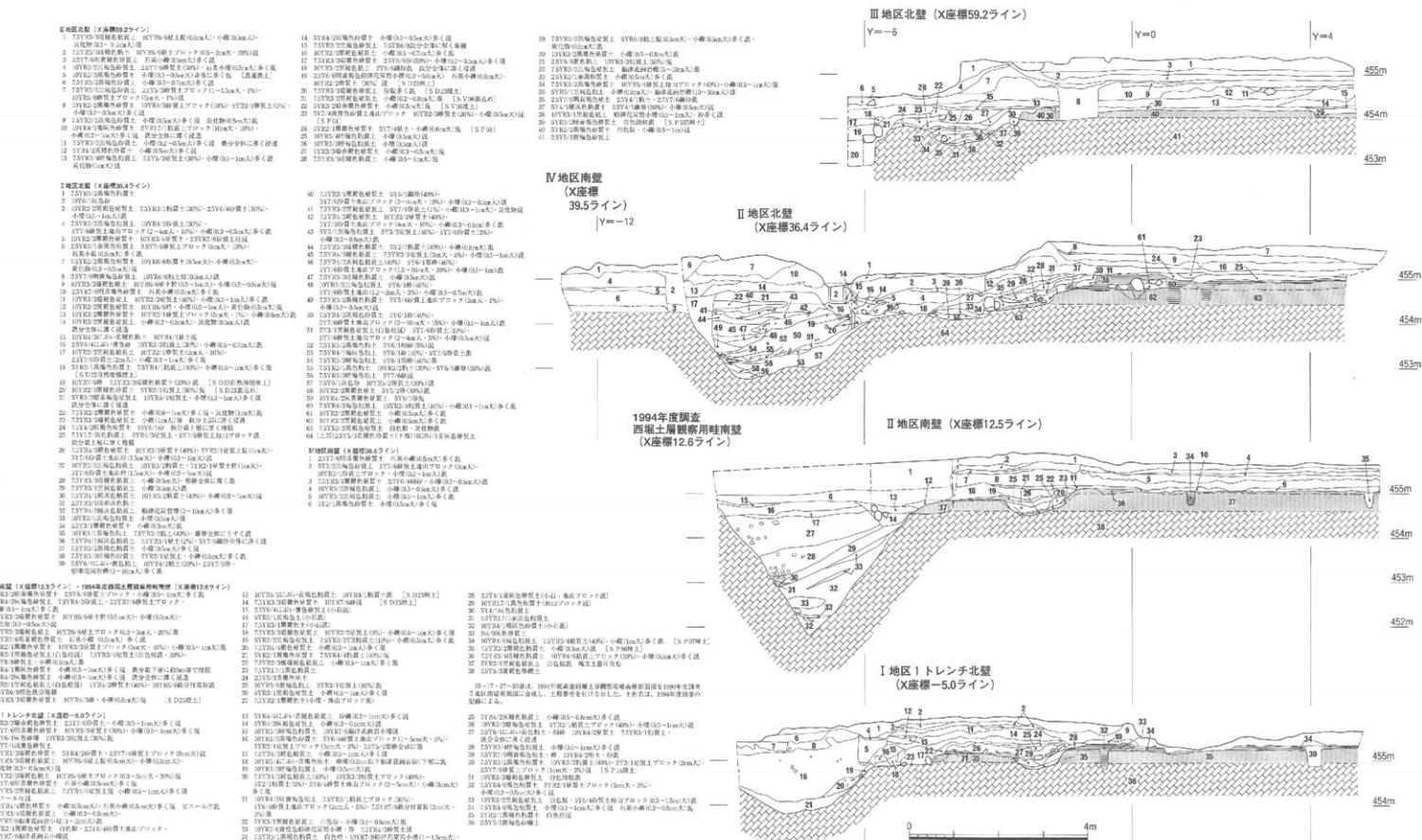
堀外の門前地区・工房地区では、この土層面上で遺構を検出している。

#### (b) 過去の調査における掘削について (第11図)

今回の調査地区は過去の調査地区と重複している。1976・1977年度調査時の記録が紛失しているため、今回の調査で再確認できた過去の調査範囲及び状況を以下に記す。

**1976・1977年度調査における掘削：**Ⅱ地区東側のX座標7.4~32.2、Y座標0~6の範囲では、X座標18・23・28ラインに幅0.5~1mの土層觀察用畝を残し、下鉢基盤土層上面を検出しているものの、遺構の検出及び掘削は行っていない。その他の1976・1977年度調査時のトレンチ (6~8・10トレン





第13図 調査地区壁土層断面図 縮尺 1/80

第7表 調査地区壁基本層序対照表

基本層序	細分層序	1998・1999年度調査					1994年度報告 基本層序	1978年度報告 基本層序	
		Ⅲ地区 北壁	Ⅳ地区 南壁	Ⅱ地区 北壁	Ⅱ地区 南壁	Ⅰ地区 1トレンチ北壁			
表 土	(1994年度調査埋め戻し土)			1・6	1・2	1・5	表土	I	
	(現耕作土)	1・2		7・9	3・4	6・7			
土地改良土		3	1	10	5	8	土地改良土	II	
旧耕作土	(1978年度調査埋め戻し土)			11・14	6・10	9・14	カドミ 汚染土	III	
	(1976・77年度調査埋め戻し土)	6・8	2・3	17		15・22			
	(旧耕作土)	9・14	4	21・22					
	(鉄分堆積層)	15	5	23・25	11	24			
	(耕地造成土)	25・30	6・9	26・38	15・23	25・26			
下館Ⅲ期 の遺構	(SD22埋土)	31・37					IV-I	IV	
	SD22自然堆積層上	38		39	24・26	27・29			
	下館Ⅱ期 の遺構			40・51	27・29				
A・B期遺構面構築土	西堀埋め戻し土			52・59	30・33		地山1	V	
	内堀自然堆積層土								
				60	36	31・34			
下館基盤土	(基礎造成土)				63	37	35	地山2	V
	(自然堆積土)	40							
地 山		41		64	38	36	地山2	V	

\* 表中の番号は第13図 調査地区壁土層断面図の土層番号に対応。

チ、西堀東西両肩部)は地山まで掘削している。Ⅳ地区西堀箱堀西側肩部の10トレンチは、その北側では堀底を確認するため埋土を地山まで掘り下げているが、南側は埋土の下層部を掘り残している。西堀箱堀の東側肩部については、Ⅰ地区1トレンチ南壁・Ⅱ地区南壁において、1976・1977年度調査時のトレンチと考えられる掘り込み跡を確認したが、平面的な範囲を確認できず、図示できなかつた。確認できる範囲としては、Ⅰ地区内のX座標4.8以南・Y座標-3.6以西の土橋2および西堀箱堀東側肩部は地山まで掘削している。

1978年度調査における掘削：Ⅰ・Ⅱ地区と重複する範囲では、下館茶盤土層面上において遺構の精査・検出を行い、検出した柱穴の埋土を完掘しているが、検出できていない遺構が多い。Ⅲ地区的9トレンチは1978年度調査時の層位確認用トレンチであり、地山まで掘り下げている。北堀西端部と重複する範囲では、北堀埋土も含めて、地山まで掘り下げている。

1994年度調査における掘削：過去の調査地区と重複する範囲では、過去の調査時の遺構検出面において遺構の精査・検出を行っている。1994年度調査範囲内の北堀・西堀箱堀・薬研堀のX座標12.5ライン以北の埋土を完掘している。西堀箱堀X座標10.5以南では埋土の下層部を掘り残している。(神岡町教育委員会・富山大学考古学研究室1995)。

#### (c) 今回の調査における各地区的遺構検出面

今回の調査では、過去の調査地区と重複する範囲については、前回調査時の検出面上において遺構の再精査を行ったが、調査地区が堀の内外に及ぶことや、耕地化の際の削平等により、地区によって遺構検出面が異なる。各地区的遺構検出面は、Ⅰ・Ⅱ地区及びⅢ地区内の茶地堀基底部石列SV02の北側では下館茶盤土層面上、Ⅲ地区のSV02以南(堀内地区内)ではA・B期遺構面構築茶土層面上、Ⅳ地区では地山面上である。なお、Ⅰ・Ⅱ地区内の西堀の土橋1・2等、過去の調査区と重複する部分については、地山面上で遺構を検出している。

### 3 遺構

1998・1999年度調査において新たに確認した下館に伴う遺構は、西堀箱堀の北端部、築地塀基底部石列2列、門跡2基、築地塀柱穴列2本、横列6本、地鎮遺構1基、堅穴住居1基、不明土坑1基、溝1本である。その他、近世以降の耕地の石組み畝や溝、道路状遺構等を確認した。耕地石組み畝は、下館の築地塀基底部石列をその一部として再利用している。

以下で、主な遺構について、その種類ごとに報告する。時期別の組み合わせやその変遷については、第5章小結においてまとめることとする。なお主軸方位の表記であるが、これまでには磁北に対して何度傾いているかで表記してきたが、今回の報告では、「主軸の座標軸方向(X-Y) - 角度(°) - 傾きの振れの方向」で表記する。主軸の方向と傾きは、下館跡の調査座標網の正値象限(北東方向の第1象限・北西方向の第2象限・南東方向の第4象限)範囲において計測した。「主軸の座標軸方向」は、主軸方向が南北方向のX軸である場合「X」、東西方向のY軸である場合「Y」で示す。「傾きの振れの方向」は、主軸方向がX軸(南北方向)の場合、その正値部分においてY軸の正値方向(東)に振る場合「E」、負値方向(西)に振る場合「W」とする。主軸方位がY軸(東西方向)の場合、その正値部分においてX軸の正値方向(北)に振る場合は「N」、負値方向(南)に振る場合は「S」とする。下館の調査座標網の主軸は、堀内地区のA期建物の主軸に合わせて設定しており、遺構の主軸方位が座標に一致する場合、A期建物の主軸方位と一致する。A期建物主軸方位はY-0.5°-N、B期建物の主軸方位はY-4.5°-Sを測る。磁北のラインは、X-33.0°-Eとなる。遺構の法量等の数値データは巻末の別表にまとめたので、参照されたい。

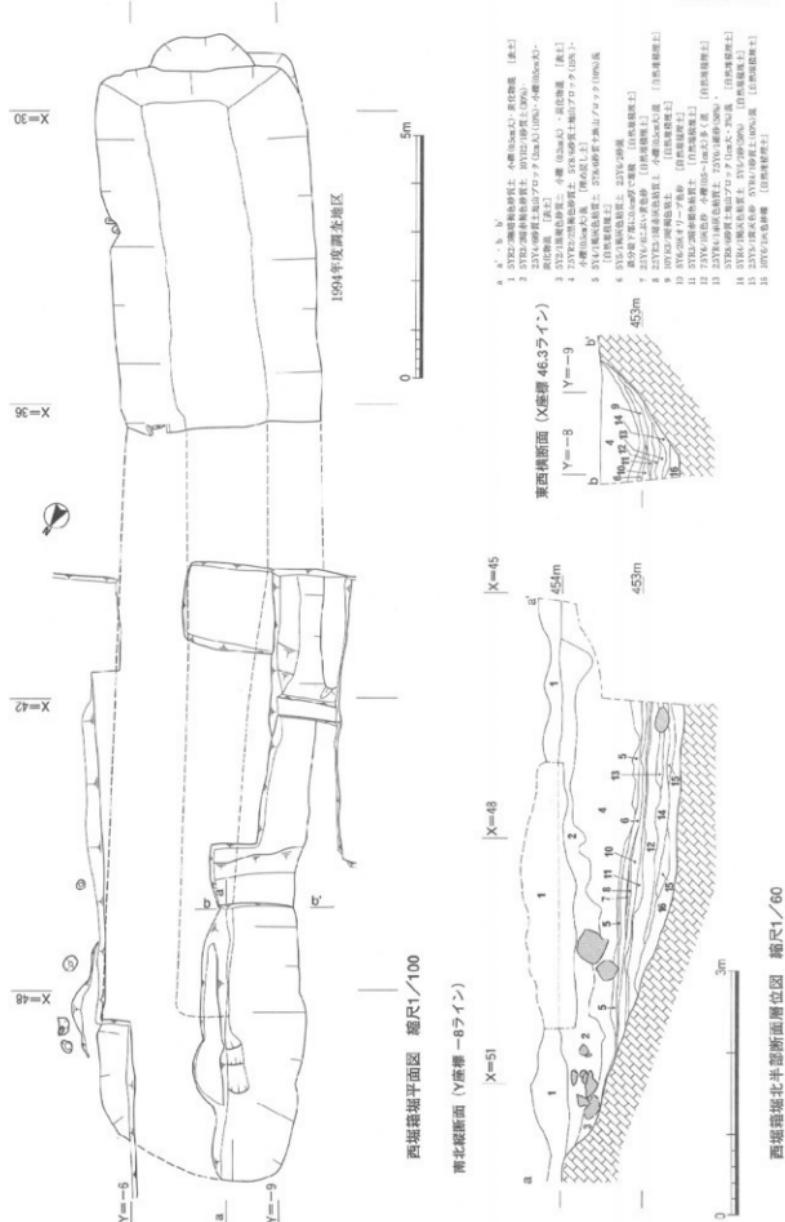
#### (a) 堀跡

##### 西堀 (第13・14図)

III地区西壁際とIV地区で十橋1北側の西堀箱堀の北端部を確認した。

西堀箱堀は、館の正面を画する西堀のうち、土橋1より北側の部分である。II・III地区の西辺及びIV地区のX座標29.1~51.9、Y座標-10.0~-5.4の範囲に位置する。西堀箱堀部分の全長は20.7mである。南北向短辺の中心を結んだ主軸方位はX-0.5°-Wであり、座標とほぼ一致する。その東側部分は未検出部分が多いため、平面形全体を確認できないが、西側堀肩ラインは、南北向短辺の中心を結んだラインを主軸とすると、これに平行ではなく、その中央部が西側にやや湾曲し、弓なりのカーブを描く。以下で記述するとおり、III・IV地区内の箱堀北半部とII地区内の箱堀南半部では、その主軸方位・南北向辺側の堀壁の傾斜・堀底形状が異なることから、改修によって堀を拡張した可能性も想定できよう。調査地区設定の都合により全面的な平面検出及び南北縦断面の層位観察が出来なかつたため、今回は可能性の指摘にとどめ、今後の調査機会を待ちたい。以下に箱堀北半部・南半部それぞれにわけて報告する。

**箱堀北半部：**III・IV地区X座標39.6~51.9、Y座標-10.0~-5.5の範囲に位置する。西側堀肩ラインの主軸方位はX-4.0°-Eを測り、南堀旧堀の主軸とほぼ直交する。上幅はX座標49.0ラインで4.27mを測る。堀壁の立ち上がりは、西側はX座標46.3ラインで34.5°を測る。北側はY座標-8ラインで19.0°を測り、北端部掘り込みの傾斜は緩やかである。堀底最低部の検出レベルは452.495mであり、深さは検出面の最高部と堀底最低部で約1.5mを測る。東側下端を検出していなかったため、下幅は不明である。堀全体を完掘していないため断定はできないが、箱堀北半部の堀底幅は南半部に比べて狭く、また堀壁の立ち上がりの角度も緩やかであり、堀壁から堀底にかけて、すり鉢状になだらかに掘り込むようである。



埋土は、X座標46.3～51.9、Y座標−7.9～−10.0の範囲を地山堀底まで掘り下げ、南北縦断面（Y座標−8ライン）、東西横断面（X座標46.3ライン）で堆積状況を観察した（第14図）。第1～3層は宅地の植栽根等による擾乱である。第4層は人為的な埋め戻し上であるが、東西断面全体を確認できず、その流れ込みの方向は不明である。第5～16層は堀機能期間中の自然堆積埋土である。第5・6・8・9・11・14層は雨水等により堆積したと考えられる粘土または粘質土層、第7・10～13・15・16層は地山と良く似た砂質土層である。堀機能期間の堀底は第15・16層上面であり、その後、風雨による滲水に伴う粘質土の堆積が3回、地山壁面の崩落による堆積が2回あったものと観察できる。

**箱堀南半部：**Ⅱ地区南西部、X座標29.0～36.4、Y座標−9.8～−5.5の範囲に位置する。1994年度調査時に埋土を完掘している。今回の調査では、Ⅱ地区北壁で土層の観察を行うため、堀際の1994年度埋め戻し土のみ掘り上げ、全体の再検出はおこなっていない。1994年度調査の記録およびⅡ地区北壁の観察からは、堀の上・下幅は、X座標33ラインでそれぞれ4.5m、2.0mを測る。堀壁の立ち上がりは同ラインで西側40°東側35°を測り、Ⅱ地区北壁で東西50°前後を測る。箱堀南側の堀壁の立ち上がりは64.0°を測り、その傾斜は急である。深さは1.2～1.5mを測り、堀底はほぼ平らである。南半部の主軸方位はX−4.5°−Wを測り、B期建物の主軸方位とはほぼ直交する。

埋土はⅡ地区北壁において再観察した（第13図Ⅱ地区北壁）。第40～59層が西堀箱堀部の埋土であり、第40～51層が人為的な埋め戻し土、第52～59層が堀機能時の自然堆積土である。第40・42・43・46・48・50層は、地山ブロックを多く含み、堀内地区側から流れ込んでいる。第41・44・45・47・49層は地山ブロックをあまり含まず、門前地区側から流れ込んでいる。これらの七層は交互に堆積しており、西堀箱堀部の埋め戻しはその両側から行ったものと考えられる。第57～59層は、地山堀壁が崩落したと考えられる砂質土である。堀を掘削した後、比較的早い時期に堆積し、堀機能時の実際の堀底は第57層上面であったと考えられる。第52～56層は粘土層であり、雨水等によって堆積したものと考えられるが、その堆積は薄く、滲水はわずかであったと考えられる。なお、西堀薬研堀では堀内地区側からの流れ込みしか確認できない（第13図1994年度調査西堀土層観察用柱南壁第27～29層）。

今回の調査において、後述のとおり西堀には築地塀が伴う時期があることを確認した。築地塀を土壘に作り替えた可能性も考えられることから、西堀薬研堀・箱堀埋土の堀内地区側からの流れ込みの土層は、堀内地区側にある築地塀または土壘を押し崩して一度に埋め戻したものと考えておきたい。

なお、西堀の東側肩部は、SD22（Ⅱ地区北壁第39層）の掘削や、耕地化に伴う擾乱（同第11～38層）を受けており、堀の人为的埋め戻し上（同第40～51層）の館側からの移動の状況を確認することはできなかった。

#### (b) 石列・堀内地区北西隅部の築地塀（第12・15～17図）

Ⅲ地区の北堀の南（堀内地区）側で、北堀には平行に伸びる3本の石列SV01・02・03を検出した。SV01・SV02は北堀に伴って館の北側を区画する築地塀基底部石列である。このため、堀内地区北西隅部の築地塀についても本項目で記述する。SV03はSV02をその一部として改修・再利用して設けた近世以降の耕地に伴う石組み畦畔である。なお、第16図にこれらの石材の番号を示し、その法量等は別表8にまとめた。SV01はNo.1～21、SV02はNo.22～34、SV03はNo.35～75である。

**SV01**（第15～17図）：北堀の南側、X座標47.1～47.5、Y座標0.4～7.1の範囲に位置する。主軸方位はY−1.5°−Nであり、座標とほぼ一致する。調査地区内における検出長は約6.9mを測る。今回の調査地区内で確認できた石材の数は21個であり、長径17～34cmの砾の長軸を石列の主軸にあわせて継長に並べている。石材は船津花崗岩11、閃緑花崗岩4、石英斑岩2、安山岩1、記録なし3である。No.19・20間、No.21の西側でそれぞれ抜き取り穴1つを確認している。9トレンチ西壁とSV01の

No. 4 の間は、耕地化の際に 2 石を入れなおしているが、築地塀の基底部石列として 1 または 2 石あったものと推定する。なお、後述する西端に面する築地塀東側柱穴列 SA56 の延長線とは No. 21・22 の中間にほぼ直交する。

SV01 は A・B 期遺構面構築土層面上で検出したが、平面及び Y 座標 2.7 ライン・3.8 ラインにおける断面層位（第 15 図）観察からは、A・B 期遺構面構築土層面上からこれを掘り込む SV01 の掘形は検出できず、下館基盤土層面上に石材を据え、これを埋めながら A・B 期遺構面の構築を行なっていると考えられる。

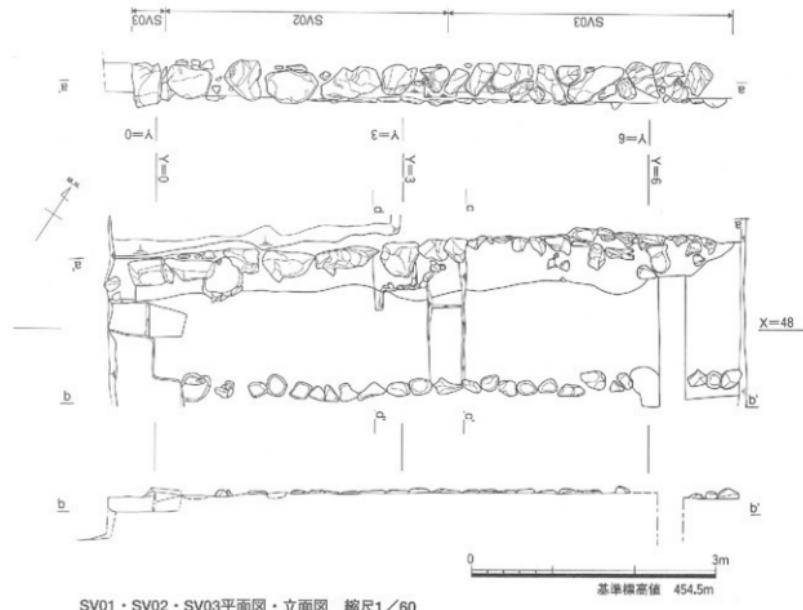
なお、1978 年度調査の記録では、今回確認した SV01 東端部からさらに東に Y 座標 8.8 ライン付近まで、7 石並んでいることが記録されている（第 17 図）。SV01 の延長である可能性もあるが、SV01 No. 4 東の 2 石のように耕地化に際して据え直したものである可能性もあるため、今後の調査時に確認することとしたい。

**SV02**（第 15・16 図）：X 座標 48.3～49.1、Y 座標 0.1～3.6 に位置する。北端に伴う築地塀の北側の基底部石列である。主軸方位は Y-5.0°-N を測り、南堀旧堀の主軸方位とほぼ一致するが、SV01 とは平行ではない。SV02 の高さは約 45cm であり、これが堀内地図と北堀側の地形の高低差となり、堀内地区側の遺構検出面レベルが高くなる。石列の検出長は約 3.5m であるが、西端に伴う築地塀の西側柱穴列 SA55 の延長ラインと SV02 の西への延長線は X 座標 48.7、Y 座標 -1.0 付近で交差し、本来の SV02 の西端部はこの地点であったと考えられ、推定長は 4.5m を測る。SA55 の延長線上に礫群 SX38 があり、耕地化の際に壊された SV02 の西端部の石材と考えられる。立面で確認できる主となる石材の数は 6 石（No. 22・26・27・30・32・34）であり、長径 34～73cm、短径 33～46cm の礫を横長に一段並べている。石材はすべて船津花崗岩である。

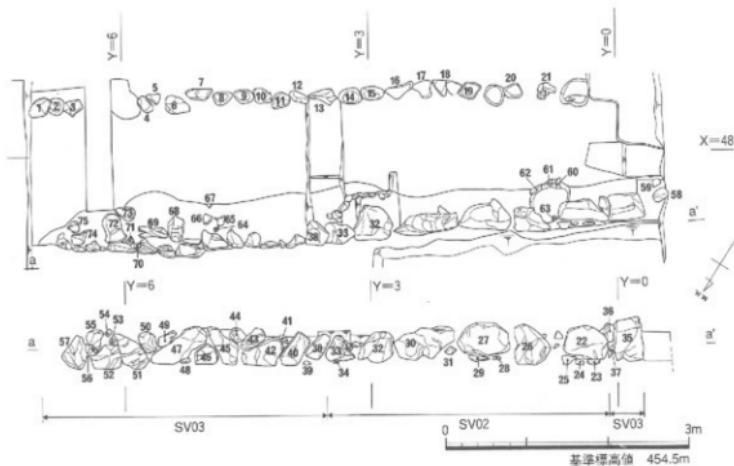
Y 座標 2.7 ライン（第 15 図 d-d' 断面）において SV02 の断面層位観察を行った。第 2 層は平面観察から SV03 の裏込め埋土と同一の層であることがわかる。第 4・5 層は A・B 期遺構面構築土層である。第 6 層が SV02 を据える際の掘り込み埋土であり、裏込めと考えられる拳大の船津花崗岩礫が多く含まれる。第 7～9 層は下館基盤土層である。第 6 層の掘り込みは南から北へ緩やかに傾斜し、ほぼ垂直に掘り込む SV03 据え付けの掘り込みとはその形状が異なる。耕地化の際に、下館の築地塀基底部石列 SV02 の裏込め上部を改修・再利用し、その東側に新たに耕地の石組み畦畔 SV03 を築いたものと考えられる。なお、SV02 西端に接する No. 35 は裏込め断面層位観察から SV03 構築時に据え直していることを確認している（断面図は未掲載）。SV02 の No. 26 は、その断面層位を確認していないため断定はできないが、向脇の石材との間隔が開いていること、石材を縱長に用いていることから、SV03 構築時の改修の際に据え直した可能性がある。

**SV03**（第 15～17 図）：X 座標 48.4～49.2、Y 座標 3.6～7.0 に位置する。SV03 は、1978 年度調査の記録から、今回検出した部分の東端 No. 57 から北に折れて北堀埋土の上部に続いており、耕地の石組み畦畔であることが確認できる（第 17 図）。主軸方位は Y-2.0°-N を測り、座標とほぼ一致する。立面で確認できる主となる石材の数は 14 石であり、長径 18～65cm、短径 12～30cm の石材を北から見て斜め縱長に並べている。高さは、約 45cm を測る。基本的には一段であるが、一段目の石材が小さいところ、石材を傾けて据えているため上部に隙間が出来ているところは、やや小型の石材を 2 段目に積み、石列の天端の高さをほぼ一定に揃えている。石材は船津花崗岩 13 石、謙勵岩 1 石である。

Y 座標 3.8 ラインで断面層位を観察した（第 15 図 c-c' 断面）。第 2・3 層が SV03 の裏込め埋土であり、第 2 層が第 4 層 A・B 期遺構面構築土層を直接切る。第 3 層は第 7～9 層下館基盤土層をほぼ垂直にえぐり込むように掘り込んでおり、SV02 据え付けの際の掘り込みとはその形状が異なる。



第15図 石列SV01・SV02・SV03実測図



第16図 石列SV01・SV02・SV03石材番号図 縮尺 1/60

第17図 1978年度調査K地区(X座標48~54, Y座標 6~12付近)  
検出状況写真（上が東、西から）

手前のトレンチ壁東側の掘り込みが北淵である。北堀埋土上に延びる南北方向の石列は、北堀南側肩部で西に折れるが、この屈曲部が1998年度調査で検出したSV03の東端部にある。写真右端に並ぶ東西の石列はSV01の延長とも考えられるが、構地化の際に据え直している可能性もあり、今後の調査を待って確認したい。

**SV01・SV02を基底部とする築地塀について：**SV01・SV02はその主軸方位が一致せず、その間隔は1.5~1.7mを測るが、築地塀の基底部幅を1.5m前後とすれば、SV01と平行に伸びる築地塀をSV01・SV02間に築くことは可能であろう。SV01の主軸方位が座標とほぼ一致すること、SV01の据え方から、SV01を築地塀の南辺として下館基盤土層面上に並べてからA・B期遺構面構築によつてA期建物の時期の生活面の構築を行つていると考えられることから、この築地塀はA期建物に伴うものと考えられる。A期建物の構築に際して、館に必要な施設を計画的に設けていた様子がうかがえよう。SV02と北堀南側肩部との間隔は約1.2m（約4尺）であり、大走りであったと考えられる。なお、1994年度調査時に行った地中レーダ探査では、Y座標9.7ラインでも土壘状の高まりを捉えているが、石列の反応は捉えられていないことから、築地塀の高まりの残りが良い可能性と、北堀に伴う築地塀がその東部分では土壘であった可能性も指摘されている。これらは今後の発掘調査によって確認していきたい。

**SX35・SX37・SX39から推定できる西堀箱塁に面する築地塀基底部石列（第12図）：**SX35・SX37・SX39はⅢ地区以南西部のSD22埋土中およびその周辺に散乱する大きな礫である。SX35・SX37はI・II地区で確認した西堀に面する築地塀柱穴SA55延長ライン西際からその西側のSD22埋土内に流れ込み、散乱している。SX39はSA55延長ラインから約4m西に離れた2トレンチ西側で検出した。SX35南側のSX39に面するSA55延長ライン付近には礫が散乱しておらず、石材の抜き取り穴と考えられる窪みが確認できた。脇門の北側の西堀箱塁に面する部分では、北堀に対するSV02部分同様、SA55延長ラインを境として塁内地区側の遺構検出面がその外側よりも約40~80cm前後高い。このような地形と、これらの礫群の散乱状況から、脇門北側の西堀箱塁に面する築地塀は基底部に石列があったと推定できよう。

これらの礫中には長径100cm前後とSV02に比べても大型の礫が多い。下館の西辺である段丘崖面中位を通る上宝道から分岐して館へと続く道路は、西堀箱塁の中央部のX座標40.0付近で南に折れ、西堀に平行に延びる門前地区的南北方向道路につながると考えられる。西堀箱塁に面する築地塀は、館を訪れた人々が最初に目にする館の中心部の構築物であることから、北堀側よりも大型の石材を用いて築地塀基底部石列を築いたものと推定できよう。

なお、SX39は上地改良工事前の農業用水路の水溜部の護岸石として再利用されていた。

**1978年度概報の「北濠内側の土壘状の高まり」について（第12図）：**1978年度概報では「西及び南濠では削平されたためか検出できなかつたが、北濠の断面では内側に巾3m、高さ50~80cmの土壘状の高まりをもつ」と報告されている。この北堀内側の高まりは、第12図の調査地区東壁断面X座標46~49.2の範囲にみられる下館基盤土層（上層は遺物が混入し、人為的な堆積と考えられる〈基盤造成土〉）の高まりに対応すると考えられる。1978年度調査では、この下館基盤土〈基盤造成土〉層面上から掘り込むA期建物に先行する柱穴群を確認しており（1978年度概報の第1期）、X座標46~49.2間の下館基盤土〈基盤造成土〉層による人為的な高まりが、1978年度概報第1期に属する何らかの施設である可能性を想定しておくことはできよう。現在のところ、この下館基盤土層の高まりは、9トレンチでのみ確認できただけである。地中レーダ探査ではY座標9.7ラインでも土壘状の高まりを捉えているが、発掘による確認を行っていないため、9トレンチで確認した下館基盤土層の高まりなのか、築地塀または土壘の盛り土であるかは不明である。下館基盤土層の高まりの性格については、今後の調査における知見の増加をまって、再検討していきたい。

## (c) 門跡・築地壠柱穴列・横列(第12・18-22図)

今回の調査では、門跡2棟、築地壠柱穴列2本、横列6本を復元した。1978年度調査時に検出している総柱式掘立柱建物SB48の西側柱穴列も再確認している。これらの門跡・横列等に伴う柱穴数は105基であり、調査区全体では247基の柱穴を確認した。このうち6基は1978年度調査時に検出しており、14基は1994年度調査時に検出した土橋1・2上に位置する柱穴であり、今回の調査で新たに確認した柱穴は227基である。以下、挿図順に報告する。なお、文中に示す尺は、1尺を0.303mとして計算している。また切り合いの新旧関係は矢印を使い「(古い)→(新しい)」で示す。柱穴の柱痕跡・柱の抜き取り穴・根固め石・埋土中の礫の有無等については、巻末の別表7にまとめ、ここでは特徴のあるものについてのみ記述する。埋土中の礫を根固め石と判断する基準は、柱痕跡や柱の抜き取り穴のある柱穴については掘形埋土中に柱痕跡を支えるように礫が入っている場合、柱痕跡・抜き取り穴は分層できなかったが板状の礫が柱穴内に継長にはいっている場合は、根固め石と判断した。柱穴は、基本的には半裁まで掘削をやめており、礫の数は半裁状態で確認できた数である。

## 門 跡(第12・18図)

館の正面である西堀には2箇所の土橋があり、その規模と堀内地区的建物配置から、南側の土橋2側が主門、北側の土橋1側が脇門と考えられる(1994神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室)。今回の調査において、脇門SB61と庭園への通用門SB62の柱穴を確認した。

**脇門SB61**(第18図): II地区中央部、X座標24~27.8、Y座標-0.4~0の範囲に位置する南北棟の門である。主柱穴の中心間で間口1間2.67m(8.81尺)を測る。棟の方位はX-1.0°-Wを測り、庵標とはば一致する。南側主柱穴SP144と後述する築地壠柱穴列SA55b・SA56bの北辺が接しておらず、南側に通用口が付属すると考えられる。SP144と築地壠柱穴列の間は、その中心間で1.01m(3.33尺)を測る。主柱穴SP144・SP190は平面形が径50cm前後の円形である、深さは93cmを測る大型の柱穴である。主柱穴SP144は検査を半裁にとどめたため、底部を確認できなかったが、検出面から90cm下で柱穴内礫石を検出した。その天端レベルは454.08mである。SP190の底部は地山を掘り込んでいるためか、柱穴内礫石は据えていない。ともに深さ45~90cmのところで幅15cm前後の柱材芯部と考えられる木質断片を含む土層(SP190: 第18図a-a'断面第2層、SP144: 第18図b-b'断面第2層)が観察できる。門の取り壊しに際して、検出面から約45cm下までは柱穴埋土を掘りかえし、柱を切断して抜き取ったあと、再び埋め戻したものと考えられる。これらの主柱穴は、後述する築地壠の基礎地業部掘り込み埋土を掘り込んでいる。脇門と築地壠は館の西側を区画する一体の施設であり、その前後関係は時期差ではなく、作業順序を示すものと考えられる。

**庭園への通用門SB62**(第18図): I地区南東隅部、X座標-5.8~-5.4、Y座標2.9~5.3の範囲に位置する、東西棟の門である。主柱穴の中心間で間口1間1.91m(6.30尺)を測る。棟の方位はY-0.0°-Wを測り、庵標と一致し、築地壠柱穴列SA56とはば直交する。築地壠柱穴列SA56cのSP7と一直線上に並んでおり、SB62とSA56の間も板塀等で閉じていたと考えられる。主柱穴SP11・SP13はそれぞれ長径50cm、63cmの平面精円形であり、深さは54cm、58cmを測るやや大型の柱穴である。ともに底部に柱穴内礫石を据えており、その天端面の検出レベルはそれぞれ454.89m、454.84mである。SP13では柱穴内礫石に達する径15cm、検出長45cmの柱痕跡を確認した。SP11では柱を抜いた跡と考えられる層が確認できる。

**主門について(第12図):**西堀土橋2の堀内地区側では、築地壠柱穴列SA55・SA56がX座標-4.2~-1.9間に途切れで空間地となっており、この南北幅6.1m(20.1尺)間に主門があったものと考えられる。脇門SB61・庭園への通用門SB62の主柱穴にみられるように、掘立柱建ちの門の柱穴は規模が

大きく、柱穴内礎石を持ち、対になる柱穴の規模もほぼ同じである。主門推定位置では、SP15・SP17が座標軸線上に並んでおり、主門の主柱穴の可能性も残るが、その規模が小さく、柱穴内礎石もなく、規模が異なっており、主門の主柱穴とは考えにくい。ほかに柱穴が確認できなかったこと、主門に面するSD22埋土内には、建物礎石と考えられる川原円礎を含む礎が多く散乱していることから、築地塀とともにA期建物に伴う時期の主門は礎石建ちであったと推定したい。堀内地区の建物礎石の時期の生活面を造成するA・B期遺構面構築上層は、近世以降の耕地化に伴う削平によりI地区内では残存しておらず、主門礎石も抜き取られたものと推定する。

#### 築地塀柱穴列（第19～21図）

SA55・SA56は西堀に面する築地塀に面する柱穴列である。SA55・SA56の主軸方位はX-0.5°-Wを測り、座標にはほぼ一致する。I地区からII地区の西堀全体に面しており、SA55がほぼY座標-0.6ラインに、SA56がほぼY座標1.1ラインにそって、西堀と平行に延びる。SA55・SA56の北への延長ラインがそれぞれ北堀に伴う築地塀基底部石列SV02・SV01の西端部と交わる。土橋1に面するX座標24.0-27.8の範囲、上橋2に面するX座標-4.2-1.9の範囲では柱穴がなく、それぞれ脇門・主門位置と推定でき、脇門推定位置では脇門の主柱穴を確認している。SA55・SA56の柱穴は東西ではなく対応し、その間隔は対応する柱穴の中心間で約1.9m（6.3尺）を測る。柱間距離は、特に主門・脇門間の柱穴列では一定でない。柱穴の規模も一定ではないが、径・深さとともに30cm前後の柱穴には根固め石と考えられる礎が入るものが多い。SP118←SP119からSA56←SA53であることがわかる。SA55と西堀東側堀肩部との間は幅約3.8m（12.5尺）の空間地であり、北堀西端部と西堀北端部間の土橋状の部分に繋がる。北堀・西堀端部間の土橋状の空間地を閉塞する門等になると考えられる柱穴等は確認できず、西堀と築地塀の間の空間地を通路として使っていた可能性も想定できよう。

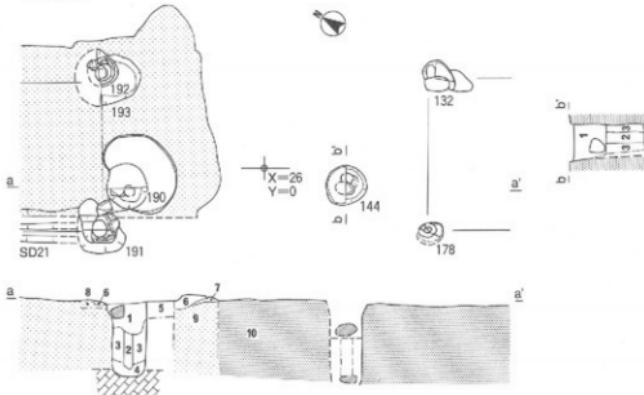
なお、SA55・SA56の柱穴がほぼ東西で対になるものの、柱間が一定でなく、小さな柱穴も多いことから、この柱穴列は築地塀を構築する際の作業用の柱穴列と推定でき、改修などに伴う複数の柱穴列が同一軸線上に存在している可能性があるが、整理しきれなかった。このため、主軸線上に存在する柱穴については、西堀に伴う築地塀に何らかの関連のある柱穴と考え、図化した。以下では、門の推定位置で柱穴列が途切れるため、脇門より北、脇門と主門間、主門より南を、それぞれSA55・SA56のa・b・cとして報告する。

**SA55a・SA56a**（第19・21図）：脇門の北側から北堀に伴う築地塀基底部石列SV01・SV02までの間、X座標27.8-48.8間に位置すると推定できるが、遺構検出面がA・B期遺構面構築上層面上であるIII地区では柱穴列を検出しきれなかった。北堀と考えられるSV02・SV01までの全長はSA55aが20.8m（68.7尺）、SA56aが19.1m（63.0尺）である。柱間距離はSA56aでは2m（6.6尺）前後と考えられ、SA55aはこれに対応するSP191・SP195・SP157が主柱穴と考えられる。柱穴は円形・梢円形が多く、長径38-52cm、深さ30-55cmを測る。SA56aのSP145で径15cm、検出長14cm、SP193で径15cm、検出長44cmの柱痕跡を検出した。SA55aのSP191・SA56aのSP192で柱の抜き取り穴を観察した。

なお、SD21はSA55a柱穴を設けるための布掘り溝である。また、X座標26.8-32.0、Y座標-1.0-1.6の範囲で、築地塀の基礎地業と考えられる掘り込みを検出した。SA55aおよびその布掘り溝SD21・SA56aの柱穴・脇門主柱穴SP190はその埋土を掘り込んでいる（第21図）。

**SA55b・SA56b**（第19・20図の1）：主門・脇門間X座標1.9-24.0間に位置し、ともに全長22.2m（73.3尺）を測る。柱穴は円形・梢円形が多いが、長径21-52cm、深さ10-56cmを測り、その規模は不揃いである。SA55bのSP19で径12cm、検出長16cm、SP35で径12cm、検出長30cm、SP113で径12cm、検出長14cm、SA56bのSP54で径12cm、検出長8cm、SP118で径18cmの柱痕跡を検出した。SA55aのSP28・

船門SB61



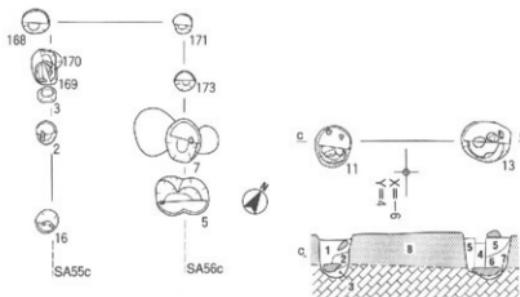
- z = -1**

  - 5) Y5/S5/5時海面負荷量：小磯(5cm大)、底栖物(6cm大)、此所付に浸透 [族族者穴巣上] (底生魚類の付着) [底生魚類の付着] [底生魚類の付着]
  - 3) T5/R5/2時底生魚類付着量：小磯(5cm大) [底生魚類の付着]
  - 3) T5/R5/2時底生魚類付着量：木半量付に及む [底生魚類の付着]
  - 7) T5/R5/2時底生魚類付着量：木半量付に及む [底生魚類の付着] [底生魚類の付着]
  - 6) T5/R5/2時底生魚類付着量：木半量付に及む [A. B. 帆鱈類底生魚類]
  - 7) Y5/E5/1時底生魚類付着量：小磯(5cm~6cm)、37%Y5/底生魚類付着量 [底生魚類の付着]
  - 7) Y5/E5/1時底生魚類付着量：木半量付に及む [底生魚類の付着] [底生魚類の付着]
  - HY5/T5/2時底生魚類付着量：木半量付に及む [底生魚類の付着] [底生魚類の付着]
  - T5/R5/2時底生魚類付着量：木半量付に及む [底生魚類の付着] [底生魚類の付着]
  - 7) Y5/E5/1時底生魚類付着量：木半量付に及む [底生魚類の付着] [底生魚類の付着]
  - 5) Y5/E5/4時底生魚類付着量：木半量付に及む [底生魚類の付着] [底生魚類の付着]

b = b<sup>2</sup>

- BY373-2深赤色高粘度土  
小穂(5cm大)・柱状花序(10cm大)・茎葉円錐(20cm大)・(10cm大)1・(底葉取り除く)
- BY372-2黒紫色高粘度土  
短稈・本質草(1m大)・柱状花序(枝葉部楕圓形)
- 75Y92-2暗褐色高粘度土  
水分が多めに含む・(無葉穗)
- 75Y92-2暗褐色高粘度土  
5%の量で整土(由ブリズム)・(5cm大)・小穂(5cm大)2・『下部茎葉(葉身幅2cm)』

底面への通用門SB62






A horizontal scale bar with tick marks at 0, 1, and 3 meters. Below the bar, the text '基準標高値 455m' is written.

第18図 門脇寒測図 縮尺1/60

SP29・SP36・SP105・SP198, SA56bのSP99・SP120・SP129・SP192で柱の抜き取り穴が観察できる。

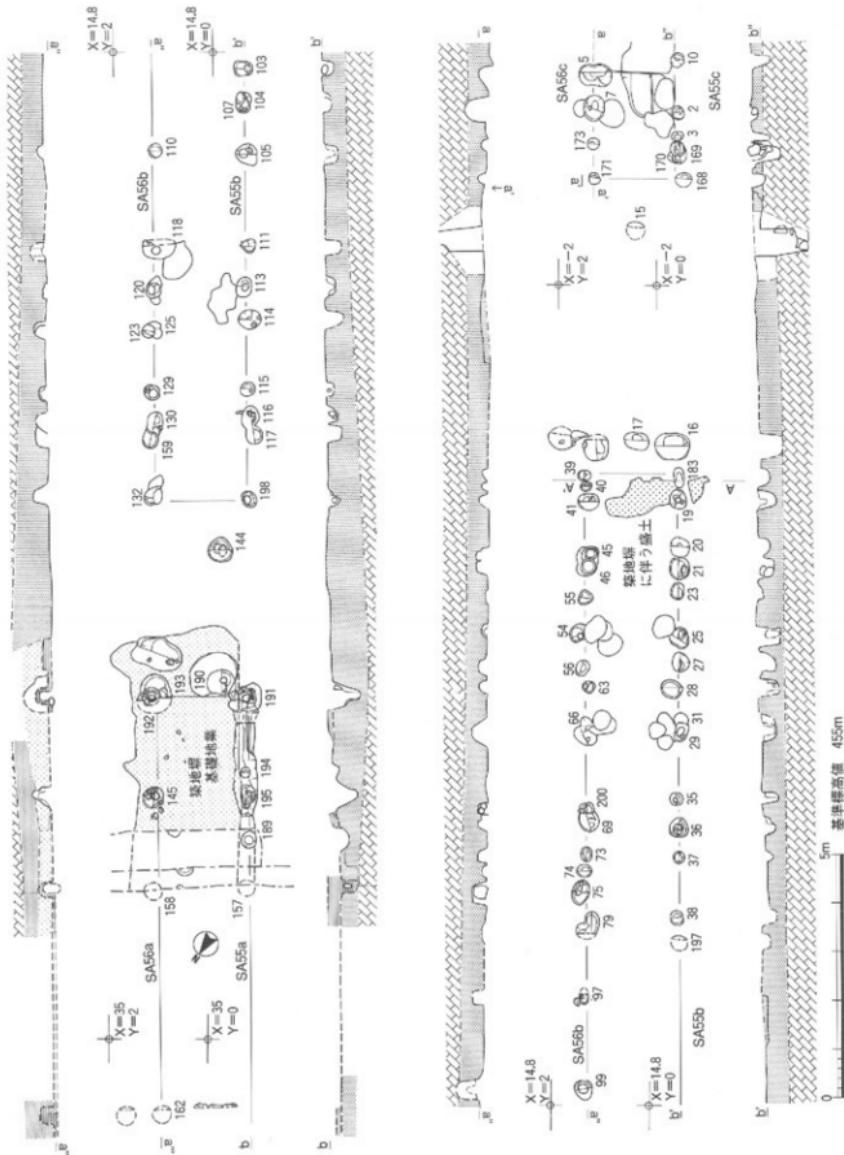
なお、その南端部、X座標2.0～2.8、Y座標−0.4～−1.0の範囲で、築地塀に伴うと考えられる盛土を下館基盤十層面向で検出したが、残っている盛土の厚さは約8cmほどである（第20図の1）。

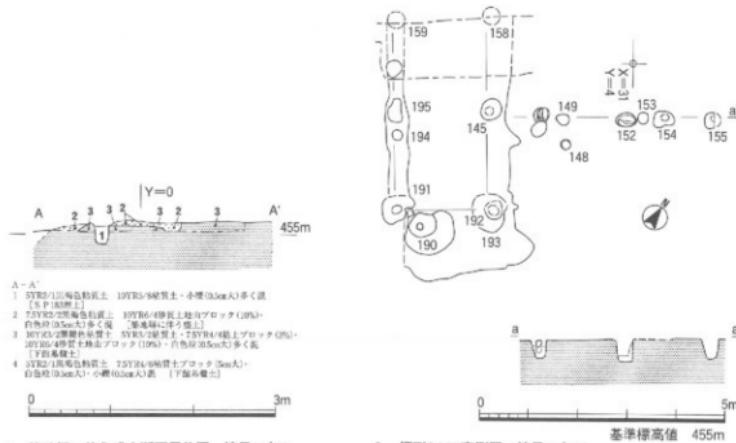
**SA55c・SA56c**（第19図）：主門の南側、X座標−7.0～−4.2間に位置する。SA56cの主軸ラインはほぼY座標1.3ライン上にあり、SA56a・bの主軸ラインより約20cm西にずれる。SA55c・SA56cの間隔は約1.7m（5.6尺）である。調査区外の南へ延びるが、南堀に伴う区画施設を確認していないため、その南端・全長は不明である。柱間距離はSA55cでは一定ではないが、SA56cではほぼ20.7m（2.3尺）等間と考えられる。柱穴の平面形・規模は不揃いであり、長径22～52cm、深さ15～54cmを測る。SP169は柱の抜き取り穴を観察でき、その埋土に縁がある。

**築地塀構築時の石列・柱穴列の掘り込み面と築地塀機能時の生活面について（第13・19・21図）：**SA55・SA56の柱穴は、WAトレンチ北壁のSA56bのSP158埋土（第21図の第24層）・I地区1トレンチ北壁（X座標−5.0ライン）のSA55cのSP3（第13図のI地区1トレンチ北壁第32層）の観察から、下館基盤土層面上から掘り込み、A・B期遺構面構築土による周囲の造成とともに埋められていることがわかる。SP158・SP3では、柱痕跡や柱の抜き取り穴は観察できなかったが、SA55aのSP191、SA56aのSP192・SP145では、A・B期遺構面構築土と考えられる握形埋土を掘り込む柱痕跡や柱の抜き取り穴を確認できる。同様に、北堀に面する築地塀はその南辺として基底部石列SV01を下館基盤土層面上に並べ、A・B期遺構面構築土によって一帯の盛土造成を行い生活面を構築した後、築地塀を築いていると想定できる。柱穴列の主軸方位、またA・B期遺構面構築土層との関係から、築地塀はA期建物に伴うものと考えられる。堀も含め、A期建物に伴う遺構には、その構築にあたって前段階の生活面と考えられる下館基盤土層面上から掘り込むが、その機能時の生活面は上層のA・B期遺構面構築土層面上であるものがあると考えられる。

なお、SP158・SP3では柱痕跡が調査地区及びトレンチ壁にかからなかったか、分層しきれなかつたため確認できなかったものと考えられる。遺構検出面がA・B期遺構面構築土層面上であるⅢ地区では、径15cm前後の柱痕跡や柱の抜き取り穴を検出し難くなかったものと考えられる。

**土壘について（第21図）：**1994年度報告では「西堀の内側の土壘状の盛り上がりはWAトレンチ第22層黒褐色土に認められ、これを土壘の基底部と考えると第6層にぶい黄褐色土、第7層黒褐色土、第8層暗褐色土、第9層暗褐色土、第10層灰黃褐色土、第11層黒褐色土、第12層黒褐色土、第13層黒褐色土、第14層黄色灰色土は、基底部上の版築盛土と推定できる」と報告している。今回の調査において、WAトレンチを再検出し、観察を行った（第21図）。1994年度報告第22層は、今回調査の第30層の下館基盤土層に相当するが、その西側の傾斜は、SD22及び耕地造成時の削平によるものであり、東側の傾斜は築地塀の基礎地栄に伴う掘削によるものであると観察できた。基底部上の版築盛土としていた1994年度報告の第6～14層は、今回調査の第11～18層の旧耕作土に相当し、土壘に伴うものではない。今回の調査では土壘に関する遺構は確認できなかったが、長野県中野市の高梨氏館跡の事例に見るように、先行する築地塀を土壘に改修して使用する事例もある。築地塀の上部構造は後世の削半によって全く残っておらず、築地塀を土壘に改修した可能性は想定できよう。





第20図 城地盤に伴う盛土断面層位図、横列SA57実測図



第21図 II地区WAトレントII北壁断面層位図 比尺1/800

### 柵　列（第20・22図）

**SA57**（第20図）：Ⅱ地区北東部、X座標29.7～30.1、Y座標0.9～5.7に位置する東西方向の柵列である。主軸方位はY-0.0°-Nを測り、座標に一致する。検出長は2間、3.5m（11.5尺）である。柱間はほぼ1.7m（5.7尺）等間と考えられる。西への延長ライン上にSA56aのSP145があり、SA56aとほぼ直交することから、築地塀にともなう脇門北側の柵列と考えられる。柱穴は円形・楕円形であり、長径32～43cm、深さ35～45cmを測る。遺物は出土していない。

**SA51**（第22図）：I地区中央部、X座標3.1～6.7、Y座標0.6～1.2に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はX-2.0°-Eを測り、座標とほぼ一致する。総長は3間、3.18m（10.5尺）である。柱間は、ほぼ1.06m（3.5尺）等間である。柱穴は方形に近いものが多く、長径49cm前後、深さ46～59cmを測る。SA54と重複し、SP199→SP59、SP48→SP47からSA51→SA54であることがわかる。遺物は出土していない。

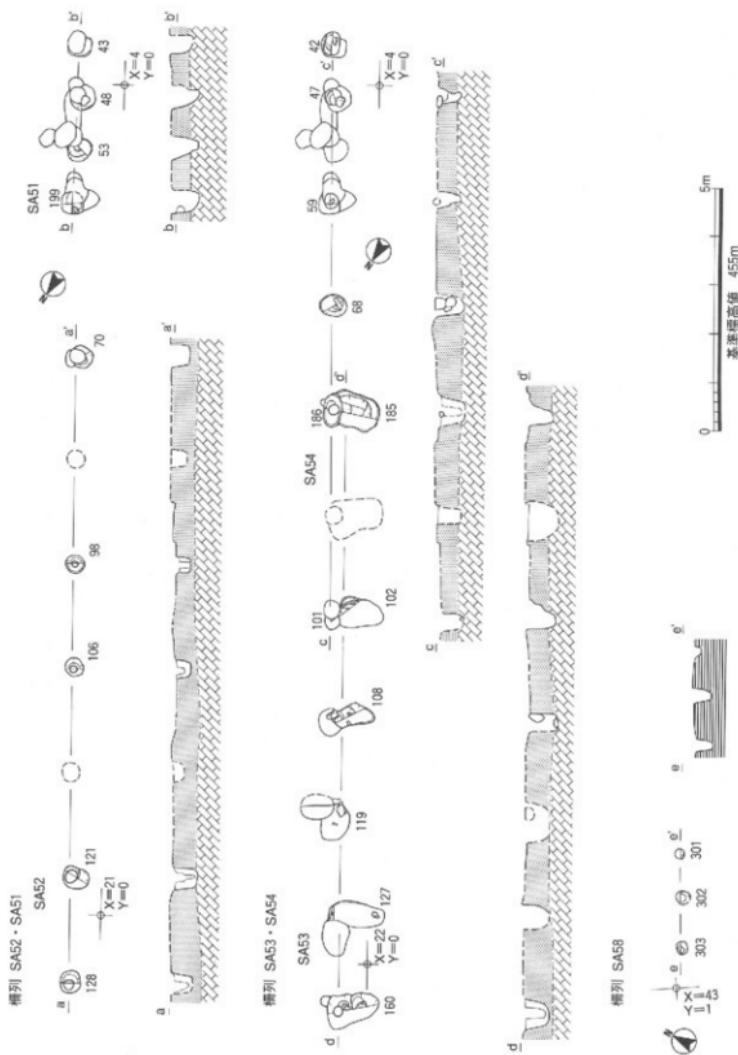
**SA52**（第22図）：I地区中央部～Ⅱ地区中央部、X座標9.4～22.7、Y座標20.4～1.0に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はX-1.0°-Wを測り、座標にはほぼ一致する。総長は検出4間（推定6間）、13m（43.0尺）である。柱間は、約2.2m（7.2尺）等間と考えられる。柱穴は円形・楕円形であり、長径36～53cm、深さ29～51cmを測る。SP98で径12cm、検出長20cm、SP106で径15cm、検出長15cmの柱痕跡を確認し、SP121・SP128では柱の抜き取り穴が観察できる。SA53・SA54と重複するが、直接切り合わない。遺物はSP121から土師器皿1点が出土している（第28図の8）。

なお、SA51とSA52は、SA51の柱間（3.5尺）がSA52の柱間（7.2尺）のほぼ半分であり、柱筋を通すことも可能であることから、一連の柵列の可能性も考えられるが、SA51北端SP199とSA52南端SP70の間隔は3.13m（10.3尺）であること、柱穴断面形が異なることから、別個の柵列としておく。

**SA53**（第22図）：X座標4.1～15.1、Y座標-0.7～1.2に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はX-1.0°-Wを測り、座標にはほぼ一致する。総長は検出5間（推定6間）、12.2m（40.1尺）である。柱間はほぼ2.0m（6.6尺）等間と考えられる。柱穴はSP119を除いて、長径が86～110cmを測る東西に長い平面楕円形である。柱穴の底部は東西に長細い柱穴の東側に片寄っており、東側壁面は垂直に近いが、西側壁面は、西に大きく傾斜する。SP119のみは南北方向に長い平面楕円形であるが、未掘のため、底部形状は不明である。全ての柱穴に、拳大以上の礫が入っており、SP108は底部に柱穴内礫石を掘る、根固め石1個を持つ。SP160は根固め石を持つ。SA54・SA56と重複し、SP185→SP186、SP102→SP101からSA53→SA54であること、SP119→SP118からSA53→SA56であることがわかる。遺物は出土していない。

**SA54**（第22図）：I地区中央部からⅡ地区南部、X座標4.1～15.1、Y座標-0.3～1.2に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はX-1.0°-Wを測り、座標にはほぼ一致する。総長は検出4間（推定5間）、10.8m（35.6尺）である。柱間はほぼ2.2m（7.1尺）等間と考えられる。柱穴は円形・楕円形であり、長径29～64cm、深さ30～57cmを測る。SP68は柱穴の下部から4個の礫が固まって入っていることから、根固め石であると考えた。その他の柱穴の埋土中にも拳大以上の礫が入るが、根固め石であるか、埋土中に混入しただけであるかは、判断できなかった。SP47・SP186では柱の抜き取り穴が観察できる。SA51～53と重複し、SP59→SP199、SP47←SP48からSA54←SA51であること、SP186←SP185、SP101←SP102からSA54←SA53であることがわかる。SA52とは直接切り合わない。遺物は出土していない。

**SA58**（第22図）：Ⅲ地区南部、X座標42.6～42.9、Y座標2.6～3.8に位置する東西方向の柵列である。主軸方位はY-3.0°-Sを測り、B期建物の主軸方位とほぼ一致する。総長は2間、2.0m（6.4

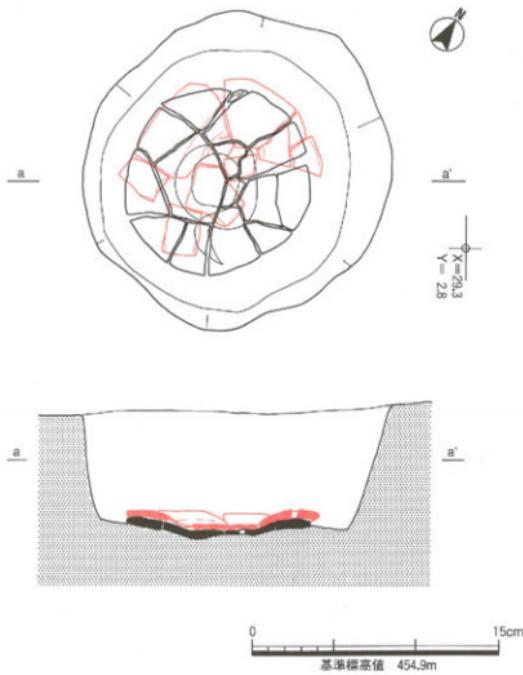


第22図 橋梁SA51・SA52・SA53・SA54・SA58実測図 縮尺 1/100

尺)である。柱間は西から1.1m(3.6尺), 0.9m(3.0尺)である。柱穴は円形であり、長径20~29cm, 深さ7~38cmを測る。SP146で径9cm, 檜出長14cmを測る柱痕跡を確認している。図示していないが、SP303から瓦器1点が出土している。

(e) 地鎮造構 (第23図)

SP148(第23図): II地区北東部, X座標29.3, Y座標2.7, 脇門の北東約4m, SA57の南側に位置する。平面形は径18cmの円形であり、深さは8cmを測る。底面はほぼ平坦である。底面中央部から、土師器皿2枚が内合わせに重なった状態で出土した(第28図の12・13)。2枚の土師器皿の内面及び上部の1枚の外面底部には墨書きがある。その字句から地鎮のために納めた土師器皿と考えられる。上部の1枚の外面底部には「西方」と記されており、SP148が脇門の北側、堀内地区的西隅部に位置することから、堀と築地塀に囲まれた館の中心区画に対する地鎮を行ったものであり、他に南・北・東の隅部と館の中心付近の計5ヶ所に同様のかわらけを納めた穴があるものと推定できる。土師器皿は16世紀前半のものと考えられる。通常、このような地鎮行為は新たに建物を建てる時、または大規模な建て替えに際して行うことであるが、これまで検討している下館の時期変遷においては、16世紀前半は館として機能する時期としては末期にあたり、大規模な建て替えは想定しにくく、何らかの



第23図 地鎮造構SP148土師器皿出土状況実測図 縮尺1/3

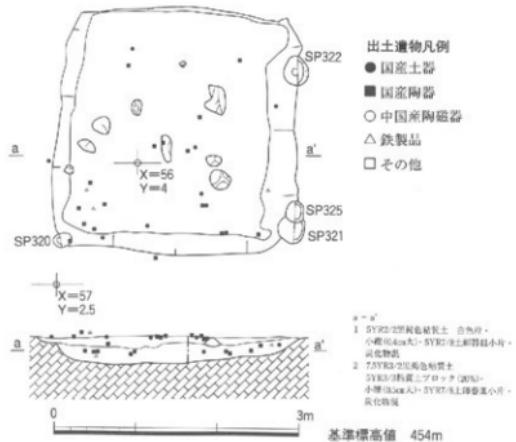
凶事があったため、その祓いとして行った地鎮の可能性も考えられる。建て替えと地鎮遺構との関係は、今後も調査を継続ながら、検討していきたい。なお、埋土のサンプリングを行わなかったため、内合わせにした土師器皿の内面に五穀等が納められていたかどうかは確認していない。

#### (f) 壺穴住居（第24図）

北堀の北側で1棟を検出した。

S121（第24図）：Ⅲ地区中央部、X座標54.0～57.0、Y座標2.7～5.9の範囲に位置する。平面規模は一辺約3mの方形である。主軸方位はY=0.0°～Nを測り、座標と一致する。下館基盤上層面上から掘り込み、検出した深さは33cmである。底面は、地山をほぼ平坦に掘り込み、そのまま使用していたようである。北・西側壁面は比較的鋭角に立ち上がり、南側壁面はやや緩やかに傾斜しているが、底面、検出上端との境は明瞭である。東側壁面は、調査区東壁内にあり、検出していない。底面外周に壁面にそってめぐる溝、またS121の主柱穴と考えられる柱穴は検出していない。S121→SP321・SP325・SP322、S121←SP320である。

遺物は埋土中から土師器皿8点、瓦器1点、珠球12点、壺系陶器（越前）4点、瀬戸・美濃2点、鉄製品3点が出土している（第29図の14～18）。出土遺物の年代は13世紀中葉～15世紀代である。図示できた遺物中最も新しい年代を示すものは古瀬戸中Ⅳ期の瀬戸・美濃の折縁深皿であるが、14世紀中頃～15世紀代の年代を持つ越前の甕や、細片ではあるが江馬館の最盛期である15世紀代の年代を持つT-6類かT-7類に属する土師器皿も出土している。S121出土の壺系陶器（越前）4点は、SV01南側の堀内地区内の旧耕作土（耕地造成土）出土の接合した2点、SD22埋土出土の1点と、接合しないものの同一個体と考えられる。これらの接合関係から、S121の埋め戻しもSD22の廃棄と同時期と考えられ、S121は江馬氏下館Ⅲ期の遺構と考えられる。



第24図 壺穴住居S121実測図 縮尺1/60

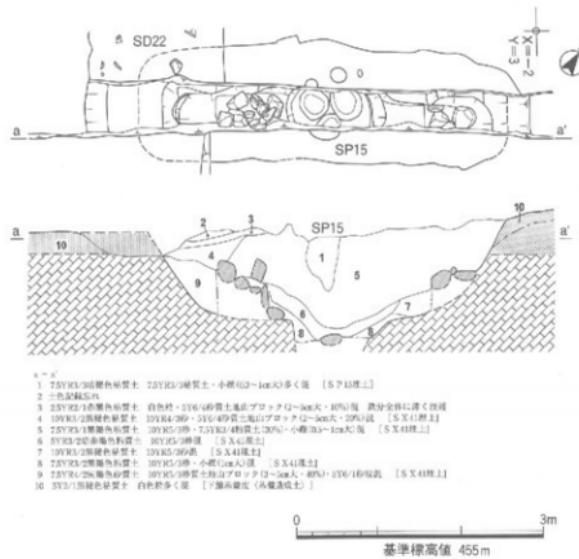
## (g) 不明土坑（第25図）

**SX41**（第25図）：I 地区南側、X座標-3.6~2.1、Y座標-1.8~2.7の範囲に位置する。平面は長辺4.5m、短辺1.5mの隅丸長方形である。主軸方位はY-2.0°-Sを測り、座標にはば一致する。土層確認のために設定した2トレンチ内で土層の堆積・掘り込みの状況を確認した。2トレンチ幅が50cmと狭く、その掘り込み・底部形状は断定できないが、観察できる範囲では、東西両側ともに、検出面から約1.1mの深さまで急傾斜で掘り込み、そこで穴の中央部に向かって緩やかに傾斜するテラス状の平坦面をつくる。この平坦面上部の埋土内には、東西共に長軸10~30cm前後の船津花崗岩礫が多く含まれる。SX41中央部ではさらに径1.4m程の円形の掘り込みが観察でき、その埋土中に長径40~50cm前後の川原円礫3個を検出した。その上面までの深さは約1.6mである。遺物は出土していない。

## (h) 溝（第12・13・26図）

下館Ⅲ期のものと考えられる溝1本を確認した。

**SD22**（第12・13・26図）：西堀の東側に延びる南北方向の溝である。X座標-7.0~-59.2、Y座標-4.5~-0.8の調査地区全体に延びる。検出長は66.4mを測る。主軸方位はX-2.0°-Wであり、座標にはば一致する。各調査区境界の土層確認用トレンチ内で確認できる範囲で、上幅は約170~208cm、下幅は35~60cm、深さは32~45cmである。地形の傾斜にそって南から北へ低くなり、底面レベルは南端のI地区1トレンチ北壁で454.798m、北端のⅢ地区北壁で453.332mである。II地区のX座標21.0~-Ⅲ地区のX座標46.0の範囲は、耕地化の際の削平や搅乱をうけ、その掘形は明確ではない。

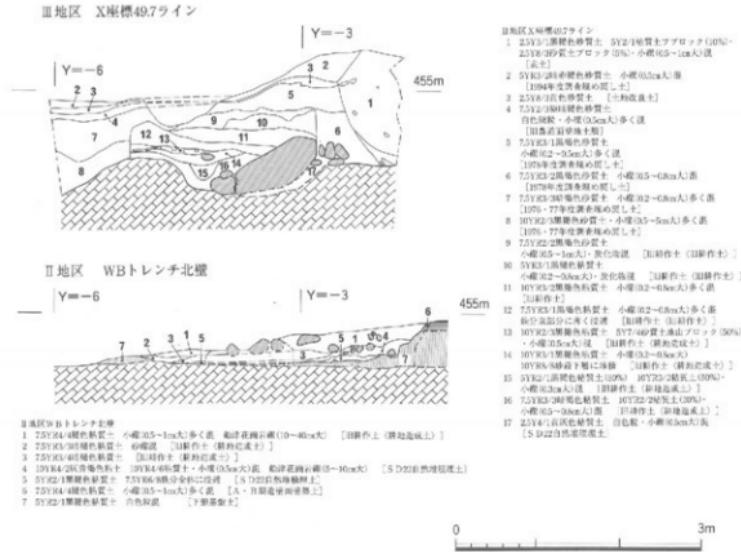


第25図 不明土坑SX41実測図 縮尺 1/60

調査地区壁及び各トレチ壁等で埋土の観察を行った(第13・26図)。I・II 地区内のSD22は壇内地区側のA・B期遺構構築上層を削平した旧耕作土(耕地造成土)で埋め戻されている(第13図 II 地区南壁第19~23層・I 地区 1 トレチ北壁第26層)。II 地区の牆門に面するSD22埋土中、X 座標21.0~30.0、Y 座標-5.0~-3.0 の範囲で確認できる礫群は、1994年度報告ではSX01として「中世の生活面と考えられる黒褐色土上にあり、土星及び門に関係するもの」と考えていた。今回の調査の結果、これらの礫群は旧耕作土(耕地造成土)に含まれていることを確認し(第26図 II 地区 WBトレチ北壁第1層)、耕地に畦を築くための土留め石列であったと考えられる。I 地区の主門推定位置に面するSD22埋土中にも礫が多く、礎石と考えられる礫もあり、門周辺のSD22埋土内の礫は、門の構築物に使われていた可能性があろう。III 地区では築地界基底部石列の石材であったと考えられる礫群 SX35・SX37をSD22埋土内で検出している。III 地区 X 座標48以北では、SD22埋土の直上に耕地の境と考えられる石列SV05や耕地化後の道路状遺構SF01が作られる。

遺物は自然堆積埋土中から土師器皿1点、珠洲3点、鉄製品1点、石製品1点が、SD22埋め戻し土である旧耕作土（耕地造成土）中から土師器皿1点、瓦器1点、珠洲4点、壺器系陶器1点、瀬戸・美濃2点、白変系陶器1点、白磁3点、近世陶器1点、不明陶器1点が出土している（第29図19～24）。最も新しい年代を示す遺物は登窯第1～2小期に属する志野丸皿であり、17世紀前半のものである（第29図24）。このような埋土・出土遺物の年代から、SD22は江馬氏下館Ⅲ期の遺構であり、耕地化に際して堀内地区側を削平し、その土でSD22を埋め戻したものと考えられる。

耕地化の際の搅乱等により、SD22と西堀の埋め立ての順序を調査区壁における土層堆積の観察から確認することはできないが、西堀の埋土がA・B期造構面構築土層上に築かれた築地場（または土



第26図 SD22断面層位図 縮尺1/60

塗）を押し崩したものと考えられ、西堀と築地塀の中間にあるSD22はA・B期遺構面構築土層を削平、押しならした旧耕作土（耕地造成土）で埋めたてていることから、II B期末の館の廃棄時に築地塀（または上塗）の上部盛土部を崩して西堀を埋め戻した後、江馬氏下館Ⅲ期にSD22を設けたものと考えられるよう。またSD22の機能時には館北西隅部の築地塀の基底部石列は残っていたものと考えられる。

#### (i) 近世以降の遺構（第12・13・22図）

Ⅲ地区北西部で検出した近世以降の耕地化に際して設けられた施設である。

**SF01**：SD22を埋めたてた後に設けられた農道である。

**SV04**：Ⅲ地区中央部、SD22埋土上にならぶ東西方向の石列である。SV02の西への延長線上にあり、SV03同様、耕地境の石組み畦である。

**SV05**：Ⅲ地区的北寄り、SD22埋土上にならぶ南北方向の石列である。耕地境の畦を築く際の土留め石または石組み畦と考えられる。SF01を切る。

**SD23・SV06**：SD23は農業用の水路であり、SV06はSD23の東側の石組み壁である。

## 4 遺 物

1998・1999年度調査地区から出土した遺物は、中世の土器・陶磁器片の他に鉄製品、石製品、錢貨、繩文土器、近現代陶磁器など、その総数は232点である。

これらの遺物のうち、館の存続期間である13世紀後半～16世紀初めの年代を持つ中世土器・陶磁器は181破片、6.32個体分である。今回の調査地区は過去の調査地区と重複している部分が多く、過去の調査において掘削の及んだ範囲の遺物はすでに取り上げられている。また、耕地化に伴う削平等によって土が移動していること、すべての遺構埋土を完掘しておらず、取り上げていない遺物があることから、使用・廃棄の状況を完全には把握できないことを念頭におきつつ、若干の分析を行った。

第8表に種類別組成を、第9表に用途別組成を、堀内地区・堀外地区の遺構内、遺構外の旧耕作土のうち〈耕地造成土〉と〈旧耕作土・1976～1978年度調査埋め戻し土〉毎に集計した。堀内地区的遺構内には堀跡出土遺物、A・B期遺構面構築土層・下館基盤上〈基盤造成土〉層出土の遺物も含む。堀外地区的遺構内出土遺物は、ほぼS121出土遺物に限られる。遺構外の旧耕作土（耕地造成土）は、土層の観察から堀内地区側の遺構面を削平して押しならしたものと考えられ、この土層から出土した遺物は本来は堀内地区内で使用していたものと想定できるため、別欄に集計した。

今回の調査地区は館の北西隅部であり、陶磁器の使用を伴うような遺構自体が近辺に存在しないことから、下館機能時における陶磁器の使用そのものが少なかったものと考えられる。

堀内地区的遺構内出土遺物および本来は堀内地区で使用していたと考えられる旧耕作土（耕地造成土）出土遺物では、種類別組成において土師器皿の占める比率が高い。堀内地区については、ほぼ完形で出土した地鎮遺構SP148の土師器皿2点を含むためであるが、用途別組成についてみても、食膳具における土師器皿の比率が高く、堀内地区内で行われた土師器皿を用いた儀礼祭祀の行為を反映していると考えられよう。またこのような状況は、過去の調査における堀内地区的遺物の出土傾向と同様である。

一方、堀外地区的遺構内出土遺物については、そのほとんどがS121出土のものであるため、その比率はS121における陶磁器の使用比率を示しているが、種類別組成において珠洲の占める比率が高く瀬戸・美濃の出土量も堀内地区に比べて多いことがわかる。用途別組成においては貯蔵具の比率が高い。また食膳具においても、瀬戸・美濃の比率が高く、相対的に土師器皿の比率が低くなる。調理具の出土はなかった。その比率からは、堀の外に貯蔵具の使用を伴う施設を配置しており、そこでは食膳具として瀬戸・美濃も多く用いるという使用の状況がうかがえよう。

遺物の接合関係は、Ⅲ地区堀内地区のA・B期造構面構築土層から約50cm離れて出土した瀬戸・美濃の折縁深皿2点（第28図の4）、Ⅲ地区堀内地区の旧耕作土〈耕地造成土〉中から約3.4m離れて出土した壺器系陶器（越前）の壺2点、S121出土の壺器系陶器（越前）の壺2点、瀬戸・美濃の折縁深皿2点（第29図の15）の4例が接合した。また壺器系陶器（越前）は、S121出土の4点（うち2点は接合）、これから約12m南へ離れたⅢ地区堀内地区的旧耕作土〈耕地造成土〉出土の接合した2点、その約1.1m西のSD22埋土出土の1点が、接合しないものの同一個体と考えられる。

以下、遺物の諸特徴を述べるが、中世陶磁器については、珠洲を吉岡康暢氏の編年に、瀬戸・美濃を藤沢良祐氏の編年に、中国陶磁器を国立歴史民俗博物館集成の分類に、それぞれ依拠して記述した（吉岡1994・藤沢1996・国立歴史民俗博物館1993）。土師器皿・瓦器については、1994年度調査報告書で示した分類に沿って記述している（第27図、神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995）。胎土・焼成については、「胎土は密であり、焼成は良好」なもののが大半を占めるため、この場合は、特に記述しなかった。法量等の詳細データ・土師器皿の色調等も別表9に示し、ここでは触れない。

#### (a) 造構内出土遺物（第28図の1～13）

**下館基盤土〈基盤造成土〉出土品（第28図の1）：**1は繩紋土器の壺である。胎土は密であり、砂粒を多く含む。内面に煤が付着している。

**A・B期造構面構築土出土品（第28図の2～4）：**2は土師器皿であり、T-2類に属する。胎土は気泡を含むが、密である。

3・4は瀬戸・美濃である。3は入子の底部破片であり、内外面無釉である。外面底部に回転糸切り痕が残るが、摩耗している。内面底部から立ち上がりにかけてよく摩耗している。胎土は、気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸戸前Ⅲ期～中Ⅱ期に属し、13世紀後半～14世紀前半のものである。4は折縁深皿である。口縁部は一旦外折し、口縁端部は内側に折り返される。折り返された端部上面は中央部が最も膨らむ。内面と外面底部上半に淡黄緑色透明の灰釉を施すが、二次被熱により内外面に細かい気泡がみられ、外面の釉はやや白濁する。胎土は砂粒を含み、密である。色調は灰色を呈する。古瀬戸戸中Ⅳ期に属し、14世紀中頃のものである。約50cm離れて出土した2破片が接合した。

**西堀埋土出土品（第28図の5）：**5は珠洲の壺である。口縁部は上面が丸みをもちつつ短く「く」字状に屈曲し、端部下面をしっかりと押さえているため、端部は断面四角形を呈する。体部外面に3cm幅に7条の叩き目を施し、内面には当て只痕が残る。胎土は砂粒と気泡を含み、やや粗い。薄綿骨針を含む。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期末～V期初めに属し、14世紀後半のものである。

**北堀埋土出土品（第28図の6～7）：**6・7は土師器皿である。6はT-2類に属し、胎土は密である。内面にわずかに煤・タールが付着し、内面口縁端部から体部側約1cmの軸で明橙色に変色しており、灯明皿として使用したと考えられる。7はR-5類に属する。胎土は細かい気泡を含み、密であるが、焼成はやや悪い。

**SA52柱穴出土品（第28図8）：**8は七師器皿であり、T-5類に属する。胎土は砂粒を含み、密である。口縁端部内外面にタールが付着し、灯明皿として使用したと考えられる。

**SP174出土品（第28図の9）：**9は土師器皿であり、T-6類かT-7類に属する。胎土は砂粒を含み、密である。

**SP175出土品（第28図の10）：**10は土師器皿であり、T-6類かT-7類に属する。胎土は0.2cm大の

第8表 1998・1999年度調査地区出土中世陶磁器の種類・器種別組成表(13世紀後半~16世紀前半)

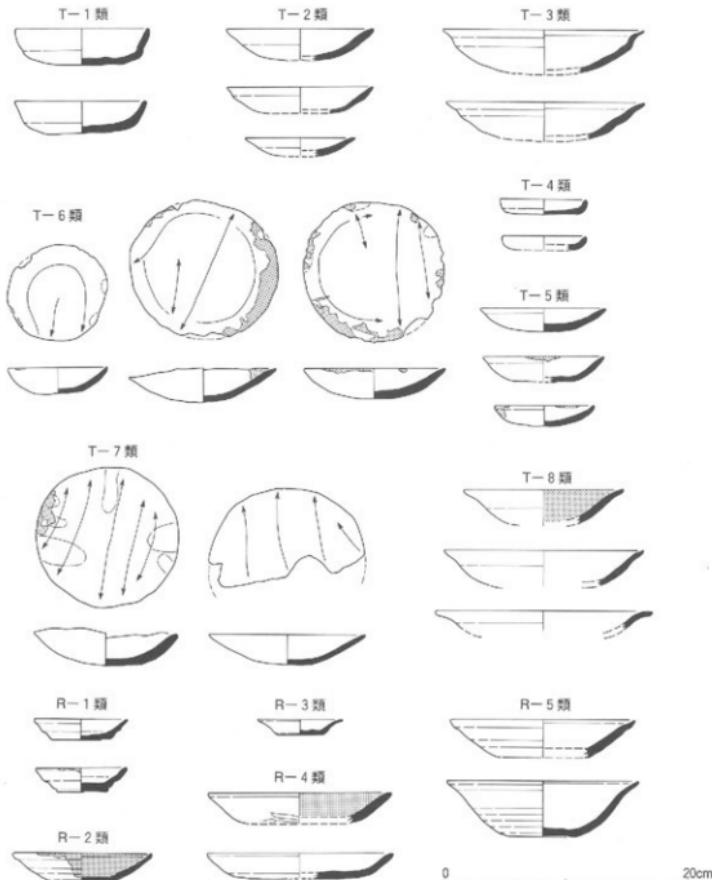
種類	器種	遺構内出土遺物				遺構外出土遺物			
		施設内地盤		施設外地区		旧耕作土(耕作造成)		旧耕作土(耕作造成)、1978年復元層の上土・表土	
		破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数
土器	壺	20	2.58[100.0%]	9	0.14[100.0%]	30	1.38[0.0%]	22	1.05[100.0%]
	小計	20	2.58[96.9%]	9	0.14[27.5%]	30	1.38[66.2%]	22	1.02[61.6%]
瓦	瓦	1	0 [※%]	1	0 [※%]	4	0 [※%]	2	0 [※%]
	小計	1	0 [※%]	1	0 [※%]	4	0 [※%]	2	0 [※%]
珠	玉			2	0.15[60.0%]			2	0.03[100.0%]
	玉	3	0 [※%]	6	0.10[40.0%]	8	0 [※%]	8	0 [※%]
	玉・玉	3	0 [※%]	4	0 [※%]			4	0 [※%]
	すり鉢					3	0.04[100.0%]	5	0 [※%]
	小計	6	0 [※%]	12	0.25[49.0%]	11	0.04[2.5%]	19	0.03[1.9%]
空器系陶器	壺					3	0 [※%]		
	壺			4	0 [※%]			2	0.05[100.0%]
	八尾							1	0 [※%]
	器器系壺	1	0 [※%]			3	0 [※%]	3	0.05[3.1%]
	小計	1	0 [※%]	4	0 [※%]	3	0 [※%]	4	0.08[20.0%]
漆戸・美濃	碗					3	0.09[50.0%]	5	0.32[80.0%]
	皿	1	0 [※%]			2	0.09[50.0%]	1	0 [※%]
	蓋	2	0.03[100.0%]	2	0.12[100.0%]	1	0 [※%]	1	0 [※%]
	器			1	0 [※%]			1	0 [※%]
	小計	3	0.03[1.1%]	3	0.12[23.5%]	5	0.18[11.3%]	11	0.40[25.3%]
白染系角鉢	碗					2	0 [※%]	1	0 [※%]
	小計					2	0 [※%]	1	0 [※%]
中山陶器	青磁					1	0 [※%]	2	0.05[62.5%]
	白磁					2	0 [※%]	1	0.03[37.5%]
	皿	1	0 [※%]			1	0 [※%]		
	小杯	1	0 [※%]			4	0 [※%]	3	0.08[5.1%]
総計		32破片	2.61個体分	29破片	0.51個体分	59破片	1.69個体分	61破片	1.58個体分

\*個体数は全て田舎部町法による。率は破片が存在するが個体数として表れないもの。  
†括弧には施設における各種類の比率を示す。(括弧)はそれぞれの種類における各器種の比率を示す。

第9表 1998・1999年度調査地区出土中世陶磁器の用途・種類別組成表(13世紀後半~16世紀初め)

用 途	種類	遺構内出土遺物				遺構外出土遺物			
		施設内地盤		施設外地区		旧耕作土(耕作造成)		旧耕作土(耕作造成)、1978年復元層の上土・表土	
		破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数
食器	只	18	0.92[96.8%]	9	0.14[53.8%]	30	1.38[88.5%]	22	1.02[71.3%]
	瀬戸・美濃	3	0.05[3.2%]	2	0.12[46.2%]	5	0.18[11.5%]	9	0.33[23.1%]
	白染系陶器					2	0 [※%]	1	0 [※%]
	中国陶器	1	0 [※%]			4	0 [※%]	3	0.08[5.6%]
	小計	22	0.95[36.4%]	11	0.26[51.0%]	41	1.56[97.5%]	35	1.43[90.5%]
點滅器	只	6	0 [※%]	12	0.25[100.0%]	8	0 [※%]	14	0.03[37.5%]
	珠	1	0 [※%]	4	0 [※%]	3	0 [※%]	3	0.05[62.5%]
	器器系陶器					1	0 [※%]		
	直口・美濃			1	0 [※%]			1	0 [※%]
	小計	7	0 [※%]	17	0.25[49.0%]	11	0 [※%]	18	0.08[5.1%]
調理具	鉢					3	0.04[100.0%]	5	0 [※%]
	直口・美濃							1	0.07[100.0%]
	小計					3	0.04[2.5%]	6	0.07[4.4%]
その他	直口(調理具)	2	1.66[100.0%]						
	瀬戸・美濃								
	瓦	1	0 [※%]	1	0 [※%]	4	0 [※%]	2	0 [※%]
	小計	3	1.66[63.6%]	1	0 [※%]	4	0 [※%]	2	0 [※%]
総計		32破片	2.61個体分	29破片	0.51個体分	59破片	1.69個体分	61破片	1.58個体分

\*個体数は全て田舎部町法による。率は破片が存在するが個体数として表れないもの。  
†括弧には施設における各種類の比率を示す。(括弧)はそれぞれの種類における各器種の比率を示す。



## 手すくね虎形（T形）

- T-1型 体部が弧曲ぎみに立ち上がるもの。  
 T-2型 口縁部に一様の黒帯や外腹に施すもの。  
 T-3型 口縁部を深くし、最も外反させて底をつくるもの。  
 T-4型 体部が弧曲ぎみに立ち上がり小窓。  
 T-5型 口縫部に一様の黒帯や外腹に施すもの。  
 T-6型 内底だけを不規則に削て、口縫部の調節を若めするもの。  
 T-7型 内底に一方円の窓を施し、口縫部の調節を若めするもの。  
 T-8型 横腹ではより口縫部を強く外反させるもの。

## 輪廻形（R形）

- R-1型 口縫部がゆるく外ねする小窓。底部は斜面仕切り。  
 R-2型 口縫外腹を削り底取するもの。底部は斜面仕切り。  
 R-3型 口縫部が強く外反するもの。底部は芯立底張り。  
 R-4型 底立型で、体部が表面高に薄くもの。底部は斜面仕切り。  
 R-5型 底立型で口縫部がゆる外反するもの。底部は斜面仕切り。

第27図 江馬氏城館跡出土の土器器皿分類図 縦尺1/4

小蝶を含み、密である。

**SP309出土品**（第28図の11）：11は瀬戸・美濃の壺瓶類の底部破片である。水注と考えられる。外面体部の下部、底部から約4mm上に一条の沈線がめぐる。外面底部まで、淡緑灰色透明の灰釉を施す。胎土は気泡を含み、密であり、色調は灰白色を呈する。古瀬戸中I-II期に属し、14世紀前半のものである。

**地鏡遺構SP148出土品**（第28図の12・13）：12・13は土師器皿である。ともに内面底部を一方向に撫で、口縁上部内外面をつまんで横撫でを施したあと、内面体部立ち上がりから口縁端部にかけて横ナデを施しており、内面底部と体部の境が溝状にへこむ。II縁先端部にはナデが及んでいない。外面体部から底部にかけては無調整であり、不明瞭ではあるが、器形整形時のものと考えられる指頭圧痕が残る。内面体部にもナデ調整によって消されているものの、器形の整形時の指頭圧痕と考えられる窪みが観察できる。京都の土師器皿の影響を強く受けており、京都以外のところでつくられ、江馬氏下館に搬入されたものと考えられる。京都伊野分類のla-2類に類似し、内面底部と体部の境に溝状のへこみが観察できることから、16世紀前半のころのものと考えられる。12は内外面、13は内面に墨書きが残る。12は内面体部から底部にかけて、II縁端部から縦書きで放射状に5行の字句が記されており、「一徳元水神」「三主元木神」「五儀元上神」「□□元金神」「□□□□神」が判読できる。不明である一行は「□□元火神」であり、どちらかに、二・四の数字が入ると考えられる。外面は底部中央に「西方」と記されている。13も内面体部から底部にかけて、口縁端部から縦書きで放射状に5行の字句が記されており、「中央黄帝黄龍王」「西方白帝白龍王」「北方黒帝黒龍王」「東方青帝青龍王」「南方赤帝赤龍王」と判読できる。

**S121出土品**（第29図の14-18）：14は土師器皿であり、T-1類に属する。胎土は砂粒を含み、密である。

15は瀬戸・美濃の折縁深皿である。II縁部は一旦外折し、口縁端部は内側に折り返される。折り返された端部上面は中央部が最も膨らむ。外面体部下半は笠削り調整を行っている。内面と外面体部上面に浅黄色透明の灰釉を施すが、二次被焼により釉薬全面に細かい気泡がみられ、外面の釉薬はやや白濁する。胎土は砂粒を含み、密である。色調は乳白色を呈する。古瀬戸中IV期に属し、14世紀中頃のものである。II縁部と足部の2破片がともにS121内で出土し、接合しないが、同一個体である。

16・17は珠洲である。16は壺である。口頭部はゆるく外反して立ち上がる。口縁部は三角形に挽き出し、外傾して面をとっている。その端面と端部外面をつまんで強く撫でており、端面中央部がやや窪み、端部先端が丸く仕上がっている。胎土は海綿骨針と気泡を含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。珠洲IV期に属し、14世紀代のものである。17は壺である。口縁部は「く」字状に屈曲し、端部はやや四角く仕上げている。体部外面に3cm幅に11条の叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は砂粒と気泡を含み、密である。海綿骨針を含む。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。珠洲IV期初めに属し、14世紀初めのものである。

18は鉄釘である。残存長6cm、幅0.8cm程である。

#### (b) 遺構外出土遺物（第29図の19~33・第30図の34~52）

Ⅰ耕作土は、近世以降の耕地化にともなって造成された土層であり、第4章第2節の第7表に示したとおり細分できる。本項では、細分した層序順に報告したが、中近世の遺物包含層として同一の土層と考えてよいものである。なおSD22埋土・SV05裏込め土は細分土層の「耕地造成土」にあたる。

**SD22埋土出土品**（第29図の19~23）：19・20は土師器皿であり、ともにT-6類かT-7類に属し、胎土は密である。20は口縁端部にタールが付着し、灯明皿として使用していたと考えられる。

21は山茶碗の碗の底部である。無高台であり、外面底部には回転糸切り痕が残るが、摩耗が激しく不明瞭である。残存部の内面もよく摩耗している。胎土は気泡を多く含み、密である。長石粒を含む。色調は灰白色を呈する。藤沢編年の南部系山茶碗第10型式に属し、14世紀末～15世紀前半のものである。

22～24は瀬戸・美濃である。22は折縁深皿である。口縁部は一匁外折し、指で押さえて輪花状に仕上げている。内外面にオリーブ黄色透明の灰釉を施すが、二次被熱により口縁端部および内面肩曲部の釉薬は剥落している。胎土は砂粒・気泡を含み、やや粗い。色調は灰白色を呈する。古瀬戸中II期に属し、14世紀前半のものである。23は直縁大皿である。II縁部はほぼ直線的に延び、II縁端部は丸い。内外面にオリーブ黄色透明の灰釉を施しており、釉には細かい貫入が入る。胎土は密であり、色調は灰白色を呈する。古瀬戸後II期に属し、15世紀初頭のものである。24は志野丸皿である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。内外面に灰黄色の志野釉を施す。胎土は砂粒・気泡を含み、密である。色調は淡黄色を呈する。登窯第1～2小期に属し、17世紀前業のものである。

**SV05裏込め出土品**（第29図の25）：25は瀬戸・美濃の平碗である。I唇部は短くくびれ、外反気味に開く。淡黄緑色透明の灰釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後III期に属し、15世紀前半のものである。

**旧耕作土（耕地造成土）出土品**（第29図の26～32）：26～31は土師器皿である。26・27はT-2類に、28・29はT-6類かT-7類に、30・31はT-8類に属する。胎土は、26・29が気泡を、31は砂粒を含み、密である。26・28は口縁端部に煤・タールが、27は外面体部に煤が付着し、灯明皿として使用していたと考えられる。

32は瀬戸・美濃の平碗である。口唇部は短くくびれ、口縁部は外反して直線的に開く。オリーブ黄色透明の灰釉を施すが、二次被熱によって内面に細かい気泡ができている。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後III期に属し、15世紀前半のものである。

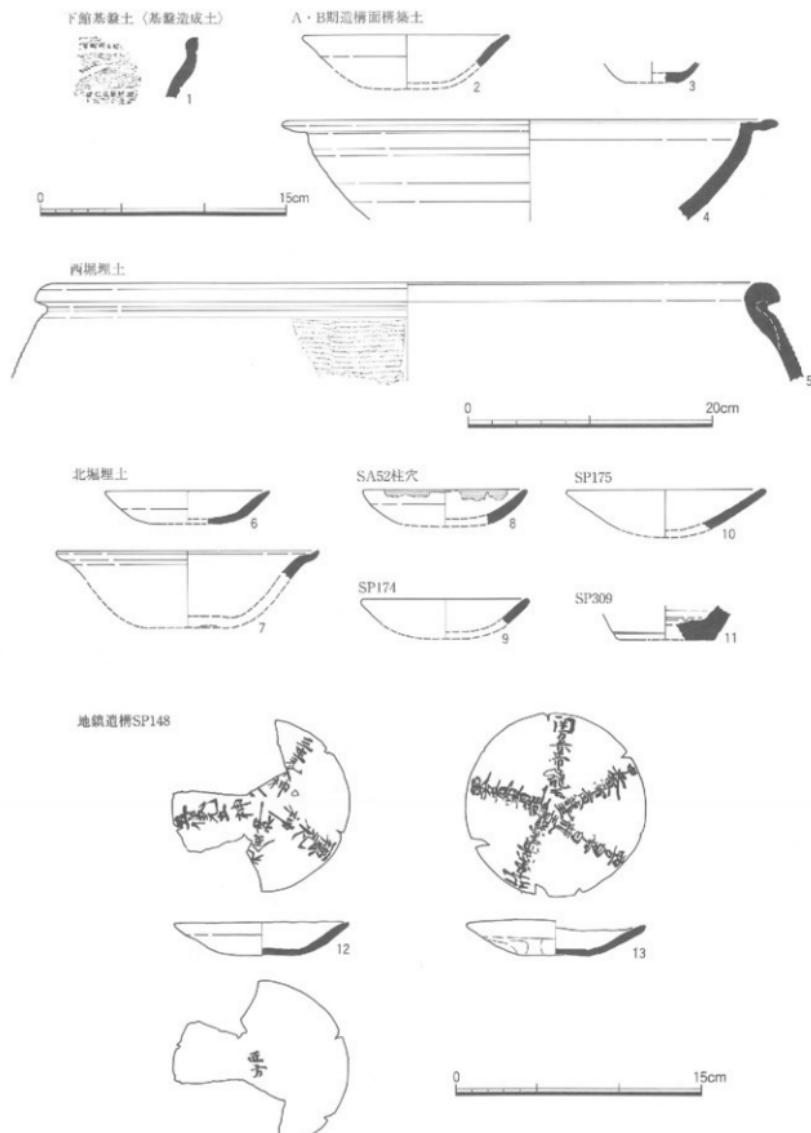
**SV06裏込め出土品**（第29図の33）：33は珠洲のすり鉢である。I縁部は内傾して面をとり、端部を外方向にやや引き出す。胎土は砂粒を多く含み、密である。海總骨針を含む。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。珠洲IV期に属し、14世紀代のものである。

**旧耕作土（旧耕作土・1978年度調査埋め戻し土）出土品**（第30図の34～52）：34は須恵器の杯蓋である。縁端部は丸く、内外面に輪轂回転撫で調整を施す。胎土は、砂粒を含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。

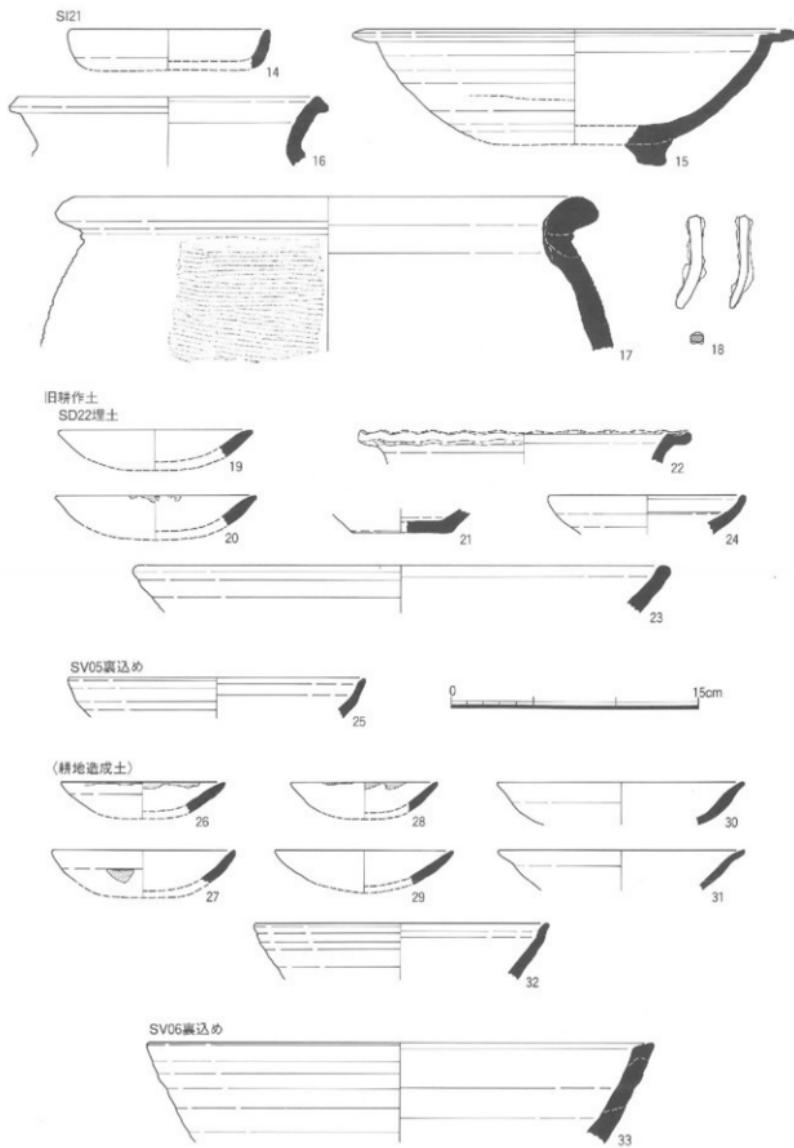
35～45は土師器皿である。35・44はR-5類に属する。36はR類に属し、外面底部には静止範囲り痕が残り、体部の立ち上がりがきつい。37はT-1類、38～40はT-2類、41はT-6類かT-7類、42・43・45はT-8類に属する。胎土は37が砂粒を含み密、41が砂粒・気泡を含み密である。44は胎土は砂粒・気泡を含み密であるが、焼成がやや悪い。38は外面に煤が、41は口縁端部にタールが付着し、灯明皿として使用していたと考えられる。

46は青磁の碗である。細かい気泡をわずかに含むガラス質オリーブ灰色釉を施す。釉には細かい貫入が入る。胎土は気泡、黒粒を含まず、密であり、色調は灰白色を呈する。

47・48は山茶碗の碗であり、ともに北部系（東濃産）である。47は胎土は北部系（東濃産）であるが、器形は南部系山茶碗のものである。内面底部中央部は摩耗しているが、周辺部に輪轂回転撫で調整痕が残る。外面底部は回転糸切り後、高台を張り付けている。高台は断面四角形を呈し、外側に開く。胎土は砂粒・気泡を含み密である。色調は灰色を呈する。藤沢編年の南部系山茶碗第5型式に属



第28図 出土遺物実測図(1) 縮尺 1/3 ただし 5は縮尺 1/4



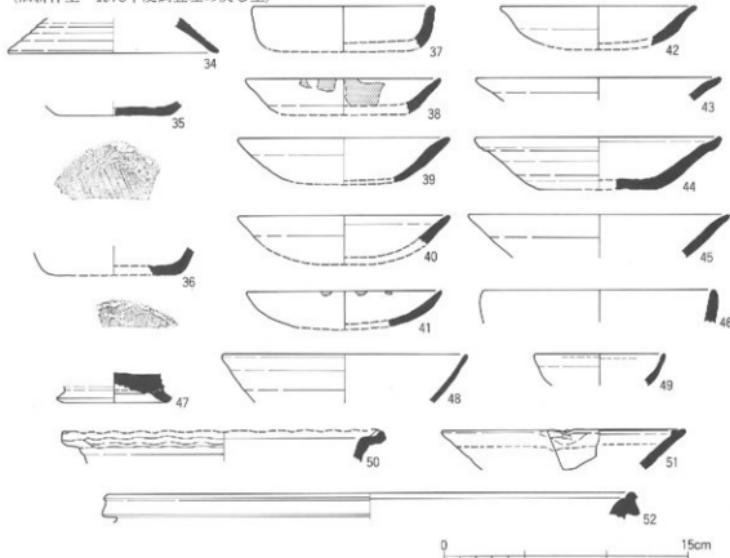
第29図 出土遺物実測図(2) 縮尺 1 / 3

し、12世紀末～13世紀初めのものである。48は器壁が薄く、体部はやや内碗気味に開き、口唇部はやくびれる。口縁端部は丸い。外面に軸轔回転撫で調整痕が残るが、内面はよく摩耗している。胎土は密であり、色調は灰色を呈する。藤沢編年の北部系山茶碗第Ⅷ期か第Ⅸ期に属し、15世紀前半のものである。

49～51は瀬戸・美濃である。49は入子である。口縁端部にオリーブ灰色透明の灰釉を施す。胎土は砂粒を含み、密である。色調は浅黄色を呈する。古瀬戸中Ⅱ～Ⅲ期に属し、14世紀中葉のものである。50は折縁深皿である。口縁部は一旦外折し、指で押さえて輪花状に仕上げている。外面に浅黄色の灰釉を施すが、二次被熱により剥落している。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸中Ⅱ期に属し、14世紀前半のものである。51はすり鉢型小鉢である。体部は直線的に開き、口縁部内側に小突起が形成される。口縁の一部を指で押さえて片口を作っている。体部上方内外面に黒褐色の鉄釉を施す。体部の露体の部分が、外面ともによく摩耗している。胎土は気泡を含み、密である。色調は乳白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(古)に属し、15世紀中頃のものである。

52は壺形系陶器の壺である。越中八尾窯の製品であり、口縁端部をN字状に折り曲げている。胎土は細かい気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。酒井重洋氏の分類による第2群壺b類に属する(酒井1990)。

〈旧耕作土・1978年度調査埋め戻し土〉



第30図 遺物実測図(3) 縮尺1/3

## 第5章 小 結

史跡整備に向けての知見を得るための江馬氏下館跡の発掘調査は、1995年度～1997年度にかけて、館の堀外地区の調査を行い、その空間利用の在り方や遺構の変遷など、多くの知見を得た。これら堀外地区における知見と、1978年度までの堀内地区の調査成果を整理検討し、下館の変遷における史跡整備の対象となる時期（江馬氏下館ⅡA期）の遺構配置を概ね把握出来るようになった。この知見を受け、1998年度からは整備事業の具体化に向け、整備の中心となる堀内地区に調査地区を移し、過去の調査における未解決点の解明を目的とする調査を計画し、実施している。

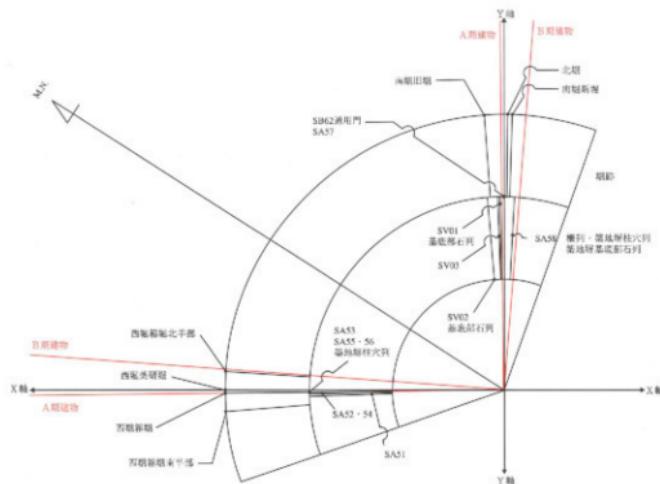
1998・1999年度の調査では、館の中心である堀内地区的西辺から北西隅部にかけての地区の調査を行ない、これまで土壘であると推定していた堀に伴う区画施設が築地塀であること、脇門が掘立柱建ちであることが明らかになり、同じく掘立柱建ちの庭園への通用門を確認し、主門は礎石建ちであったと推定できるなど、下館の空間構成を考える上で貴重な知見を得た。また、今回、堀内地区に調査が及んだことで、堀外地区では確認できない館の構築・建て替えに伴う整地上層（下館基盤十・A・B期遺構面構築上）を再確認し、1978年度概報で示されている堀内地区的整地上層と遺構の構築順序の関係についても、若干の新たな知見と、今後検討すべき課題を得た。

今回の調査で確認した遺構の変遷、堀内地区内の整地上層および1978年度調査時の堀内地区における時期区分との対応関係を、現在使用している江馬氏下館全体の変遷に併せて整理し、第10表に示した。また遺構の変遷の参考になる主軸方位の関係を第13図に示している。江馬氏下館の変遷とその意義については、これまでの調査報告書でまとめている（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1996・1997・神岡町教育委員会1998）。以下、今回の調査で確認した遺構に関する変遷の知見と今後の検討課題について述べ、まとめとしたい。

今回の調査によって、館の最盛期である江馬氏下館ⅡA期の下館の空間配置がほぼ明らかになった。ⅡA期には、館の三方向を南堀新堀、西堀薬研堀、北堀と築地塀で囲み、館の正面である西側には礎石建ちの主門、掘立柱建ちの脇門を設けている。その内側の館の中心である堀内地区には礎石建ちの規模の大きな建物、庭園を配し、また主門脇には掘立柱建ちの庭園への通用門も設けている。このような館中心部の空間配置は、「下館の様式は京都における『花の御所』に倣ったものであり、室町幕府との社会的関係の中で成立した」とするこれまでの知見（小島1996）をより強く裏付けるものであり、当時の武家館の在り方を遺構として確認できる貴重な事例といえよう。

江馬氏下館ⅡB期にはその主軸方位をかえて建物の建て替えを行うが、築地塀にかわる区画施設は遺構としては確認できなかった。ⅡB期にも堀はそのまま使用していることから、この時期も築地塀であった可能性が考えられる。一方、長野県中野市の高梨氏館跡にみると、築地塀を上塁に作り替えた可能性も想定できよう。北堀東部の堀内地区側は未調査であり、今後の調査の機会を待って再検討したい。西堀埋土及びSD22とその埋め戻し土の観察から、西堀はⅡB期末の館の廃棄時に堀内地区側の築地塀または上塁を崩して埋め戻したと考えられる。1997年度調査の知見からは、南堀新堀・北堀は、この段階では人為的には埋め戻されておらず、自然堆積によって埋まるに任せていたものと考えられる。

館の本拠が他所に移転した後の江馬氏下館Ⅲ期には、前段階の西堀と築地塀（または土塁）の間に、溝SD22を設けている。築地塀の盛土は譲されたものの、堀内地区北西隅部の築地塀基底部石列は残っていたものと考えられ、なかば埋まりつつあるものの、その形を残す南堀新堀・北堀も含め、何らか



第31図 1998・1999年度調査地区における遺構の主軸方位

第10表 1998・1999年度調査地区の遺構変遷表

時期区分	1978年版 四国考古 調査報告書	生活面(括弧内)は 遺傳情報時の振り 込土層面)を示す	建物	北端と その周辺	西端とその周辺	南端と その周辺	時期対応の根拠 および備考	
近世以降			耕作化に伴う削 平	<ul style="list-style-type: none"> <li>• SF01・SV04・SV05・SV06・SD23</li> <li>• 稲作の石組み畦野SV03</li> <li>• 施設基底延長SV02を除く・内利用</li> </ul> <p>耕作化に伴う一全体の土成・造営に伴い、壁や塀等を倒め延べ ・西端露端に面した築地盤基底部石列の取り壊し。SX35・SX37・SX38・SX39</p>				
日朝				<ul style="list-style-type: none"> <li>• 北端は自然 埋没</li> <li>• SD22</li> <li>• S121</li> <li>(地盤遭損SP148)</li> </ul>			• 南端新 堤は自 然埋没	
江 戸 時 代	II B 期 第3期	A・B類遺構面 構造土層面上 (A湖遺構面上)	城内地區 日朝建物 城外地區 獨立柱建物		<ul style="list-style-type: none"> <li>• 鎌形堤(または土堤)を取り壊し、その土で西端露研 堀・堀堤を埋め戻す</li> <li>[西端露堤北半部の一部改 修があつたか?]</li> <li>[東進堤の土堤への改修の 可能性も考えられる]</li> <li>• SA58</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>• 西端堤北半部の 主軸方位がA期建 物とは一致</li> <li>• 堀外地区の門番 地区では建物の主 軸方位がB期建 物とはほぼ一致するが 山麓地区は設せら れなかった</li> </ul>	
馬 氏 下 館	II A 期	A・B類遺構面 構造土層面上 (下鉢基盤土層面上)	城内地區 A期建物 庭園 城外地區 獨立柱建物	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 北端</li> <li>• 築地盤基底 部石列</li> <li>• SV01 SV02</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 断垣場(土槽2の両側) ・土槽2より西の西端露堀 はそのまま使用か?</li> <li>• 施設場柱穴列SA55・SA56 ・SA57(松北川側の東西通路) ・主門</li> <li>・箇門SB61</li> <li>・庭園への通用門SB62</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 新間に 改修</li> </ul>		
	第2期	【生活面は、未確定】 (下鉢基盤土層面上)			<ul style="list-style-type: none"> <li>【西端も新規? (主門南側 にも施設が残っており、 跡跡間に先行して露堀があつ た可能性が考えられる】</li> </ul>		• 旧堤	
	?	?			<ul style="list-style-type: none"> <li>• SA54 • SA51 [= "SA52, 主牆タイプ"] SA53</li> </ul>	?		
	第1期	下鉢基盤土層面上 (下鉢基盤土層面上)	城内地區 獨立柱建物	?	?	?		
I 期		地面上 (地面上)	城外地區 独立柱建物	?	?	?	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 1995-1997年度 開金町、城外地区 において発掘</li> <li>• 堀外地区との対 応は未確認。</li> </ul>	

・太字の遺構は1998・1999年度に確認した遺構を示す。

- ・[括弧内]は遺構としては確認できなかった、また現段階では断定できないが、可能性が想定できる事項を示す。

の区画の意識は残っていた可能性が推定できよう。そして、下館廃棄後、近世以降の耕地化に際して、西堀に面した築地塀基底部石列を壊してSD22を埋め、かつての築地塀基底部石列SV02を改修再利用して、耕地の石組み柱SV03を設けたようである。また、南堀・北堀も完全に埋めたものと考えられる。

今後の検討課題は、現在整理している江馬氏下館の変遷の再検討・整理である。現在整理している江馬氏下館の変遷は、建物の主軸方位から、1978年度概報の堀内地区の時期区分と堀外地区における建物の変遷を対応させている（江馬氏下館ⅡA期・ⅡB期が、1978年度概報の堀内地区の第2期（A期建物）・第3期（B期建物）にそれぞれ対応）。しかし、堀外地区では堀内地区で確認できる整地上層（A・B期遺構面構築土・下館基盤土）を確認できないために層位的に遺構の前後関係を把握できず、1978年度概報において第1期としている遺構群はトレンチ調査によって柱穴等を確認しただけであり、その全体的な配置等は不明であることから、現在整理している時期変遷中に1978年度概報における第1期の遺構群の対応はできていない。1978年度概報における第1期の遺構群は、下館基盤土層から掘り込み、館の創立に関わる時期とされることから（神岡町教育委員会1979），現在の時期Ⅰ区分においてはⅡ期に位置付けられ、A期建物の時期であるⅡA期の前にもう一段階、細分した時期を設けることができる可能性がある。今回調査でも柱穴の切り合いから、A期建物に伴うと考えられる築地塀柱穴列SA56に先行する横列SA53等を確認している。また西堀箱堀南半部の主軸方位が南堀旧堀と一致し、主門南側に箱堀状の掘り込みが残ることから、西堀もA期建物に伴う兼砾堀の前に箱堀の時期があり、これが南堀旧堀に伴っていた可能性も想定できよう。南堀は、その主軸方位から新堀がA期建物に伴うと考えられる。堀も下館基盤上層面上から掘り込むことから、A期建物に伴う新堀に先行する旧堀や、SA53、西堀箱堀が、1978年度調査の第1期の遺構群に対応する可能性も想定できよう。しかし、SA53の主軸方位はA期建物と一致し、一方南堀旧堀の主軸方位はこれとは一致しないなど、検討すべき点も残る。また館整備前としている江馬氏下館Ⅰ期の堀外地区総柱式掘立柱建物との対応についても検討する必要があろう。今後、史跡整備に伴って堀内地区的調査が続くことから、下館跡の時期変遷については、知見の増加を待って、再検討したい。

なお、整地土層と遺構の構築については、第4章の2でもふれたように、ⅡA期の遺構には、前段階の生活面と考えられる下館基盤土層面上を掘り込んで構築したあと、A・B期遺構面構築土によってその生活面を造成しているものがある。一方、1994年度調査ではA・B期遺構面構築土層面上でA期・B期向時期の建物に伴う溝を確認しており、同じⅡA期の遺構でも、その掘り込み面が異なる遺構があるものと考えられる。また、下館基盤土層面上で、1978年度概報の第1期の遺構とⅡA期の遺構が検出されることになる。今後、堀内地区の調査において、遺構の検出・時期変遷を考える上で、注意すべき点といえよう。

以上が、今回調査の知見であるが、担当者の力不足により、整理・理解しきれていない点も多々あると思われる。堀内地区については、史跡整備に伴って今後も再確認調査を継続する。遺構の変遷の再検討も含めて、今後も調査を継続しながら、下館全体の理解を深め、またその成果を史跡整備に反映していきたい。

## 付章　自然科学的調査の成果

- 1 1998年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡における電磁気調査
- 2 1999年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡における地中レーダ探査
- 3 1997年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡出土カラミの組成分析結果報告



# 1 1998年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡における電磁気調査

富山大学理学部 酒井英男  
 田中地質コンサルタント 田中保士  
 神岡町教育委員会 大平愛子

## 1 はじめに

江馬氏下館跡の1998年度発掘調査は、北堀に伴う土壘等の区画施設の有無、西堀の北端部の確認等を目的として、北堀と西堀の交差した区域において行った。発掘調査に先立ち、土壘等の盛上がりを測定するかどうかを予測し、より有効な発掘調査を行うため、電気探査・地中レーダ探査を実施した。本年度の調査地区内では、1976~78・94年度に、トレンチ調査等を行っており、探査当時、すでにこれまでの発掘調査での埋め戻しが済んでいた部分もあったが、探査応答と遺構の検証から、北堀と平行して存在すると思われる土壘跡と、西堀の延長の存在を推定することができた。本報告では、それら推定結果と、今回の発掘調査によって明らかになった事項とを比較対照していく。

## 2 探査方法と使用機器

### (a) 電気探査

電極間隔 1 m ウエンナー法による比抵抗マッピング

使用機器 ジオスキャンリサーチ社 RM15

探査グリッド 8 m × 24 m = 192 m<sup>2</sup> 測点数768点

### (b) 地中レーダ探査

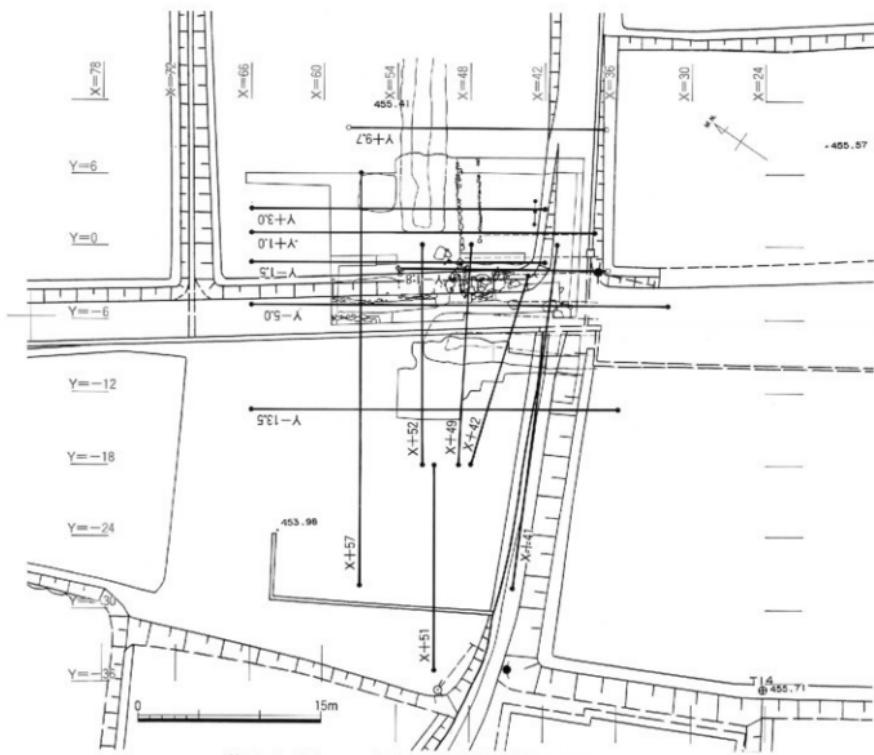
アンテナ周波数 220MHz

使用機器 センサーズアンドソフトウェア社 pulseEKKO 1000

第11表 地中レーダ探査測線一覧表

探査測線	測線長(m)	始点座標		終点座標	
		X	Y	X	Y
Y - 3.0	24.0	42.0	3.0	66.0	3.0
Y + 1.0	24.0	38.0	1.0	66.0	1.0
Y - 1.5	17.0	42.0	- 1.5	66.0	- 1.5
Y - 5.0	34.4	32.0	- 5.0	66.0	- 5.0
Y - 13.5	30.0	36.0	- 13.5	66.0	- 13.5
X + 41	30.0	41.0	0.0	43.0	- 28.0
X + 42	13.4	48.0	- 18.0	43.4	2.5
X - 49	24.3	49.0	- 18.0	48.0	0.0
X - 51	16.1	51.0	- 3.5	51.0	- 18.0
X - 52	18.1	52.0	- 18.0	52.0	0.0
X + 57	32.9	57.0	- 28.0	57.0	6.0

11測線 延べ264.2 m



第32図 地中レーダ探査測線配置図 縮尺1/400  
(実線は探査時の地形。薄刷は発掘調査により検出された遺構概略図。)

### 3 電気探査による比抵抗マッピングの解釈と発掘調査の結果との比較

比抵抗マッピングは、地表面からの深さ約1m深さ1m当たり4点の高密度で測定した。比抵抗の数値は、絵画的イメージによるカラー濃淡で表現した。赤色の濃いものほど高比抵抗で、青色の濃いものほど低比抵抗である。

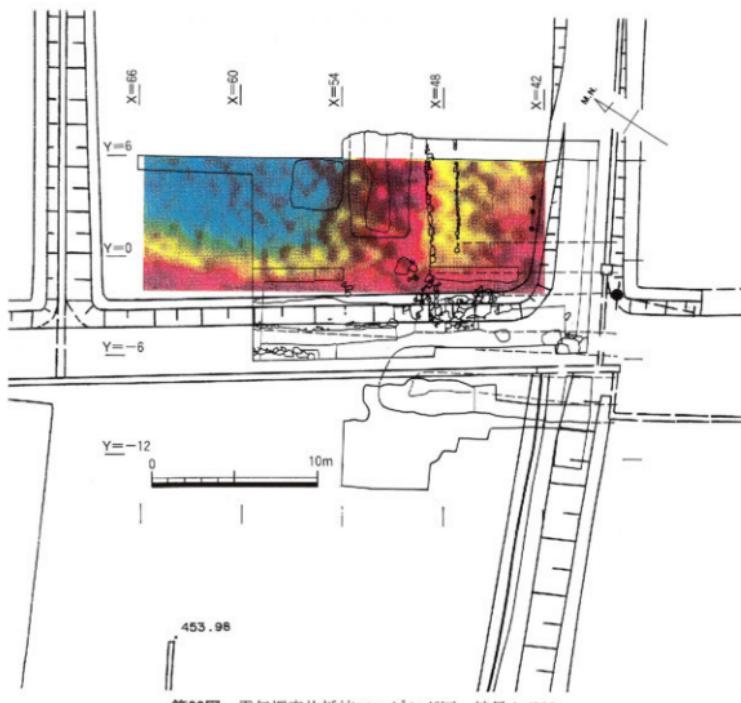
	電気探査による推定 (以前の発掘調査結果との照合)	発掘調査後の結果
北堀を挟んで 北側	低比抵抗領域。水分の多い細粒土であろう。	旧耕作土が厚く分布していた。
北堀	高比抵抗領域。比較的固く乾燥した遺構面であると検証された。以前の発掘時に、乾いた土で埋め戻されたことも影響しているだろう。	過去の調査で地山(※)まで掘っていた。
北堀南	黄色の比抵抗帯。築地塀の基底部の範囲には対応する。	築地塀の基底部の範囲を示していると考えられる。
北堀を挟んで 南側	高比抵抗領域。乾燥した土か、あるいはレキ等を含む人工的に固められた土であろう。	A・B期遺構面構築上層(※*)に対応する。
北西の黄色い 壙状異常	人工的な構造物によるものなのか、田畠の畔による影響なのか疑問が残る。	特に構造物はなかった。田畠の畔による影響と考えたい。
西側縁	高比抵抗領域。	北堀周辺も含め、過去に地山まで調査のために掘削していた。近現代の耕地化の際に、用水路を作る等の搅乱が入った範囲ともほぼ対応。

※) 地山：この一帯の地盤を構成する層。門前地区、南延地区、東側延長部周辺では、この層の上面で柱穴等の遺構を確認している。

※\*) A・B期遺構面構築上層：壙内地区の礫石建物を建てた際の整地土層。

### 4 地中レーダ探査プロファイルの解釈と、発掘調査の結果との比較

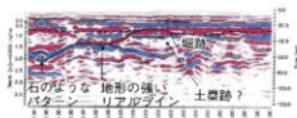
地中レーダ探査とは次のような原理である。地表の送信アンテナから電磁波を放射すると、地下の地層や遺構の境界面で反射して、地表の受信アンテナに到達する。送受信アンテナを移動しながら測定することでプロファイルを表示させ、波形の変化や異常から地下の遺構や地層を推定する、というものである。解釈には94年4月に行ったY+9.7およびY-1.8プロファイルを参考にした。なお、プロファイルYラインは南から北に、Xラインは東から西に向かって表示した。



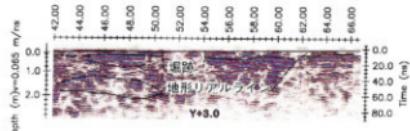
第33図 電気探査比抵抗マッピング図 縮尺 1/300

探査測線	地中レーダ探査の結果および構造の推定	発掘調査後の結果(左欄の下線部に関して)
Y -9.7	pulse EKKO 4, 200MHzのアンテナで測定したプロファイル。分解能が異なるがここにも堀跡と南側の異常が現れた。かなり明瞭な地形リアルラインと、39.5m付近に石のようなパターンが見られた。特に47~50mのリアルラインから、土壠の存在が推定される。	「築地壠が良く保存されている」または「館北西隅部では築地壠だが、東方では土壠であった」という可能性が考えられるが、未調査のため、明らかではない。
Y +3.0	北堀跡の位置では、1994年度調査時に表土部を掘り起こしているため、波形を消したような明瞭なリアルラインの異常が見られた。 堀の両側、深さ1.2m付近にも地形の張を画いたリアルラインが認められた。	地山の地形リアルラインを現していると考える。
Y +1.0	このプロファイルにも北堀跡とその南側に地形リアルラインが見られる。	上層のものがA・B期遺構面に、下層のものが地山に反応していると考える。
Y -1.5	このプロファイルも堀跡とその南に地形リアルラインが見られる。	上層のものがA・B期遺構面に、下層のものが地山に反応していると考える。
Y -1.8 (参考資料)	52mに石等によく見られる強い異常パターンがある。北堀の延長中心線上にあり、北堀跡は存在しないことが報告されているため興味深い。 44m付近の地形リアルラインは、土壠の位置と近いことから関連した遺構を反映しているのかもしれない。	SX38(築地壠の基底部石列を削したもの)に反応したとも考えられる。
Y -5.0	42~47mに水平波形が減衰する部分がある。 土質が変化していると推定され、水分の多い細粒土と考えられる。	何に反応したかは不明。7トレンチ(1976・77年度調査トレンチ)の両辺に接しており、埋土の違いを反映した可能性もある。
Y -13.5	37~42m間にも波形の減衰した部分がある。	1976・77年度調査トレンチ掘め出し土(田の耕作上)に反応した可能性あり。
X +49	-12~-5m間に異常な縦方向の曲線で区切られたパターンを記録した。明確に堀跡とは推定できないが異常部分ではある。	田の畦の部分にあたり、畦土に影響されていると考える。
X +42	-12~-6m間にても同様のパターンが見られた。	-5~-9.5は西堀、-9.5~-12.0は立ち木の根による擾乱であろう。
X +41	-12~-6m間にても同様のパターンが見られた。	コンクリート倒溝による擾乱の可能性あり。 -2.5~-8.5間が西堀による異常と考える。
		地形のリアルラインに続く落ち込み部分が壠に反応しているのか。

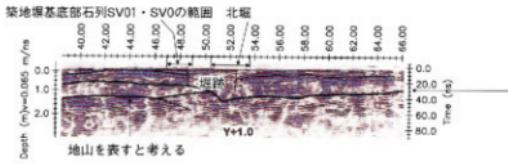
測線Y+9.7



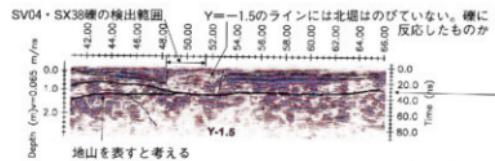
測線Y+3.0



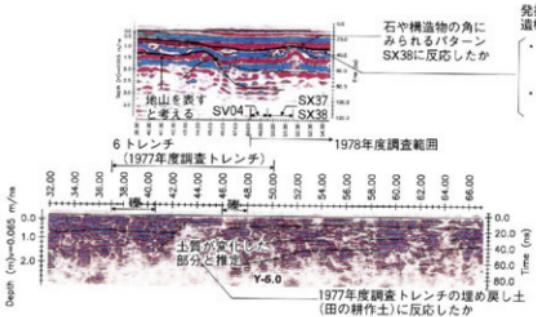
測線Y+1.0



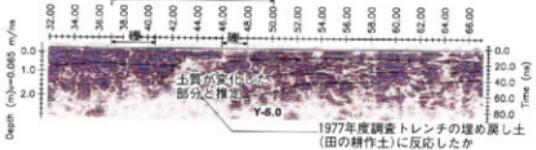
測線Y-1.5



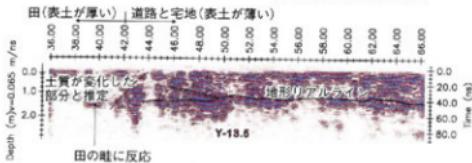
測線Y-1.8



測線Y-5.0

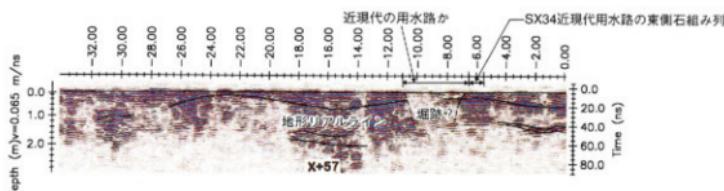


測線Y-13.5

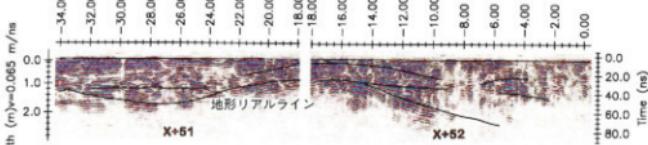


第34図 Y軸における地中レーダ探査の結果

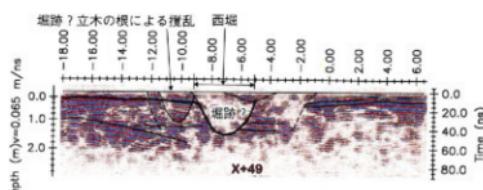
測線X+57



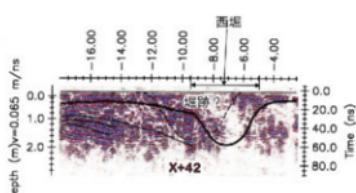
測線X+51.+52



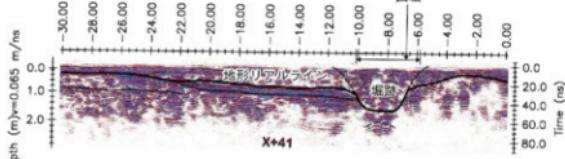
測線X+49



測線X+42



測線X+41



第35図 X軸における地中レーダ探査の結果

## 5 まとめ

今回の探査に応用した電気探査比抵抗マッピングでは、電極間隔1mを用いたため従来よりも明瞭な造構の形状を捕らえることができた。築地塀の基底部や表層部掘削(搅乱)の跡等、発掘の結果ともよく対応しており、調査の際の有効な情報を得る手段となり得るであろう。

地中レーダ探査は、解像度の高い機種に変えて行った。前回のリアルラインやパターンよりは複雑に見えるが、詳細な変化点や異常面の波形を読みとることができた。地中レーダ探査でも地形はよく現れているものと考えられる。

- 緩やかな弧を画く弱いリアルラインを読みとれた。
    - ➡上のラインはA・B期造構面構築上層(築地土層)に、下のラインは地山にはほぼ対応した。このリアルラインは、その地形を表していると考えられる。
  - 北堀に平行する土壠を示唆するようなりアルラインを読みとることはできなかった(前回のY+9.7測線では読みとっていた)。
    - ➡築地塀の残りが良かったのか、又は、北西隅部は築地塀で七墨そのものは無く、東の方だけが土壠だったという可能性がある。
  - X測線では、西堀跡の延長線上に5測線とも異常パターンがみられ、堀跡と推定された。
    - ➡測線X+57は近現代の用水路の可能性、測線X+52は西堀の端にかろうじて接する程度であるが影響を受けた可能性がある。
- なお、今後の探査には、西堀延長線部分の電気探査比抵抗マッピングを行うこと、および200・225MHzの複数のアンテナで測定し比較検討することを提案したい。

## 2 1999年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡における地中レーダ探査

富山大学理学部地球科学科 酒井 英男・中埜 貴元

(株)村尾地研 笹井 隆・新谷 崇

神岡町教育委員会 大平 愛子

### 1 はじめに

電磁気の手法による地下遺構の探査は、種々の手法が試行されている (Clark, 1990)。探査手法を開発し改善するためには、遺構の種類や保存状態と探査の有効性を検討しながら研究を進めることが望まれ、それには発掘結果との比較検討を重視した研究が必要である。本稿では、岐阜県神岡町江馬氏下館跡において神岡町教育委員会による発掘調査の前に行なった地中レーダ探査の結果を報告する。

江馬氏館跡下館跡は、岐阜県古城郡神岡町の神通川水系高原川の中流右岸の段丘上に位置する中世豪族江馬氏の館跡である。この地点は、飛驒と越中を結ぶ越中街道と、越中と信州・鎌倉を結ぶ鎌倉(信州)街道とを結ぶ脇街道である上宝道が通過し、高原川の水運によっても、飛驒と越中・信州方面とを結ぶ交通の要衝であった。「山科家文書」などから江馬氏が支配していたと伝えられ、14世紀末には守門幕府の認める有力在地勢力として活躍した。1976~1978年にかけて神岡町教育委員会による試掘調査が実施され、庭園跡や南・西の堀跡、建物跡などが確認された。1994年からは、歴史公園として復元整備するための発掘調査が行われている。

### 2 探査の目的と概要

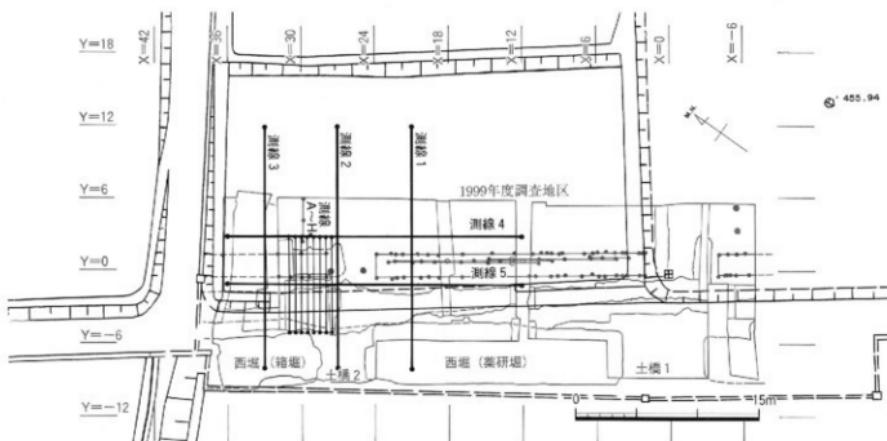
1999年度の調査目的は、館正面出入り口にあたる西側に伴う区画施設と門の遺構の確認であった。地中レーダ探査では、前年度の発掘調査で館跡北西隅で確認された築地塀の基礎がどこまで存在するかを調べ、それが西塀に伴うものかを発掘前に推定することにあった。

探査測線の位置を第36図に示す。同図の測線1~3(測線長20.0m)はそれぞれ平行であり、測線4~5(測線長21.0m)はそれらと直交する。また、測線A~II(測線長8.0m)は測線1~3と平行で、それぞれの間隔は0.5mである。地中レーダ探査装置はpulseEKKO1000型を使用した。測線1~5では、周波数225MHzおよび900MHz、測線A~Hでは900MHzのアンテナを用いて、測点間隔を0.1mとして探査を行った。また、電磁波の伝播速度の推定法であるCMP探査を行った結果、レーダ波の伝播速度は約0.08m/nsと求められたため、この値を探査結果の深度解析に使用した。

### 3 探査結果と発掘結果の比較

測線1~5の探査結果を第37・38図に載せているが、目的としていた築地塀の基礎の高まりは検出されていなかった。発掘調査の結果、築地塀の基礎部分は近世の耕作化の際に削平されており、地中レーダで反応が認められなかったのは妥当な結果と言える。

しかし測線A~IIにおいて、発掘結果と比較検討したところ、探査結果は、館造成時の基盤層である「下館基盤上層」を捉えていることがわかった。第39図は、発掘調査地区の概略と測線配置図、および、発掘調査の断面図を示し、第40図に探査結果を載せている。同図の測線A~IIの探査結果において、縦軸は深さ(反射時間)を、横軸は水平距離(始点が0m)を表示している。断面図のY=3



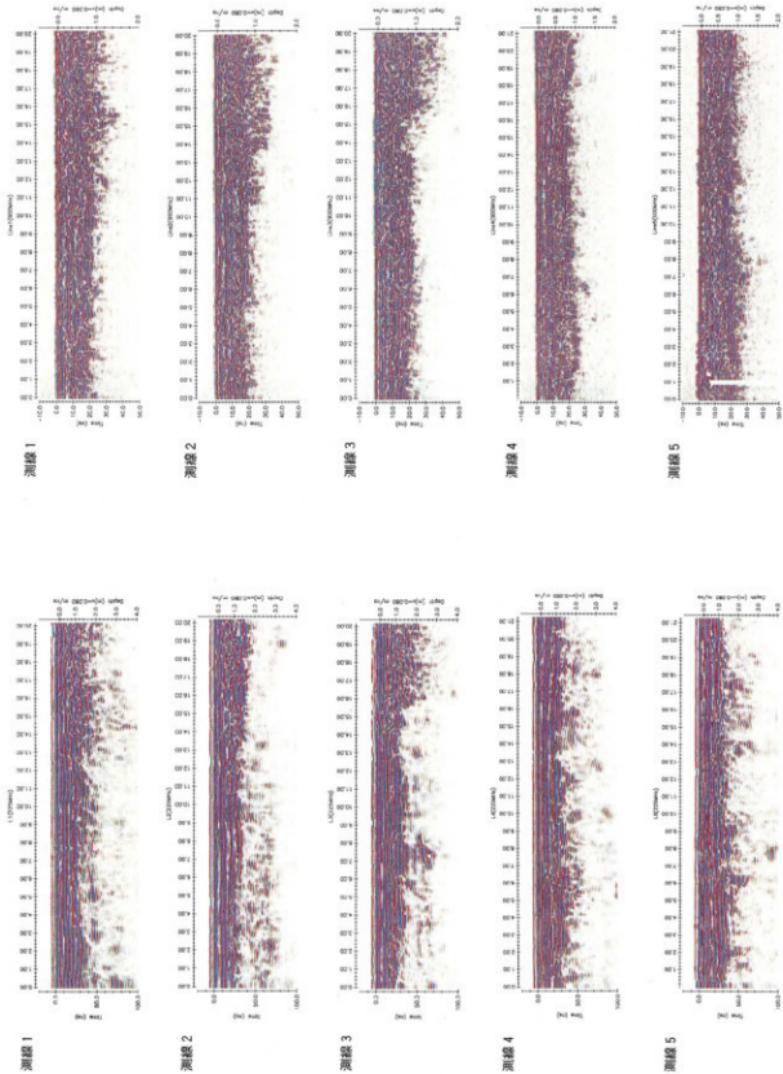
第36図 採査測線配置図 比尺 1/400  
(実線は採査時の地形。薄刷は発掘調査により検出された遺構概略図。)

地点が探査結果の始点(水平距離 0 m 地点)に、断面図の  $Y = -5$  地点が探査結果の終点(水平距離 8 m 地点)に対応する。断面図との比較から、探査結果の反応の下縁(図中の実線)が「下館基盤土層」の上面に良く対応していることがわかる。測線 A～E では、始点から 1.9～3.3 m 間で、探査結果の反応の下限ラインが窪んでいる。この範囲は、築地堀基礎地業の平面検出範囲に対応しており、この窪みが築地堀基礎地業による掘り込みの形を示しているものと考えられる。測線 F～H では、このような窪みは観察できないが、これは基礎地業の掘り込みが浅いことを示しているのではないかと推定したい。

第41図では、測線 A～Hにおいて、探査結果の反応から柱穴の存在が示唆される位置を発掘調査図上にマークした。当初、これらのマーク地点と、断面図における「柵列の布掘り溝 SD21」との対応に着目したが、実際には、溝 SD21 とは対応せず、むしろ、これらのマーク地点と、「柱穴 SP190・191・195」とが対応することがわかった。測線 C 上には柱穴 SP195 が存在し、測線 G は SP191 柱穴、測線 H は SP190 柱穴と対応付けられる。いずれの柱穴も現地表面から -120 cm であり、同深度は探査結果とも一致する。

測線 B と D にも、上述の測線と同様な柱穴を示唆する反応がある。発掘調査で掘り下げを行っていない地域であるが、同地点の深部に柱穴が存在する可能性がある。一方、測線 C 上には SP145 が、測線 G 上には SP192・193 が位置するが、これらはレーダ探査では捉えられていない。また、測線 A, E, F 上には穴を示唆する反応は無い。

溝 SD21 が探査で上手くとらえられなかった理由としては、溝 SD21 の東側の肩部(掘り込みの上部)が築地堀基礎地業部の埋土を掘り込んでおり、SD21 埋土と築地堀基礎地業部埋土では土質の差が顕著ではないこと、溝 SD21 の深さが 10～15 cm と浅いうえに、その溝内に「下館基盤土層」を掘り込む深い柱穴 SP191・SP195(深さ約 60 cm)が重複していたため、これらの柱穴に強く反応し、浅い溝に対する反応が読みとりにくくなつたものと考えられる。SP145・192・193 も、築地堀基礎地業埋土を掘り込む柱穴であり、柱穴埋土と基礎地業部埋土との土質の差が顕著ではなく、これらの柱穴の掘り



第37図 測線1～5の225MHzアンテナでの探査結果

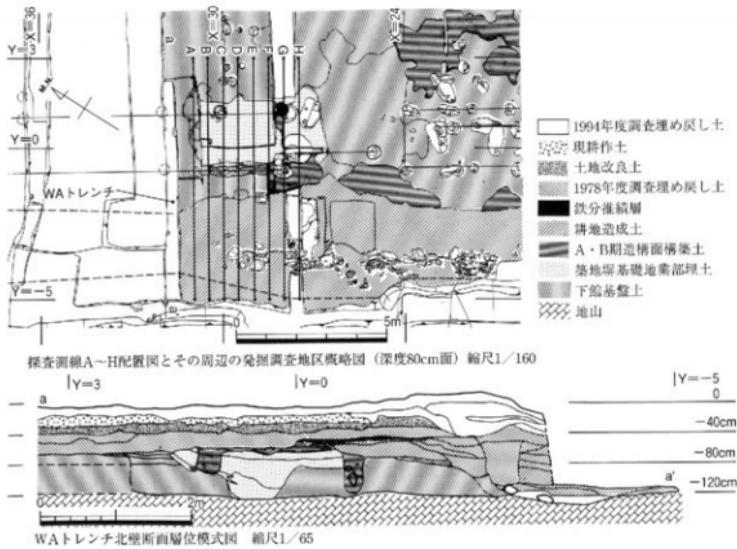
第38図 測線1～5の900MHzアンテナでの探査結果

込みが「下館基盤土層」まで達していなかったため、反応が読みとれなかつたものと考えられる。

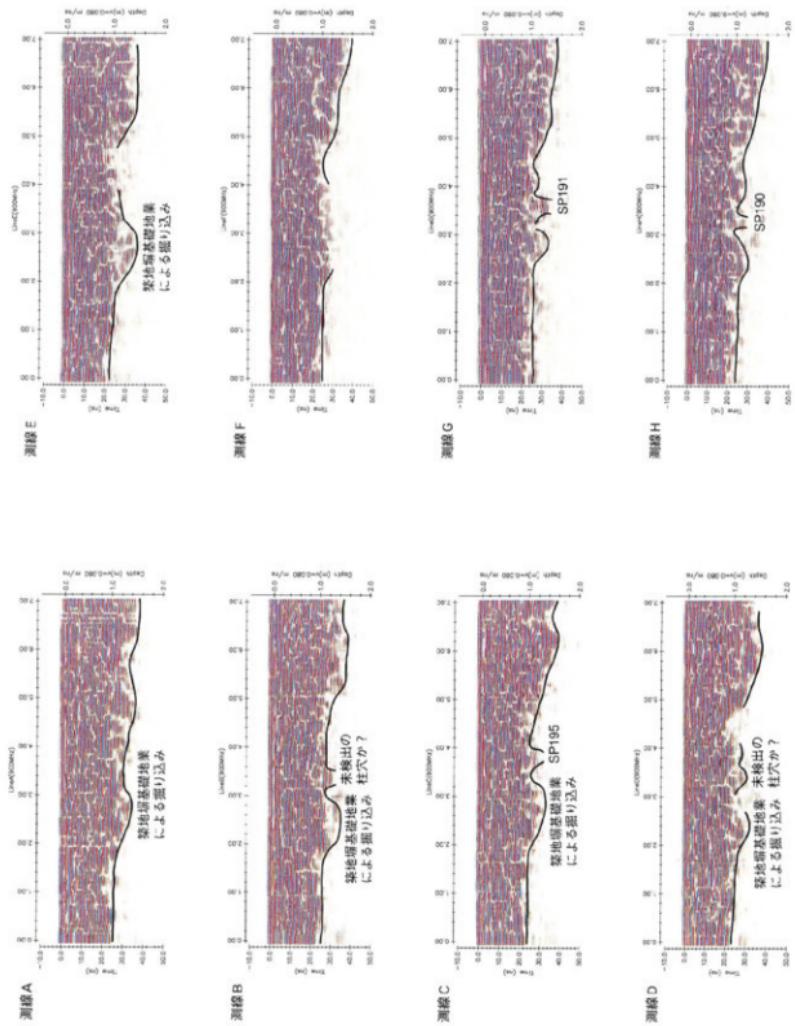
#### 4 まとめ

当初の探査対象であった築地壠の基礎部分は削平されており、探査との対比はできなかつた。しかし、発掘結果との検討から、地中レーダ探査は館造成時の基盤層である「下館基盤土層」を明確に捉えていたことが明らかになつた。

また、今回の地中レーダ探査において、周波数900MHzのアンテナを用いたところ、柱穴を明確に捉えていることが判明した。従来より分解能が高い探査であったため、平面形が直径30cm前後の円形の柱穴のような規模が小さな遺構も良く捉えたものと考える。さらに高周波数の1200MHzアンテナを利用すれば、今回は反応が微妙だったSD21のような現地表面からの検出深度60cm前後、深さ10~20cmの遺構の握り込み部も捉えられるものと考える。



第39図 探査測線A~H配置図とその周辺の発掘調査地区概略図及びWAトレンチ北壁断面層位模式図



第40図 測線A～Hの900MHzアンテナでの検査結果  
図中の実線が「下筋基盤土層」の上面に対応している  
(水平距離3.0mが第39図の断面図中のY = 0に対応)



第41図 採査結果から推定される柱穴位置と発掘調査結果との対応 縮尺 1/100

加えて、今後の採査のために、「下館基盤土層」を構成する土壤と直上層の構成土壤を発掘現場で採取し、比誘電率を実験室で測定した。予察的な結果では、両層の比誘電率は有意に異なっており、誘電率データから採査結果は良く解釈できた。

これまで、遺跡において、高周波数による採査を行った例は無かったが、今回の調査によって、小型の遺構を確認する手段となる可能性が示せたことは大きな成果と考える。地中レーダ探査が、堀跡のような大型の遺構の把握に有用であることは、これまでの採査成果で明らかになっているが、高周波数のレーダ探査も併用することで、掘削前にさらに多くの地中遺構の情報を得ることが出来ると言える。さらにつきその際、簡易掘削で土壤試料を採取して比誘電率の測定を併用することにより、より詳細な非破壊での地下採査の新たな手段となると考えられる。

#### 参考文献

- Clark A. (1990): Seeing beneath the soil — prospecting methods in archaeology —, B. T. Blatsford Ltd, London, pp176.

### 3 1997年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡出土カラミの組成分析結果報告

神岡鉱業株式会社 保安環境課 分析係 松倉 大作

#### 1 緒 言

神岡町教育委員会の依頼により、神岡町大字殿に所在する江馬氏下館跡1997年度発掘調査において出土したカラミ状物質3種類について、X線回折法による組成解析ならびに蛍光X線分析法による含有物質の定性分析、高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法による主要含有物質及び貴金属の定量分析を行い、組成推定を行った。

その結果、カラミ状物質3種類とも、組成比率の差異はあれど鉄系及びケイ素系酸化物のカラミと推定され、かつ金、銀の貴金属はほとんど含有していないことが判明した。

#### 2 分析試料

分析を行ったカラミ状物質は、以下の3点である。

- 1) 試料 No.751: 比較的表面酸化が少なく、かつ密度の高いカラミ状物質  
発掘調査遺物番号No.751、柱穴SP680出土
- 2) 試料 No.752: 3種の中ではもっとも密度が低く、泡状かつガラス様溶融物  
発掘調査遺物番号No.752、柱穴SP424出土
- 3) 試料 No.754: 表面及び内部的にも酸化の進行がみられるカラミ状物質  
発掘調査遺物番号No.754、柱穴SP491出土

#### 3 試料調整方法

各資料の1/3～1/2をハンマーにて約10mm以下の塊状に欠き取った後、超鋼性振動ミルにて約0.15mm以下になるまで粉碎した。各粉碎試料を105℃で8時間以上乾燥したものを以下の解析及び分析用試料とした。

#### 4 解析ならびに分析方法

##### (a) X線回折法（以下、XRD法と記す）

結晶性の固体粉末に固有X線を照射すると、その散乱によって各結晶固体に固有のX線回折图形（回折強度と回折角の関係）が得られる。このX線回折图形から試料の同定や結晶構造の解析を行う方法。ただし、一般的に同定に関しては感度が鈍く、数%～数十%以上含有されていなければ検出されないこともある。特に鉄系化合物に関してはBackground noise散乱が大きく、正確な同定は難しい。更に非品質化合物は同定出来ない。

今回の測定条件： X線管球：Cu(1.54060Å) 40KV 30mA

測定範囲(2θ)：10.000～80.000度 Step幅：0.020度

計数時間：0.6秒

##### (b) 蛍光X線分析法（以下、XRF法と記す）

固体試料に連続X線を照射し、そこから発生する2次X線（蛍光X線）を測定。2次X線は元素毎

に固有の波長を有し、その波長位置より含有元素の定性を、X線強度より定量を行う方法。指定された元素の合計X線強度より半定量を、もしくは酸化物換算による半定量も可能。一般的に含有量1%未満は検出感度が悪く、且つ原子番号の小さい軽元素は原子番号の大きい重元素よりX線強度が弱いため検出能力に劣り、含有量としては低く定量される恐れがある。

今回の測定条件： X線管球：RhK $\alpha$  (0.6147 Å), K $\beta$  (0.5456 Å) 50KV 50mA

スキャンスピード：

半定量条件：ファンダメンタルバラメーター(FP)法

(c) 高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法（以下、ICP-AES法と記す）

試料を酸にて溶解後、溶液試料を高温のアルゴンプラズマ中へ噴霧すると発光する。各元素固有の発光強度を測定することで試料溶液中の金属元素含有量を定量する方法。希釈倍率にもよるが、一般的に数十%から数ppmオーダーまでの他元素同時定量が可能。

今回の測定条件： マルチタイプICP-AES

(Al, Fe, Na, K, Caのみ定量)

(d) Siの定量方法

本来であれば、試料中の酸可溶性成分を溶解し、残った不溶解四形分(A)中のSiをフッ酸溶解して残る残渣分(B:カーボン等)を差し引き(A-B)して定量する。しかし過去の経験からも氷晶石及びカリミ状物質中のフッ酸溶解残分は1%未満と少ない。かつ今回の試料はオーダー的に0.5~1%以下のバラツキ・偏差は許容できると考えた。従って今回のSiの定量は簡便的に酸不溶解四形分を求めることとした。場合によっては新値より1%前高い定量となっている恐れがある。

## 5 XRD法による解析結果

第42図に各資料のXRDチャート及び固定結果を示す。試料No.751とNo.754はBackground noise及び検出ピークのレベルからもほぼ同様のFeO系組成物と推定できる。しかし検出ピーク強度比から、両者は全くの同一組成含有物とは言えない。基準カードデータとの整合検索結果より、試料No.751はFeO主成分の他 $Fe_2SiO_4$ 、試料No.754はFeO成分の他 $FeFe_2O_4(Fe_3O_4)$ 及び $Fe_2SiO_4$ が多量含有されていると考えられる。

一方、試料No.752は鉄に起因するBackground noiseも比較的低く、明瞭な $SiO_2$ ピークが検出された。他には若干ながらFeO及び $Fe_2SiO_4$ も認められた。

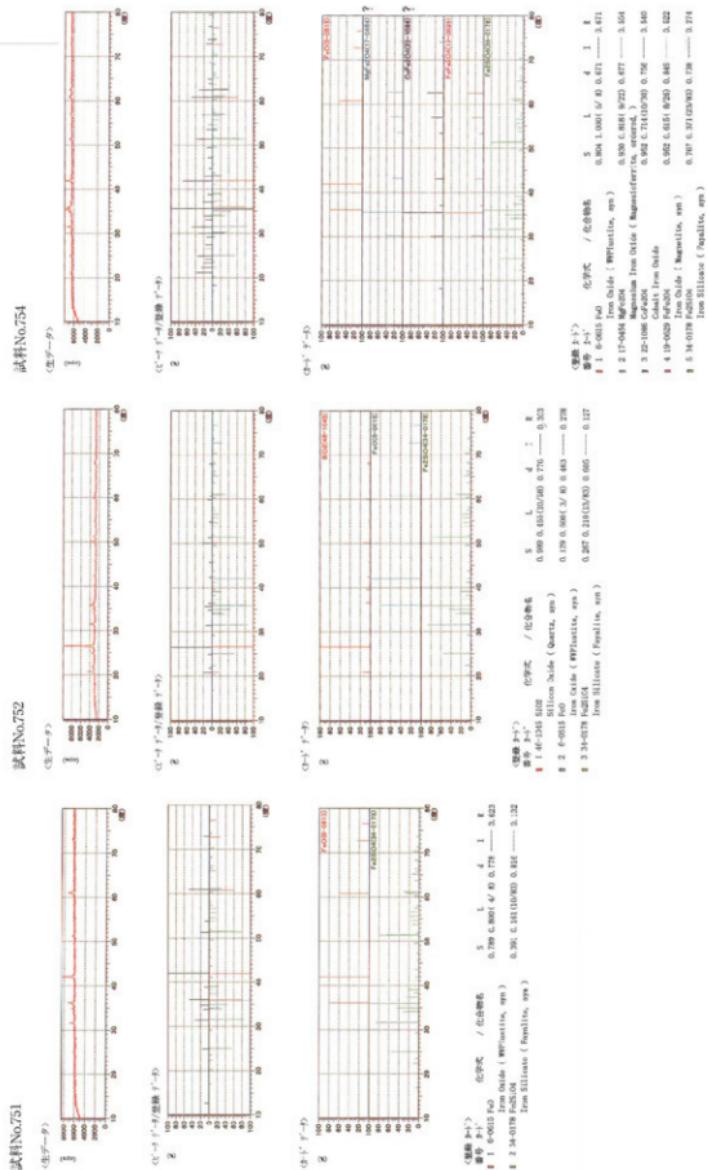
3試料とも純鉄(Fe)のピークは検出されなかった。以上の同定結果をまとめると第12表のとおりになる。

## 6 XRF法による解析結果

第13表に各試料のXRF法での測定スペクトル強度、第14表に各試料の酸化学換算XRF法での半定量結果を示す。あらかじめ、全スペクトル位置による定性を実施し、その結果検出された成分についてのみファンダメンタルバラメーター法にて半定量を実施した。

試料No.751はFeが主成分の他Si, Al, Ca, K, Znの存在が確認された。試料No.752もほぼ同等の内容であったがSi, Alについては試料No.751より1~2%程度高いように観察される。試料No.752は他の試料と違いSiが主成分で次いでFe、この2元素より低含有量であるがAl, K, Caの順に存在している事が確認された。

3試料ともZn, Pb, Cu等重金属類は1~2%未満と推定される。



第42図 試料No.751・No.752・No.754のXRDチャート及び同定結果

第12表 XRD 同定結果

	No.751	No.752	No.754
FeO	◎	△	○
Fe <sub>2</sub> SiO <sub>5</sub>	○	△	○
SiO <sub>2</sub>	△	◎	△
FeFe <sub>2</sub> O <sub>4</sub>	?	?	○

注: ◎—主成分(相対的にみて50%以上)

○—主成分に次いで多く含有(相対的にみて数10%程度)

△—○ほどではないが存在の可能性あり

?—不明

第13表 XRF 法での半定量結果

	No.751		No.752			No.754			
	I(kcps)	I/ΣI	Io/ΣIo	I(kcps)	I/ΣI	Io/ΣIo	I(kcps)	I/ΣI	Io/ΣIo
Na	0.2	<1%	Tr	0.6	1%	1%	<0.1	Tr	Tr
Mg	0.2	<1%	Tr	0.6	<1%	Tr	0.3	<1%	Tr
Al	9.9	3%	3%	38.6	11%	10%	15.3	4%	4%
Si	29.2	8%	10%	145.7	42%	47%	30.2	8%	10%
P	4.2	1%	<1%	1.7	<1%	Tr	4.3	1%	<1%
S	3.0	1%	<1%	0.9	<1%	Tr	2.9	1%	<1%
Cl	<0.1	Tr	Tr	<0.1	Tr	Tr	1.2	<1%	Tr
K	7.8	2%	<1%	28.3	8%	4%	7.0	2%	<1%
Ca	8.2	2%	<1%	16.7	5%	2%	8.8	2%	<1%
Ti	<0.1	Tr	Tr	0.6	<1%	Tr	0.7	<1%	Tr
Cr	0.2	<1%	Tr	0.3	<1%	Tr	0.3	<1%	Tr
Mn	1.1	<1%	Tr	1.7	<1%	Tr	1.2	<1%	Tr
Fe	295.9	80%	84%	106.0	31%	33%	290.1	80%	82%
Cu	0.1	Tr	Tr	<0.1	Tr	Tr	<0.1	Tr	Tr
Zn	7.7	2%	<1%	4.0	1%	<1%	2.2	1%	<1%
Pb	0.4	<1%	Tr	<0.1	Tr	Tr	<0.1	Tr	Tr
Total	368.1	99%	97%	345.7	99.1%	97%	364.5	99.0%	96%

注: 「I」各元素スペクトル強度(Kcps; Kiro-count per second)

「I/ΣI」検出された全スペクトル強度に対する各元素スペクトル強度比(各元素存在比率;%)

「Io/ΣIo」酸化物換算における各元素存在比率(%)

但し、「I」にて0.1Kcps未満の元素は「I/ΣI」にてTr(トレース), 「I/ΣI」にて1%未満は「Io/ΣIo」にてTr(トレース)とした。

第14表 各試料の酸化学換算XRF法での半定量結果

試料No.751		試料モデル=酸化物			
成 分	定 義	元素コード	スペクトル	強度kcps	含有率WT%
Na <sub>2</sub> O		Na00	Na-KA	0.223	0.580
MgO		Mg00	Mg-KA	0.191	0.220
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		Al00	Al-KA	9.919	2.900
SiO <sub>2</sub>		Si00	Si-KA	29.193	9.500
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>		P00	P-KA	4.181	0.440
SO <sub>3</sub>		S00	S-KA	3.033	0.400
CL		Cl00	Cl-KA	0.019	Trace
K <sub>2</sub> O		K00	K-KA	7.794	0.800
CAO		Ca00	Ca-KA	8.179	0.570
TiO <sub>2</sub>		Hv00	Ti-KB1	0.073	0.099
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		Hv00	Cr-KA	0.238	0.015
MnO		Hv00	Mn-KA	1.140	0.058
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		Hv00	Fe-KB1	295.940	84.000
CUO		Hv00	Cu-KB1	0.104	0.034
ZNO		Hv00	Zn-KA	7.657	0.300
SRO		Hv00	Sr-KA	0.652	Trace
PBO		Hv00	Pb-LA	0.388	0.020

試料No.752		試料モデル=酸化物			
成 分	定 義	元素コード	スペクトル	強度kcps	含有率WT%
Na <sub>2</sub> O		Na00	Na-KA	0.555	1.300
MgO		Mg00	Mg-KA	0.577	0.590
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		Al00	Al-KA	38.627	10.000
SiO <sub>2</sub>		Si00	Si-KA	145.690	47.000
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>		P00	P-KA	1.699	0.240
SO <sub>3</sub>		S00	S-KA	0.912	0.160
K <sub>2</sub> O		K00	K-KA	28.281	4.300
CAO		Ca00	Ca-KA	16.673	1.900
TiO <sub>2</sub>		Hv00	Ti-KA	0.653	0.240
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		Hv00	Cr-KA	0.261	0.027
MnO		Hv00	Mn-KA	1.673	0.110
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		Hv00	Fe-KB1	105.980	33.000
ZNO		Hv00	Zn-KA	3.978	0.110
Rb <sub>2</sub> O		Hv00	Rb-KA	2.000	0.017
SRO		Hv00	Sr-KA	6.210	0.049
ZRO <sub>2</sub>		Hv00	Zr-KA	4.330	0.028
BAO		Hv00	Ba-LA	0.143	0.120

試料No.754		試料モデル=酸化物			
成 分	定 義	元素コード	スペクトル	強度kcps	含有率WT%
Na <sub>2</sub> O		Na00	Na-KA	0.091	0.240
MgO		Mg00	Mg-KA	0.308	0.350
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		Al00	Al-KA	15.339	4.400
SiO <sub>2</sub>		Si00	Si-KA	30.228	9.900
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>		P00	P-KA	4.353	0.460
SO <sub>3</sub>		S00	S-KA	2.893	0.380
CL		Cl00	Cl-KA	1.211	0.320
K <sub>2</sub> O		K00	K-KA	6.987	0.730
CAO		Ca00	Ca-KA	8.859	0.630
TiO <sub>2</sub>		Hv00	Ti-KA	0.709	0.160
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		Hv00	Cr-KA	0.260	0.017
MnO		Hv00	Mn-KA	1.249	0.064
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		Hv00	Fe-KB1	290.140	82.000
ZNO		Hv00	Zn-KA	2.167	0.085
SRO		Hv00	Sr-KA	0.873	0.010
ZRO <sub>2</sub>		Hv00	Zr-KA	0.913	Trace

## 7 ICP-AES 法による主成分分析及び乾式試金法による金、銀の分析結果

XRD 法及び XRF 法による解析結果より、各試料の主成分と考えられる元素を ICP-AES 法にて定量した。併せて金、銀の貴金属定量も実施した。結果を第15表に示す。尚、試料No.751及び754の Na, K, Ca は XRF 半定量の結果から 1%未満と推定されたため、ICP-AES 定量は行わなかった。

第15表 主成分及び貴金属分析結果

	No.751	No.752	No.754
Al %	0.95	2.09	2.00
Si %	4.84	31.10	6.16
Fe %	65.90	18.50	57.40
Na %		0.48	—
K %	—	1.38	—
Ca %	—	1.09	—
Au ppm	<5	<5	<5
Ag ppm	<5	<5	<5

## 8 組成推定

以上の XRD 解析、XRF 解析及び ICP-AES での主要成分の定量結果から、組成推定を行った。方法としては、XRD 解析結果の主要化合物の比率を ICP-AES での主成分定量値に対してもっとも近くなるよう Try and Error にて決定した。組成推定結果を第16表に示す。

第16表 各カラミの組成推定結果

	No.751	No.752	No.754
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	2%	3%	3%
SiO <sub>2</sub>	1~2%	62%	6%
Na <sub>2</sub> O	<1%	1%	<1%
K <sub>2</sub> O	<1%	2%	<1%
CaO	<1%	2%	<1%
FeO	64%	13%	26%
Fe <sub>2</sub> SiO <sub>4</sub>	32%	15%	35%
FeFe <sub>2</sub> O <sub>4</sub>	<1%	<1%	28%
他	1~2%	1~2%	1~2%
Total	98~102%	99~100%	99~100%

## 9 結 論

以上のように、カラミ状物質3試料について、XRD法での組成解析、XRF法での半定量及びICP-AES法での主要成分定量を行った結果に基づいて、組成推定を実施した。

その結果、試料No.751は比較的表面酸化が少なくかつ高密度のカラミであり、FeOを約64%程度、 $\text{Fe}_2\text{SiO}_4$ を約32%程度含むFe-Si系カラミであると推定できた。試料No.752は低密度・泡沫状のガラス様溶融物であり、組成的には $\text{SiO}_2$ を約62%程度含むほか、FeOを13%程度、 $\text{Fe}_2\text{SiO}_4$ を15%程度含むシリケートカラミであると推定できた。試料No.754は比較的No.751に近い組成を示し、Fe-Si系カラミと考えられるが、試料No.751よりも酸化状態の進行した $\text{Fe}_3\text{O}_4$ を約29%程度含むカラミと推定できた。

本来であれば、鉱物的見地からの解析と、更に掘り下げる鉄鋼冶金学的な見地からの解析を付加すればより詳細な解析が可能であったかもしれないが、解析者の能力不足及び限られた時間と解析必要性に鑑み、化学的なアプローチにとどまった事は深謝に耐えない。

## 参考文献（五十音順）

- 青森県市浦村教育委員会 1996 「「二瀬遺跡」市浦村第1次・第2次 発掘調査概報一」
- 綱野吉彦・石井 進編 1992 「中世都市と商人職人」帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集
- 市村高男 1992 「戦国期東国の城郭と城下町の実態」『北の中世 史跡整備と歴史研究』日本エディタースクール出版部
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2, 日本貿易陶磁研究会
- 宇野隆夫 1992 「食器引当の方法と意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集, 国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1994 「考古学からみた日本生産流通史-2000年余の歴史を二分する転換点についてー」『日本史研究』第380号, 日本史研究会
- 宇野隆夫 1994 「日本海における中世の生産と流通」『中世都市十三波と安羅氏』国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1996 「木製食器と土製食器-弥生変革と中世変革ー」『古代の木製食器-弥生期から平安期にかけての木製食器ー』発表要旨, 墓藏文化財研究会・第39回墓藏文化財研究集会実行委員会
- 大山町 1964 「大山町史」
- 岡村利平 1912 「飛騨山川。住伊書店」
- 小野正敏 1984 「第4回貿易陶磁研究会、その成果と課題」『貿易陶磁研究』No. 4, 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1984 「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』No. 4, 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985 「出土陶磁よりみた15、16世紀における画期的変遷」『MUSEUM』No. 416, 東京国立博物館
- 小野正敏 1991 「城領出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 小野正敏 1991 「中世陶磁研究の視点と方法」『考古学と中世史研究』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集
- 小野正敏 1994 「戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識」『信濃』531号, 信濃史研究会
- 金子折男・前川 著編 1994 「守護所から戦国城下へ-地方政治都市論の試みー」1993年度日本考古学協会シンポジウム報告集
- 鎌倉考古学研究所 1994 「中世都市鎌倉を掘る」日本エディタースクール出版部
- 神岡町 1972 「神岡町史」史料編 上巻(中世・近世・近代)
- 神岡町 1982 「神岡町史」特纂編(飛騨国野史・国説集成)
- 神岡町教育委員会 1979 「江馬氏城館跡発掘調査概報」
- 神岡町教育委員会 1981 「江馬氏城館跡保存管理計画策定報告書」
- 神岡町教育委員会 1994 「ふるさと「神岡」探検マップ」
- 神岡町教育委員会 1995 「飛驒の神岡」
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995 「江馬氏城館跡一下館跡発掘調査報告書Iー」
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1996 「江馬氏城館跡II一下館跡門前地区と庭園の調査ー」
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1997 「江馬氏城館跡III一下館跡南辺地区の調査ー」
- 神岡町教育委員会 1998 「江馬氏城館跡IV一下館跡南堀延長部周辺の調査ー」
- 神岡町役場 総務課 1992 「神岡町勢要観」資料編
- 木下 寛運 1984 「中世の地鎮・境鎮」『古代研究』28・29, 元興寺文化財研究所
- 岐阜県 1968 「岐阜県史」通史編 近世上
- 岐阜県 1969 「岐阜県史」通史編 中世
- 岐阜県 1969 「岐阜県史」史料編 古代・中世1
- 岐阜県 1973 「岐阜県史」史料編 古代・中世4
- 岐阜県郡上郡大和村教育委員会 1984 「東氏館跡発掘調査報告書」
- 岐阜市教育委員会 1990 「城之内遺跡」
- 葛谷鶴彦 1970 「中世江馬氏の研究」神岡町
- 葛谷鶴彦 1972 「越中街道」「飛驒の街道」飛驒運輸株式会社
- 国立歴史民俗博物館 1993 「日本出土の貿易陶磁」
- 国立歴史民俗博物館 1994 「中世都市十三波と安藤氏」
- 小島道裕 1984 「戦国期城下町の構造」『日本史研究』第257号, 日本史研究会
- 小島道裕 1990 「平地城館跡と寺院・村落-近江の事例からー」『中世城郭研究論集』新人物往来社
- 小島道裕 1996 「江馬氏下館と江馬氏-文獻史料による考察ー」『江馬氏城館跡II一下館跡門前地区と庭園の調査ー』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室

- 小林 幹 1972 「信州街道」『飛驒の街道』飛驒運輸株式会社
- 酒井重洋 1990 「越中における在地窯の諸問題」『中世北陸の在地窯－生産と流通の諸問題－』北陸中世土器研究会
- 坂井秀弥 1991 「絵圖にみる城館と町」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 崎谷和彦 1992 「“地鎮め”的諸相」『関西近世考古学研究』Ⅲ
- 千田喜博 1994 「古城探検隊」『歴史読本』第39巻、新人物往来社
- 千田喜博 1995 「江馬氏の山城」『江馬氏城跡跡下館跡発掘調査報告書』一。神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
- 多賀秋五郎 1941 「第5編 第2章 社会経済」『飛驒史の研究』下巻、濃飛文化研究会
- 高槻市教育委員会 1978 「嶺上郡跡跡(38-M-N地区)」『高槻市文化財年報』昭和51・52年
- 高槻市教育委員会 1981 「鳥上郡跡跡地間道遺跡発掘調査概要」
- 高橋與右衛門 1992 「発掘された中世の建物跡」『北の中世 史跡整備と歴史研究』日本エディタースクール出版部
- 中世土器研究会 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」
- 中世都市研究会 1994 「都市空間」中世都市研究1
- 中井都市研究会 1995 「古代から中世へ」中世都市研究2
- 中世都市研究会 1996 「津・泊・宿」中世都市研究3
- 東海埋蔵文化財研究会 1989 「清須・織田城跡の城と都市」研究報告編
- 富山県井口村教育委員会 1990 「井口城跡発掘調査概要」
- 中井 均 1987 「中世城館の発生と展開」『物質文化』48、物質文化研究会
- 中井 均 1990 「飛騨系城郭の画期」『中世城郭研究論集』新人物往来社
- 中井 均 1991 「「中世の居館・寺そして村落－西国を中心として－」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 中条町教育委員会 1993-1997 「江上館跡」I-V
- 長野県中野市教育委員会 1993 「高梨氏城跡発掘調査報告書」
- 丹生川村教育委員会 1993 「毛利氏城跡発掘調査報告書」
- 横口定志 1987 「中世居館の再検討」『東京考古』5、東京考古学講話会
- 横口定志 1991 「中世居館研究の現状と問題点」『争点日本の歴史』4、新人物往来社
- 便村正文 1972 「總論」「飛驒の街道」飛驒運輸株式会社
- 便村正文 1972 「平湯街道」『飛驒の街道』飛驒運輸株式会社
- 福井県教育委員会 1979 「飛騨谷倉氏遺跡発掘調査報告」1
- 福井県教育委員会 1990 「飛騨谷倉氏遺跡発掘調査報告」2
- 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館 1983 「飛騨谷倉氏遺跡県道隣江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書」
- 藤澤良祐 1986 「瀬戸大空発掘調査報告」『研究紀要』V、瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1991 「城館出土の瀬戸・美濃大輪盤型」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群II-古窯戸後期様式の編年-」『研究紀要』X、瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1995 「瀬戸古窯址群III-古窯戸前期様式の編年-」『研究紀要』第3輯、瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1997 「中世瀬戸窯の動向」『研究紀要』第5輯、瀬戸市埋蔵文化財センター
- 北陸中世土器研究会 1991 「城館遺跡出土の土器・陶磁器」
- 北陸中世土器研究会 1993 「中世北陸の家・屋敷・暮らしそぶり」
- 埋蔵文化財研究会・大阪市文化財協会 1990 「中世末から近世のまち・むらと都市」第1分冊 発表要旨編
- 水野和雄 1984 「中世城郭都市－飛騨における地鎮の諸例」『古代研究』28・29、元興寺文化財研究所
- 水野正好 1984 「近世の地鎮・鎮度」『古代研究』28・29、元興寺文化財研究所
- 村瀬一郎 1979 「岐阜県・概況」『日本城郭大系』9、新人物往来社
- 森田 勉 1982 「14-16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会
- 湯本軍一 1991 「信濃高梨氏城下の骨董復元」『中世の村落と現代』吉川弘文館
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館
- 吉岡康鶴 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
- 吉岡泰英 1983 「朝倉館の建築的考察」『朝倉氏遺跡資料館紀要』福井県立朝倉氏遺跡資料館
- 脇田晴子 1981 「日本中世都市論」東京大学出版社



## 別 表

## 凡　　例

### 〈遺構の計測表〉

No. : 報告書での通し番号。遺構の種類毎に、1997年度報告書からの通し番号とする。柱穴のみは1から数えている。

主軸方位：座標の正値象限(北東方向の第1象限・北西方向の第2象限・南東方向の第4象限)における「遺構主軸の座標軸方向(X・Y)－角度(°)－傾きの振れの方向」を示す。

遺構主軸の座標軸方向：「X」…遺構の主軸方向が南北方向(調査座標網のX軸)

「Y」…遺構の主軸方向が東西方向(調査座標網のY軸)

傾きの振れの方向：主軸方向がX(南北方向)…その正値部分においてY軸の正値方向(東)に振る場合「E」、負値方向(西)に振る場合「W」。

主軸方位がY(東西方向)…その正値部分においてX軸の正値方向(北)に振る場合は「N」、負値方向(南)に振る場合は「S」。

### 〈柱穴計測表〉

No. : 調査時・報告書での通し番号。

平　面　形：円形、梢円形、方形、不整形の形に分類した。

デ　タ：〔長径〕〔短径〕〔深さ〕〔底面レベル〕の値。

断　面　形：第17表の分類表に依拠して表示した。

出土遺物：●国産土器、■國產陶器、○中國陶磁器、▲鉄製品、□その他、で表した。

備　考：遺構の切り合い関係は>、<の記号で表した。切り合い不明は、遺構≠遺構と表した。

調　査：×は1976～1978年度調査時において完掘していた遺構を表わす。

「完」「半」は、今回調査において、それぞれ完掘・半裁にとどめたことを示す。

### 〈遺物計測表〉

No. : 報告書での通し番号。

種　類：土師器、珠洲、瀬戸、美濃、青磁などの名称。

器　種：碗、皿、すり鉢、盤など用途別の分類。

X・Y : 1 m 単位の調査座標で出土地点を示した。

遺　構：遺物の出土上遺構名。空白は遺構外である。

層　位：遺物の出土した土層名。層位図参照。

レ　ベル：遺物の出土標高値。水準はT.P.、単位はmである。

法　量：口=口径、底=底径、高=器高を示している。

括弧のつかないデータが完形値、「」が復元値、( )が現存値である。

個　体　数：II縁部計測法(宇野1992)による。

備　考：時期別分類、重量、その他を示す。

整理 No. : 調査時の取り上げ番号。

別表1 堀跡計測表

(単位: cm)

局名	形状	主軸方位	横出長	上場幅	下場幅	深さ	立ち上がり	出土遺物	備考
西端	複数	X-0.5°-E	2074	427		150	西34.5° 東不明	■2	上標2より北部分の西端 軒はX=49ラインで前湖 深さ及び立ち上がりはX=46.3ラインで計測

別表2 門跡計測表

遺構No.	開口	開口幅(cm)	開口幅(尺)	主軸方位	備考
SR61	1	267	8.81	X-1.0°-W	塙門 南側に開口一箇(100.8cm)のくぐり口がつく
SR62	1	191	6.30	Y-0.0°-N	塙門への溝用門

別表3 棚列計測表

遺構No.	柱間	柱長(cm)	柱長(尺)	主軸方位	出土遺物	備考
SA51	3	318	10.49	X-2.0° E		SA54>SA51
SA52	4(6)	1302	42.97	X 1.0°-W	●	
SA53	5(6)	1215	40.09	X 0.5°-W		SA54・SA56b>SA53
SA54	4(5)	1078	35.57	X-1.0°-W		SA54>SA53・SA51
SA55a	2	398	13.13	X-0.5°-W		南端SP101から北端SV02までの推定長2083cm 基地塙西側柱穴列
SA55b	-	2220	73.26	X-0.5°-W		奥柱群が斜柱穴列
SA55e	3	241	8.05	X-0.5° W		轟池導管斜柱穴列
SA56a	3(4)	858	28.31	X-0.5°-W		南端SP192から北端SV01までの推定長1910cm 基地塙東側柱穴列
SA56b	-	2220	73.26	X-0.5° W		SA56b>SA53 基地塙東側柱穴列
SA56c	3	207	6.83	X-0.5°-W		基地解説斜柱穴列
SA57	2	348	11.48	Y-0.0°-N		SA56cには接続する
SA58	2	195	6.43	Y 3.0° S	●	

別表4 竪穴式居計測表

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	埋土	出土遺物	備考
S121	55.5	4.4	方形	306	291	33	453.820	第24回	●■■■▲3	

別表5 土坑計測表

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	埋土	出土遺物	備考
SM1	0.4	-2.0	単丸長方形	450	149	156	453.745	第25回		

別表6 潟跡計測表

(単位: cm)

No.	横出長	最大幅	最小幅	平均幅	深さ	埋土	主軸方位	出土遺物	備考調査
SD21	293	50	28	38.8	14		X 0.5°-W		基底層西側柱穴列SA55aの寄り
SD22	663.5	208	167	177.1	44	第13-26回	X-2.0°-W	●■■11○3▲3□3 ■□18	
SD23	325				46				

別表7 柱穴計測表

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱 軸 跡	柱 跡 名	本上 部跡	備 考	測 定 部
SP001	-6.08	-0.62	円形	37	35	24	454.973	A				下
SP002	-6.53	-0.39	円形	28	34	18	454.959	B	SA55柱穴 桁組め石1 管上に繩2			半
SP003	-5.08	-0.39	方形	22	17	20	454.810	D	SA55柱穴			完
SP004	5.91	0.13	複円形	65	40	31	454.889	H				半
SP005	-6.79	-1.27	複円形	63	41	25	454.956	B	SA56柱穴			半
SP006									火井			
SP007	-5.61	-1.26	複円形	52	45	13	454.763	A	SA56柱穴 管上に繩2 SP7>SP8>SP9			半
SP008	5.51	0.94	円形	56	22	25	454.956	B	管上に繩1 SP7>SP8>SP9			半
SP009	-6.59	1.15	円形	32	21	21	454.965	I	SP7>SP8>SP9			半
SP010	-6.61	-0.40	円形	26	26	29	454.783	B	SA55柱穴 板組み右			半
SP011	-5.68	3.10	複円形	50	31	24	454.720	B	板組への通用門柱跡左柱に嵌入石 抜き取り穴初			半
SP012	-6.08	4.68	円形	35	34	12	455.177	B	板組への通用門柱跡左柱に嵌入石 抜き取り穴初			半
SP013	-5.63	4.95	複円形	63	47	38	454.696	B	板組への通用門柱跡左柱に嵌入石 抜き取り穴初			半
SP014	-5.78	4.31	円形	34	32	13	454.866	A				半
SP015	-3.10	0.43	円形	54	61	64	454.360	C-2				半
SP016	1.27	-0.33	複円形	69	53	45	454.643	A				半
SP017	1.20	0.38	複円形	65	37	51	454.545	H	板組の右1			半
SP018	1.35	1.19	円形	46	46	454.588	C-2				半	
SP019	2.38	-0.48	円形	36	38	16	454.120	A	SA55柱穴 板組の右1			半
SP020	3.38	-0.51	円形	38	38	25	454.867	B	SA55柱穴			半
SP021	3.79	-0.51	円形	44	38	34	454.782	C-2	SA55柱穴 板組み右2			半
SP022									火井			
SP023	-4.27	-0.16	方形	33	23	10	455.027	B	SA55柱穴			半
SP024	2.11	3.29	複円形	42	26	49	454.734					
SP025	5.20	-0.50	円形	38	36	31	454.765	A	SA55柱穴 板組み右1 SP86>SP93			半
SP026	4.98	0.19	円形	42	42	35	454.765	A	SP95>SP73			半
SP027	5.70	-0.54	複円形	40	32	35	454.738	D	SA55柱穴 管上に繩1			半
SP028	6.16	-0.34	複円形	41	32	41	454.730	A	SA55柱穴 抜き取り穴1 安2・安2・SP87>SP93・99			半
SP029	7.13	-0.54	複円形	10	25	26	454.860	A	SA55柱穴 板組み右1			半
SP030									火井			
SP031	6.89	-0.55	円形	26	32	33	454.810	B	SA55柱穴 SP29・SP32・SP167>SP93>SP31・SP34			半
SP032	7.13	0.07	円形	35	32	23	454.810	B	SP29・SP32・SP167>SP93>SP31・SP34			半
SP033	7.08	-0.29	複円形	64	36	454.780	A	SP29・SP32・SP167>SP93>SP31・SP34			半	
SP034	7.33	-0.24	円形	30	23	454.855	B	SP29・SP32・SP167>SP93>SP31・SP34			半	
SP035	8.61	-0.49	円形	28	25	39	454.705	B	SA55柱穴			半
SP036	9.08	0.31	不規則	41	38	26	454.895	C-2	SA55柱穴			半
SP037	9.69	-0.34	円形	22	30	15	454.860	B	SA55柱穴			半
SP038	0.93	-0.32	複円形	50	22	23	454.771	A	SA55柱穴			半
SP039	1.89	1.44	複円形	24	21	12	455.025	B	SA56柱穴			半
SP040	2.12	1.41	円形	19	19	13	456.000	R	SA56柱穴			半
SP041	2.43	1.35	複円形	41	33	23	454.859	B	SA56柱穴 管上に繩3			半
SP042	3.17	1.00	複円形	46	31	51	454.830	B	SA56柱穴 管上に繩3 SP42>SP43			半
SP043	3.30	0.98	方形	48	46	454.690	A	SA54柱穴 SP42>SP43			半	
SP044									火井			
SP045	3.51	1.30	円形	42	20	20	454.864	A	SA56柱穴			半
SP046	3.91	1.33	円形	38	19	19	454.678	A	SA56柱穴			半
SP047	4.24	0.94	円形	32	32	31	454.584	D	SA56柱穴 管上に繩1 SP47>SP48>SP49			半
SP048	4.27	0.82	円形	49	31	454.615	B	SA51柱穴 SP77>SP16>SP99			半	
SP049	4.04	0.98	円形	32	27	454.855	A	SP47>SP48>SP49			半	
SP050	6.70	1.63	複円形	25	28	9	455.029	A	火井に繩1			半
SP051	5.05	1.15	複円形	32	37	28	454.827	C-2	SP51>SP56・SP52>SP53 78年度検出			半
SP052	4.09	1.07	複円形	35	39	33	454.770	A	SP51>SP54・SP52>SP53			半
SP053	5.22	0.98	複円形	50	50	454.813	B	SA51柱穴 SP52>SP54・SP52>SP53			半	
SP054	5.10	1.52	複円形	38	32	45	454.795	B	SA56柱穴 桁組の右1 SP51>SP54・SP52>SP53			半
SP055	4.39	1.38	不規則	30	26	7	455.064	A	SA56柱穴			半
SP056	5.82	1.43	複円形	32	28	18	451.918	A	SA56柱穴 桁組め石1			半
SP057									火井			
SP058	5.30	2.35	不規則	45	32	49	454.615	B	火井に繩2			半
SP059	6.38	0.98	円形	31	27	44	454.615	A	SA56柱穴 管上に繩1 SP59>SP60>SP61・SP59>SP62			半
SP060	6.24	-0.08	不規則	47	44	454.645	C-2	SP59>SP60>SP61・SP159>SP62			半	
SP061	5.97	-0.03	円形	33	20	454.580	A	SP59>SP60>SP61・SP159>SP62			半	
SP062	4.36	3.66	複円形	36	38	45	454.580	A	SP59>SP60>SP61・SP159>SP62			半
SP063	6.12	1.22	方形	22	22	15	454.950	H	SA56柱穴 桁組め石?			半
SP064	7.23	1.37	複円形	50	24	454.860	B	SP65>SP67>SP69>SP61			半	
SP065	6.91	1.05	複円形	31	31	28	454.813	A	SP65>SP67>SP69>SP61			半
SP066	6.99	1.36	複円形	62	25	19	457.999	A	SA56柱穴 SP65>SP67>SP69>SP61			半
SP067	6.20	1.15	複円形	58	13	454.570	A	SP65>SP67>SP69>SP61			半	
SP068	8.52	0.90	複円形	56	44	57	454.520	B	SA54柱穴 桁組め右1			半
SP069	8.97	1.28	複円形	58	38	18	454.913	B	SA56柱穴			半
SP070	9.38	0.73	複円形	48	40	32	454.780	B	SA52柱穴 SP72>SP70>SP71			半

別表7 のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面形状	柱	奥行	前面	正面	側面	背面	左	右	高さ
SP071	8.62	0.94	不規則	34		39	454.693		D	SP72>SP70>SP71						
SP072	9.37	0.85	円形	31	38	45	454.730		H	SP72>SP70>SP71						
SP073	9.64	1.32	扇円形	29	30	10	454.897		B	S45柱穴						
SP074	9.99	1.37	扇円形	28	28	26	454.823		B	S45柱穴						
SP075	10.73	1.44	扇円形	19	33	30	454.770		A	S45柱穴 制限71						
SP076	9.94	1.86	円形	39	28	41	454.660	抜き取り穴	A	SP76>SP28						
SP077										欠番						
SP078	10.19	1.83	扇円形	62	29	45	454.620	抜き取り穴	B	SP77>SP78						
SP079	11.13	1.25	不規則		44	15	454.590		B	S45柱穴 墓石に隣						
SP080	7.86	3.89	円形	40	35	28	454.820		B	S45柱穴						
SP081	10.02	4.08	円形	47	44	44	454.628		B	S45柱穴						
SP082	4.58	-4.52	格円形	21	16	15	454.527		C-2							
SP083	1.68	-1.52	円形	23	21	17	454.512		A							
SP084	5.13	-4.55	円形	23	21	15	454.505		A							
SP085	5.39	-1.67	六角形	26	20	12	454.531		A							
SP086	12.54	5.38	格円形		25	29	454.667		B							
SP087	13.87	5.47	円形	19	19	15	454.685		B							
SP088	5.04	5.81	円形	23		23	454.610		A							
SP089	15.10	5.18	円形	21	20	21	454.667		B							
SP090	5.43	5.19	円形	20	20	14	454.749		B							
SP091	15.75	5.11	円形	21	23	21	454.674		H							
SP092	16.79	5.12	円形	23	23	15	454.706		A							
SP093	13.43	4.19	角円形	46	33	38	454.645		A							
SP094	13.32	3.70	円形	20		20	454.635		B							
SP095	14.09	4.38	円形	35	35	26	454.601		C-2							
SP096	13.50	2.07	円形	32	28	26	454.612		A							
SP097	12.63	1.35	扇円形		18	23	454.776		A							
SP098	13.85	0.72	円形	36	33	29	454.642	円形 検12	A							
SP099	14.50	1.32	扇円形	42	35	39	454.505	抜き取り穴	A							
SP100	15.76	0.75	扇円形	38	31	32	454.660		A							
SP101	14.99	0.81	円形		39	39	454.625		B							
SP102	14.82	0.26	扇円形	95	61	60	454.355		H	S45柱穴 棚上に隣						
SP103	15.15	-0.62	方型	33	39	24	454.797		A	S45柱穴 棚底の71						
SP104	15.77	-0.69	扇円形	30	25	13	454.870		A	S45柱穴 棚下に隣2 SP107>SP108						
SP105	16.92	-0.71	円形	43	11	31	454.682	抜き取り穴	C 2	S45柱穴 棚底め右1						
SP106	15.96	0.68	方型	40	37	30	454.581	円形 検15	A	S45柱穴						
SP107	15.88	-0.50	円形	30	28	15	454.885		A							
SP108	16.92	0.41	扇円形	86	42	55	454.400		C-2							
SP109	17.06	0.82	円形		63	63	454.580		A							
SP110	6.83	1.15	方型	28	27	10	454.778		B							
SP111	17.79	-0.74	不規則		38	28	55	454.615	A							
SP112	7.82	-0.41	方型	22	20	13	454.797	円形 検16	B							
SP113	19.62	-0.66	椭円形	42	31	19	454.780	円形 検12	B							
SP114	20.29	-0.77	椭円形	46	37	59	454.580		D	S45柱穴 棚上に隣2 SP107>SP108						
SP115	21.72	0.75	方型	79	28	17	454.817		A	S45柱穴 棚底め右1						
SP116	22.27	-0.82	椭円形	46	36	22	454.751		A	S45柱穴 棚底め42						
SP117	22.54	-0.88	椭円形	36	32	43	454.660		D	S45柱穴 棚上に隣5						
SP118	18.81	1.56	椭円形	66	7	454.867	円形 検18	C 2	S46柱穴 棚底め右5							
SP119	19.70	0.66	椭円形	90		21	454.867		D	S45柱穴 棚上に隣3 SP118>SP119						
SP120	19.70	1.18	円形	30	28	21	454.747	抜き取り穴	A	S46柱穴 SP120>SP103・SP104						
SP121	20.28	0.52	扇円形	53	43	51	454.438	抜き取り穴	A	● S45柱穴						
SP122										欠番						
SP123	20.57	1.18	円形	25	24	15	454.745		A	S46柱穴 SP123>SP124>SP125						
SP124	20.58	1.15	円形	21		5	454.637		A	SP23>SP124>SP125						
SP125	20.44	1.28	円形	30		29	454.650		A	S46柱穴 SP123>SP124>SP125						
SP126	21.43	0.65	扇円形	71	52	43	454.520		A	上位に隣 SP127>SP126						
SP127	20.98	0.24	扇円形	21	50	66	454.295		D	S45柱穴 棚上に隣2 SP127>SP126						
SP128	22.39	0.57	円形	45	40	40	454.556	抜き取り穴	A	S45柱穴						
SP129	21.78	1.20	円形	31	30	16	454.795	抜き取り穴	B	S45柱穴 棚底め右1						
SP130	22.22	1.12	椭円形		32	21	454.758		C-2	S45柱穴 SP130>SP139						
SP131	23.91	1.19	円形	30		50	454.650		A	SP132>SP131>SP133						
SP132	23.80	1.06	椭円形	28	16	27	454.572		A	S45柱穴 SP132>SP131>SP133						
SP133	23.65	1.10	椭円形		25	41	454.554	抜き取り穴	A	SP132>SP131>SP133						
SP134	22.64	1.76	椭円形	82	49	63	454.730		B	SP135>SP134>SP136						
SP135	22.98	2.16	椭円形	40	31	37	454.627		B	SP135>SP134>SP136						
SP136	22.61	2.14	椭円形		34	35	454.620		B	SP135>SP134>SP136						
SP137	21.40	2.34	円形	38	37	41	454.520		C-1	樹園の右 SP137>SP138						
SP138	21.61	2.13	椭円形	37	26	39	454.550	抜き取り穴	A	SP137>SP138						
SP139	22.06	2.56	椭円形	45	37	39	454.596		B	樹園の右 SP139						
SP140	22.08	3.34	椭円形	30	21	40	454.549	抜き取り穴	A	● 樹園の右						

別表7のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長辺	短辺	開き	高さ	面レベル	柱	京	縫	断面形状	柱底	柱上	同	考	測定
SP131	18.93	-1.75	円形	21	21	6	454.881		B						縛上に縛1	半	
SP142	19.63	5.30	円形	24	24	21	454.714		A						半	半	
SP143	20.24	4.09	楕円形	28	22	34	454.598	抜き取り穴	B	●				柱底	半	半	
SP144	24.99	-9.20	円形	49	48	88	454.100	雪舟式円形縛15	A	●				柱底縛穴 縛上に縛6 縛引き穴に縛1 雪舟式円形縛15	半	半	
SP145	30.05	1.14	円形	45	40	31	454.600	円形縛15	C-2					SAS56柱穴 棚固めT5	半	半	
SP146	29.92	2.15	楕円形	28	35	454.372	円形縛9	A	●				SAS7柱穴 縛引き穴に縛1 SP147>SP146	半	半		
SP147	29.66	2.13	楕円形	31	25	46	454.437		C-2					縛引めT1 SP147>SP146	半	半	
SP148	29.34	2.66	円形	18	18	8	454.482		B	●●				縛引めT1 SP147>SP146	半	半	
SP149	29.83	2.58	円形	21	22	35	454.570		A	●●				縛引めT1 SP147>SP146	半	半	
SP150	28.97	3.82	円形	34	31	38	454.567		A					縛上に縛2	完	完	
SP151	29.42	3.85	円形	20	20	16	454.681		B					縛上に縛2	半	半	
SP152	29.84	3.88	楕円形	45	29	45	454.481	抜き取り穴	B					SAS7柱穴	半	半	
SP153	29.89	4.22	円形	20	28	21	454.728		B					縛引めT1	半	半	
SP154	29.39	4.65	不整形	42	33	39	454.560	円形縛2	B					縛引めT1	半	半	
SP155	29.83	5.39	円形	32	45	454.520		D					SAS7柱穴	半	半		
SP156	27.73	5.57	円形	35	30	46	454.515	抜き取り穴	B					半	半	半	
SP157	31.90	-0.76		28		55	454.406		B					SAS5柱穴 締固めT1 縛上に縛2	半	半	
SP158	31.96	1.14		30		29	454.460		A					SAS6柱穴 締固めT1	半	半	
SP159	22.49	1.21	楕円形	43	38	26	454.706		B					S129>S159	半	半	
SP160	22.90	1.27	椭円形	106	66	52	454.450	円形縛15	A					SAS4柱穴 締固めT1	半	半	
SP161	36.40	1.85	丁縛		44									不明	半	半	
SP162	36.40	1.15	円形		30									SAS6柱穴	半	半	
SP163	19.53	1.14	不整形	25	43	454.530								SP129>SP163	半	半	
SP164	19.89	1.13	椭円形		2	18	454.775		C-2					SP129>SP164	半	半	
SP165	17.88	5.08	刀形	23	14	454.700		B							半	半	
SP166														欠番			
SP167	7.39	0.28	楕円形	20	16	30	454.535		B					SP29>SP32>SP167>SP33>SP34	半	半	
SP168	-4.16	-0.67	円形	32	30	27	454.932		B					SAS5柱穴	半	半	
SP169	-4.79	-0.41	刀形	28	26	20	454.382	抜き取り穴	B					SAS5柱穴 接ぎ取り穴に縛1 SP169>SP170	半	半	
SP170	-4.63	0.41	不整形	37	54	54	454.615		A					SAS5柱穴 SP169>SP170	半	半	
SP171	-4.17	1.26	方形	22	21	16	454.986		B					SAS6柱穴	半	半	
SP172	-4.56	1.02	円形	22	22	116	454.315		B					SAS6柱穴	半	半	
SP173	-4.88	1.30	円形	24	24	13	455.036		B					SAS6柱穴	半	半	
SP174	-3.89	1.92	傳印形	46	31	40	454.649		A					SP174>SP175	半	半	
SP175	-4.29	1.96	不整形	44	31	454.695		B					SP174>SP175	半	半		
SP176	-4.62	2.10	椭円形	54	43	51	454.667		C-1					半	半	半	
SP177	-1.05	2.35	傳印形	35	31	20	455.050		A					SP174>SP176>SP177	半	半	
SP178	-4.68	2.92	楕円形	32	20	29	454.975		B					SP174>SP176>SP177	半	半	
SP179	-1.30	3.25	円形	19	19	8	455.155		A					半	半	半	
SP180	-5.39	2.45	楕円形	32	26	37	454.885		B					半	半	半	
SP181	-2.52	0.61	円形	18	17	24	454.775		B					半	半	半	
SP182	-2.62	0.30	円形	16		3	455.030		B					半	半	半	
SP183	1.95	-0.47	楕円形	40	18	26	454.890		A					SAS5柱穴	半	半	
SP184	10.50	1.05	丁縛	14										SP186>SP184>SP185	半	半	
SP185	10.68	0.48	楕円形	110	70	58	454.475		C-2					SAS5柱穴 縛上に縛1 SP186>SP184>SP185	半	半	
SP186	10.68	0.88	楕円形	64	26	50	454.540	抜き取り穴	C-1					SAS5柱穴 接ぎ取り穴に縛2 SP186>SP184>SP185	半	半	
SP187	1.98	1.87	楕円形	50		6	454.995		不明					接ぎ取り穴に縛2	半	半	
SP188	8.11	1.53	楕円形	37	28	28	454.890		A					半	半	半	
SP189	30.90	-0.82	楕円形	37	32	21	454.565		A	●				SAS5柱穴	半	半	
SP190	27.70	0.00	円形	55	50	93	454.060	木材芯状縛15	A	●				半	半	半	
SP191	27.98	-0.95	八型芯	32	46	55	454.320	抜き取り穴	B					SAS5柱穴 縛上に縛1 SP190>SP184>SP185	半	半	
SP192	27.98	1.16	円形	40	38	34	454.640	抜き取り穴	B					SAS5柱穴 接ぎ取り穴に縛2 SP190>SP184>SP185	半	半	
SP193	27.97	1.17	内縛	60	6	454.940	丁縛	C-2					SAS6柱穴 SP192>SP193	半	半		
SP194	29.54	-0.74	円形	21	20	14	454.721		B					SAS5柱穴	半	半	
SP195	29.98	-0.60	楕円形	48	35	454.456		B					SAS5柱穴 締固め右3	半	半		
SP196	32.00	4.32	円形	20		16	454.749		A					半	半	半	
SP197	21.40	0.00	円形	18										不明	半	半	
SP198	23.95	-0.80	楕円形	34	28	20	454.740	抜き取り穴	B					SAS5柱穴 接ぎ取り穴に縛3	半	半	
SP199	6.44	1.00	刀形	43	43	59	454.515		B					SAS5柱穴 締固めT3	半	半	
SP200	8.72	1.29	不整形	52	46	18	454.915		A					SAS6柱穴 接ぎ取り穴に縛2 SP59>SP60>SP61>SP199>SP62	半	半	
SP201	-1.00	-4.05	円形	24	19	11	454.700		A					SAS6柱穴	半	半	
SP202	29.11	-5.42	円形	17	16	9	454.211		A					94年度調査時に発見	半	半	
SP203	33.87	-0.81	方形	70	40	35	453.995		A					94年度調査時に発見	半	半	
SP204	27.49	-8.20	円形	22	20	15	454.298		A					94年度調査時に発見	半	半	
SP205	2.15	6.71	傳印形	33	20	17	454.530		B					94年度調査時に発見	半	半	
SP206	1.63	-6.75	楕円形	20	13	12	454.573		B					94年度調査時に発見	半	半	
SP207	0.29	-1.18	傳印形	25	21	7	454.663		B					94年度調査時に発見	半	半	
SP208	0.01	4.26	円形	25	23	106	454.656		B					94年度調査時に発見	半	半	
SP209	0.09	-4.05	楕円形	27	18	8	454.668		B					94年度調査時に発見	半	半	
SP210	-0.63	-1.02	不整形		11	454.659								94年度調査時に発見	半	半	

別表7 のつづき

No.	X	Y	平面形	長辺	短辺	高さ	底面形状	A 備考	B 備考	C 備考	(単位: cm)	
											底面	高さ
SP9418	-0.69	-0.24	不整形			8	454.660				94年度調査時に実測	×
SP9419	-0.77	4.12	不整形			8	454.660				94年度調査時に実測	×
SP9420	-1.37	4.25	円形	23	20	14	454.631		B	94年度調査時に実測	×	
SP301	42.16	3.76	円形	20	0.2	4	454.707		B	SAS5柱穴	手	
SP302	42.76	2.86	円形	29	28	38	454.400		B	SAS5柱穴	手	
SP303	42.87	1.82	円形	25	24	36	454.390		B	SAS5柱穴	手	
SP304										欠番		
SP305	54.95	0.64	円形	36	35	26	453.850	抜き取り穴	B			
SP306	55.40	0.66	円形	19	17	18	453.960		B		半	半
SP307	56.63	1.00	楕円形	22	19	15	454.020		A		半	半
SP308	55.22	1.55	楕円形	35	28	76	453.880	円形 径15	B		半	半
SP309	55.38	1.55	楕円形	54	34	25	453.880	抜き取り穴	A		半	半
SP310	55.96	1.52	円形	21	20	22	453.930		B		半	半
SP311	55.82	2.18	方形	25	24	17	453.938		C-2		半	半
SP312	55.17	2.48	円形	23	22	5	454.077		C-2		半	半
SP313	57.21	2.31	円形	30	34	34	453.815		B	SP313・SP315>SP314	半	半
SP314	57.10	2.50	円形	30	30	39	453.830		C-2	SP313・SP315>SP314	半	半
SP315	57.17	2.71	円形	31	31	31	453.839		B	SP313・SP315>SP314	半	半
SP316	59.05	-0.32	円形	19	19	21	453.960		B		半	半
SP317										欠番		
SP318	57.98	1.68	円形	34	32	27	453.899		A		半	半
SP319	58.44	2.12	楕円形	77	43	31	453.877	円形 径14	A		半	半
SP320	56.92	3.02	楕円形	23	16	27	453.887	円形 径8	A		半	半
SP321	54.12	3.16	楕円形	34	17	453.970		A	SP321>SP325	半	半	
SP322	54.07	4.86	楕円形	37	360	20	453.942		A	半	半	
SP323	53.94	2.42	楕円形	34	29	30	453.835		A	半	半	
SP324	53.95	1.80	楕円形	34	27	27	453.830		A	半	半	
SP325	54.08	3.38	楕円形	26	21	15	453.970		B	SP321>SP325	半	半
SP326	58.11	5.16	円形	17	16	13	453.998		D	完	完	完
SK327	61.90	5.70	楕円形	57	1	28	453.945		A	完	完	完
SP328	45.80	-5.02	楕円形	30	13	15	453.973		B	完	完	完
SP329	47.33	4.81	楕円形	30	25	18	453.965		B	完	完	完
SP330	48.68	-4.32	方形	35	16	16	453.979		C-2	完	完	完
SP331	49.10	-4.75	円形	24	20	12	453.995		A	完	完	完
SP332	50.41	0.31	円形	32	28	454.379		A	完	完	完	
SP333	39.25	-0.97	円形	32	40	454.411		A	完	完	完	
SP334	59.50	4.24	円形	25	14	454.041		A	半	半	半	
SP335	59.34	-7.66	円形	18	8	453.879		B	半	半	半	

第17表 柱穴断面形分類表

形態・分類	備考
A類  SP394	・底面が平坦で、断面形が方形を呈するもの。
B類  SP450	・底面が丸もしくは尖り、断面形が方形・三角形を呈するもの。
C-1類  SP308	・底面に段を有するもの。 〔底面中央に段を有するもの(C-1類)。〕
C-2類  SP13	〔底面に段を有するもの(C-2類)。〕

(類例柱穴は1996年度調査のもの)

別表8 石列SV01・SV02・SV03 石材計測表

(単位:cm)

產地	No.	石材名	種類	長軸	短軸	斜長・高さ	長軸偏角	袋 考
SV01	1			30	23			石材断面芯れ 石材横断芯れ
SV01	2		無	20	20			石材断面芯れ 石材横断芯れ
SV01	3		無	23	17			石材断面芯れ 石材横断芯れ
SV01	4	船津花崗岩	無	21	14			風化度しい 風化度しい
SV01	5	船津花崗岩	無	17	12			風化度しい 風化度しい
SV01	6	船津花崗岩	無	32	23			
SV01	7	船津花崗岩	無	32	14			
SV01	8	石英正長岩	無	23	15			
SV01	9	安山岩	無	23	17			
SV01	10	船津花崗岩	無	25	18			
SV01	11	船津花崗岩	無	25	19			風化度しい
SV01	12	因縫花崗岩	無	21	13			
SV01	13	船津花崗岩	無	36	25			
SV01	14	石英正長岩	無	27	21			風化度しい
SV01	15	因縫花崗岩?	無	26	18			
SV01	16	船津花崗岩	無	34	17			
SV01	17	船津花崗岩	無	22	19			
SV01	18	船津花崗岩	無	26	19			
SV01	19	因縫花崗岩	無	21	19			
SV01	20	因縫花崗岩	無	18	18			
SV01	21	船津花崗岩	無	17	12			
SV02	22	船津花崗岩	無	55	37	7.0°		
SV02	23	船津花崗岩	無	15	6			
SV02	24	船津花崗岩	無	9	6			
SV02	25	船津花崗岩	無	16	11			
SV02	26	船津花崗岩	無	53	45	59.5°		
SV02	27	船津花崗岩	無	63	71	7.0°		
SV02	28	船津花崗岩	無	9	23			No.27のかませ石か?
SV02	29	船津花崗岩	無	25	6			No.27のかませ石か?
SV02	30	船津花崗岩	無	73	38	16.0°		
SV02	31	船津花崗岩	無	14	9			
SV02	32	船津花崗岩	無	40	35	42.4	58.0°	
SV02	33	船津花崗岩	無	33	34	34.2	23.5°	
SV02	34	船津花崗岩	無	8	4			No.33のかませ石か?
SV03	35	船津花崗岩	無	80	35	90.0°		
SV03	36	船津花崗岩	無	22	17			
SV03	37	船津花崗岩	無	17	3			
SV03	38	船津花崗岩	無	34	18	58.2	57.0°	
SV03	39	船津花崗岩	無	8	5			
SV03	40	船津花崗岩	無	41	24	59.0°		
SV03	41	船津花崗岩	無	12	5			
SV03	42	船津花崗岩	無	53	30	32.5°		
SV03	43	船津花崗岩	無	53	18			
SV03	44	船津花崗岩	無	18	16			
SV03	45	船津花崗岩	無	57	25	55.5°		
SV03	46	船津花崗岩	無	25	30	99.0°		
SV03	47	船津花崗岩	無	64	27	39.0°		
SV03	48	船津花崗岩	無	12	4			No.47のかませ石か?
SV03	49	船津花崗岩	無	27	12			
SV03	50	船津花崗岩	無	26	19			
SV03	51	船津花崗岩	無	53	25	46.5°		
SV03	52	船津花崗岩	無	39	29	74.5°		
SV03	53	船津花崗岩	無	7	7			
SV03	54	船津花崗岩	無	8	5			
SV03	55	船津花崗岩	無	25	22			
SV03	56	安山岩	無	10	5			
SV03	57	船津花崗岩	無	38	25	67.5°		
SV03	58			20	12			
SV03	59			10	7			
SV03	60	船津花崗岩	無	14	8			
SV03	61	船津花崗岩	無	9	7			
SV03	62	船津花崗岩	無	19	6			
SV03	63	船津花崗岩	無	7	5			
SV03	64	船津花崗岩	無	6	4			
SV03	65	船津花崗岩	無	16	8			
SV03	66	船津花崗岩	無	17	11			
SV03	67	船津花崗岩	無	8	6			
SV03	68	船津花崗岩	無	22	19			
SV03	69	船津花崗岩	無	34	13			
SV03	70	船津花崗岩	無	9	6			
SV03	71	船津花崗岩	無	11	7			
SV03	72	船津花崗岩	無	27	25			
SV03	73	船津花崗岩	無	23	17			
SV03	74	船津花崗岩	無	22	17			
SV03	75	船津花崗岩	無	14	13			

別表9 1998・1999年度調査の出土遺物計測表

(単位:cm)

No.	器種	基 体	X	Y	高 度	幅 厚	レ ベル	法 素	偏 位	備 考	型 号
1	縄紋土器	器	46.99	9.23			下段基盤付(未記述)	54.463		0.99 『古都河原内宮』にタール付有	98-140
2	土 器 棒	柱	7.03	5.0	SV01基上		A-B周邊供養棒付土	434.708	[1][10.5]	0.38 T-2類 既製模造	98-44
3	瀬戸陶器	人 子	27.9	-1.8	基面標記		A-B周邊供養棒付土	434.855	東[3.5]	0.39 『古都河原内宮』中Ⅲ期	98-56
4	瀬戸陶器	折唇深口	48.20	4.40			A-B周邊供養棒付土	434.476		0.30 古都河原内宮 次次段熱 98-48と複合	98-47
5	陶 器	器	49.80	-9.67	壺系		粗土	433.460	口[37.3]	0.09 陶器鉢付(未記) 次次段熱 98-48と複合	98-48
6	土 器 棒	柱	55.12	3.35	水桶		粗土	433.765	口[10.0]	0.25 T-2類 既製模造 柱・タール付有	98-147
7	土 器 棒	柱	33.46	4.16	七層		粗土	433.983	口[16.0]	0.03 T-5類 浅黄色	98-46
8	土 器 棒	柱	30.20	0.34	SP173		粗土	435.916	口[10.0]	0.15 SASI型 T-5類 浅白色 『古都河原内宮』にタール付有	99-49
9	土 器 棒	柱	4.10	1.88	SP174		粗土	434.897	口[11.0]	0.06 T-6類かT-7類 浅黄色	99-38
10	土 器 棒	柱	-1.18	1.88	SP175		粗土	434.789	口[2.0]	0.15 T-6類かT-7類 浅黄色	99-37
11	瀬戸陶器	瓶	55.44	1.72	SP309		粗土	434.093	口[6.0]	0.00 本込? 古都河原内宮 T-2類既熱	98-144
12	土 器 棒	柱	29.34	2.66	SP148		粗土	434.837	口[3.8]~[2.5]	0.66 青白釉分離式柱頭直筒 漆衣付 内面・外縁部に「×」	99- 1
13	土 器 棒	柱	29.34	2.66	SP148		粗土	436.852	口[0.0]~[2.5]	1.00 本込? 分離式柱頭 直筒 漆衣付 PHに墨書き	99- 10
14	土 器 棒	柱	56.05	5.39	SD21		粗土	433.881	口[2.0]	0.37 T-1類 柱	99- 95
15	漆芦巻葉	漆器漆蓋	33.73	2.84	SD21		漆土	434.138	口[27.0]	0.11 古都河原内宮 次次段熱 98-12と複合	98-64
16	瀬戸陶器	折唇深口	33.24	4.55	SD21		粗土	435.178		0.00 老窯跡付里 水桶 油絵墨付(未記) 次次段熱 本込? 98-32	98-32
17	陶 内 壁	器	24.93	3.14	SD21		粗土	433.706	口[16.0]	0.15 陶器内壁1類	98-123
18	陶 製	器	56.17	2.76	SD21		粗土	434.968	口[31.0]	0.10 陶器内壁1類	98- 22
19	铁製 取	柱	54.40	3.87	SD21		粗土	434.368			98-171
20	土 壁 瓶	柱	26.17	-1.95	SD22		粗土	434.965	口[11.0]	0.10 T-6類かT-7類 浅黄色	99- 39
21	土 壁 瓶	柱	23.65	-3.30	SD22		粗土	435.725	口[12.0]	0.04 T-8類かT-7類 直筒形(未記)にタール付有	99- 36
22	瀬戸陶器	折唇深口	54.19	-5.47	SD22		粗土	434.138	口[0.0]	0.06 花瓶・古都河原内宮 次次段熱 98-12と複合	98-125
23	山 手 瓶	瓶	47.14	-3.76	SD22		粗土	434.192	口[6.0]	0.00 漆器山手瓶1類?	98-196
24	瀬戸陶器	折唇大腹	3.17	1.18	SD22		灰土	433.680	口[32.0]	0.00 古都河原内宮 次次段熱 98-19	99- 49
25	近朱用器	志野丸皿	15.95	-2.25	SD22		粗土	434.340	口[12.0]	0.08 盆笠付(小)	99- 67
26	瀬戸陶器	平 釜	59.17	-4.01	SV05		灰土	435.015	口[18.0]	0.03 古都河原内宮 次次段熱 98-127	98-127
27	土 壁 瓶	柱	46.71	2.78			粗土	434.653	口[10.0]	0.12 T-2類 淡黄色	98- 75
28	土 壁 瓶	柱	44.90	3.17			粗土	434.453	口[11.0]	0.08 T-2類 淡黄色	98- 77
29	土 壁 瓶	柱	19.35	0.87			粗土	434.956	口[3.0]	0.08 T-6類かT-7類 漆青釉 广輪彫刻にタール付有	99- 33
30	土 壁 瓶	柱	45.92	2.95			粗土	434.533	口[11.0]	0.06 T-6類かT-7類 淡黄色	98- 78
31	土 壁 瓶	柱	45.37	4.79			粗土	434.243	口[12.0]	0.11 T-8類 淡黄色	98- 72
32	土 壁 瓶	柱	46.10	3.43			粗土	434.383	口[15.0]	0.10 T-2類 後垂れ丸 98-70と同一全体	98- 72
33	瀬戸陶器	平 圓	44.05	2.83			粗土	434.373	口[18.0]	0.05 古都河原内宮 次次段熱 98-66	98- 66
34	陶 内 壁	柱	59.06	5.41	SV06		粗土	433.978	口[31.0]	0.04 既製型	99-111
35	陶 内 壁	柱	40.55	-0.16			粗土	434.793	口[13.0]	0.08	98- 85
36	土 壁 瓶	柱	14.24	1.14	1978年度調査		塗膜剥落	435.031	口[7.0]	0.00 R-5類	99- 39
37	土 壁 瓶	柱	14.26	-0.33	1978年度調査		塗膜剥落	435.044	口[5.0]	0.00 R類 丹羽乳脂等企画刷り	99- 31
38	土 壁 瓶	柱	23.61	2.60	1978年度調査		塗膜剥落	435.005	口[1.0]	0.08 T-2類	99- 29
39	土 壁 瓶	柱	47.17	0.50			塗膜剥落	434.833	口[2.0]	0.06 T-2類 にあい黄色 漆付有	98- 31
40	土 壁 瓶	柱	47.15	-1.75			塗膜剥落	434.708	口[10.0]	0.08 T-2類	98- 82
41	土 壁 瓶	柱	58.57	5.04	トレンチ		漆付作土		口[13.0]	0.05 T-2類 淡黄色	98- 55
42	土 壁 瓶	柱	45.76	6.53	トレンチ		漆付作土	434.348	口[12.0]	0.06 T-6類かT-7類 淡黄色 タール付有	98- 29
43	土 壁 瓶	柱	42.47	4.98			漆付作土	434.773	口[12.0]	0.02 T-6類 淡黄色	98- 56
44	土 壁 瓶	柱	55.89	1.14			漆付作土	434.393	口[15.0]	0.06 T-8類 淡黄色	98- 32
45	土 壁 瓶	柱	41.64	-1.13			漆付作土	434.808	口[15.0]	0.24 R-3類 淡黄色	98- 81
46	土 壁 瓶	柱	42.7	2.14			漆付作土	434.383	口[16.0]	0.09 T-8類 淡黄色 内側に漆付有	98- 42
47	青 瓶	瓶	41.75	5.58			漆付作土	435.034	口[14.0]	0.05 既製品水瓶正型 次次段熱	98- 33
48	山茶瓶	瓶	47.96	-9.42			漆付作土	434.773	口[7.0]	0.00 亂張型山茶瓶 大阪東小島の島	98-162
49	山茶瓶	瓶	41.65	1.28			漆付作土	434.749	口[15.0]	0.00 亂張型山茶瓶 大阪東小島の島	98- 37
50	瀬戸陶器	入 子	15.36	3.35	1978年度調査		塗膜剥落	434.910	口[6.0]	0.19 古都河原内宮 中Ⅲ期	99- 44
51	瀬戸陶器	折唇深口			6トレンチ		漆付作土		口[20.0]	0.06 「椿花・古都」中Ⅲ期 次次段熱 98-16	98- 16
52	瀬戸陶器	折唇深口			1999年度調査		塗膜剥落		口[14.0]	0.07 古都河原内宮(古) 漆付	98- 19
53	空器器	柱	21.28	0.93	1978年度調査		塗膜剥落	434.950	口[32.0]	0.05 A類器物2件6類	99- 26

図 版



1 調査地域航空写真(1947年撮影)

1. 江馬氏下館跡
2. 高原諏訪城跡
3. 東町城跡
4. 八幡山城跡

(上が北、縮尺:約1/26500)



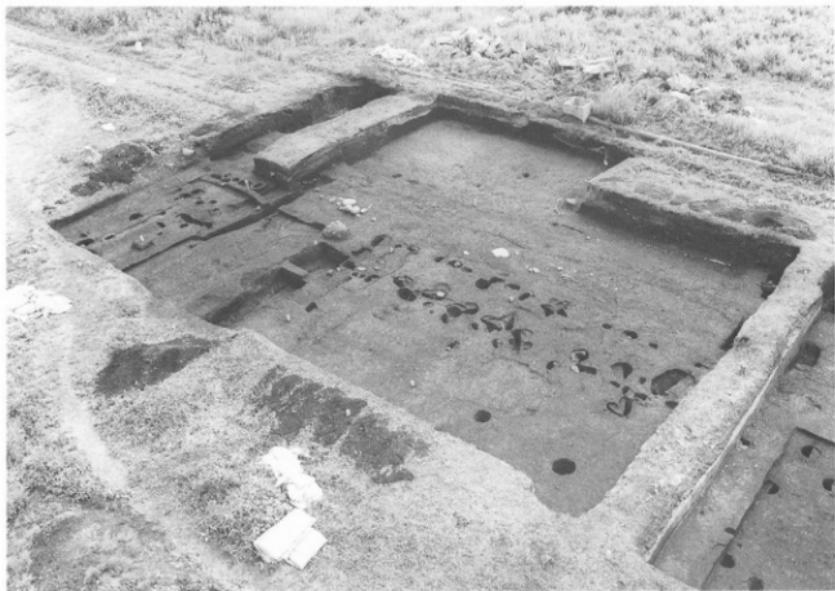
1 神岡町遠景写真：1978年撮影(北から)



2 調査地域遠景写真：1999年度調査時(上が北東)



1 調査地域遠景写真(西から)



2 調査地区I地区発掘後全景(北東から)

図版 4



1 調査地区II地区発掘後全景(南東から)



2 調査地区III地区・IV地区発掘後全景(北西から)

1 西堀箱塚北半部  
発掘後全景(北から)



2 西堀箱塚北半部  
南北縦断面層位  
(Y座標-8ライン,  
北西から)



3 西堀箱塚北半部  
東西横断面層位  
(X座標46.3ライン,  
北から)



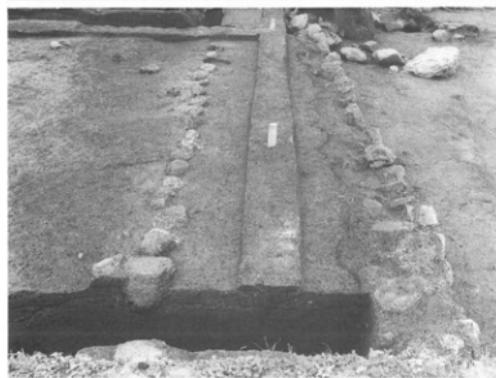
図版 6



1 墓地壠基底部石列SV01・SV02・  
近世耕地石組み畦SV03  
発掘後全景(北西から)



2 墓地壠基底部石列SV01  
発掘後全景(南から)



3 墓地壠基底部石列SV02・  
近世耕地石組み畦SV03  
裏込め土検出状況(東から)

1 柴地塀基底部石列  
SV02  
発掘後全景(北から)



2 柴地塀基底部石列  
SV02裏込め  
Y座標2.66ライン  
断面層位(南東から)



3 近世耕地石組み畦  
SV03  
発掘後全景(北から)



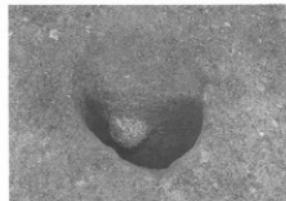
4 近世耕地石組み畦  
SV03裏込め  
Y座標3.76ライン  
断面層位(西から)



図版 8



1 脇門SB61発掘後全景  
(東から)



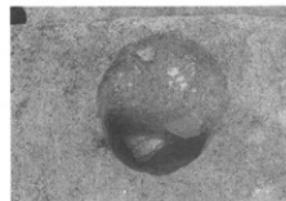
2 SP144断面層位(南から)



3 SP190断面層位(西から)



4 庭園への通用門SB62  
発掘後全景  
(南から)



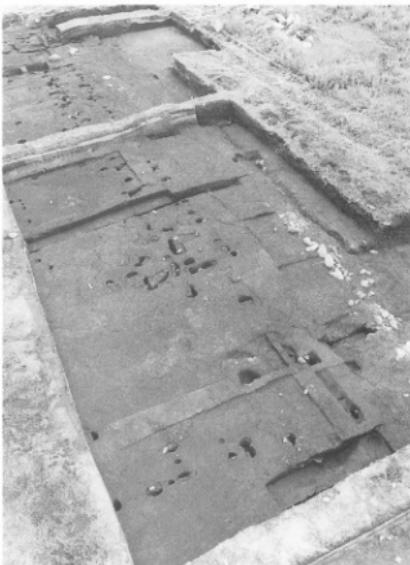
5 SP11断面層位(南から)



6 SP13断面層位(南から)



1 棚列SA51～54・57・築地壠柱穴列SA55・56  
発掘後全景(南から)



2 棚列SA51～54・57・築地壠柱穴列SA55・56  
発掘後全景(北東から)



3 棚列SA51・53・築地壠柱穴列SA55・56発掘後全景(I地区内、北から)



1 棚列SA52・54・築地塀柱穴列SA55・56発掘後全景(Ⅱ地区内、南から)



2



3



4



5

2 築地塀基礎地業部検出状況(北から)

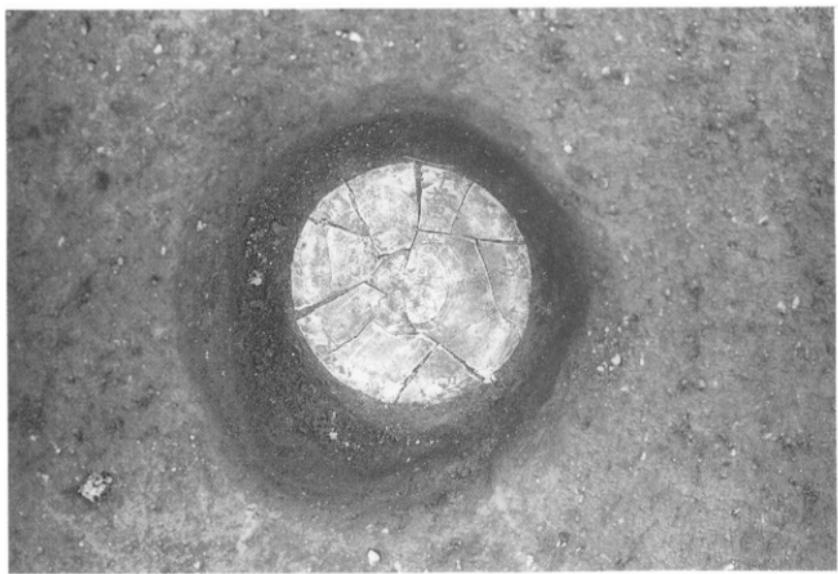
3 築地塀基礎地業部断面層位(WAトレンチ北壁内、南から)

4 布掘り溝SD21発掘後全景(棚列SA55aの一部、南から)

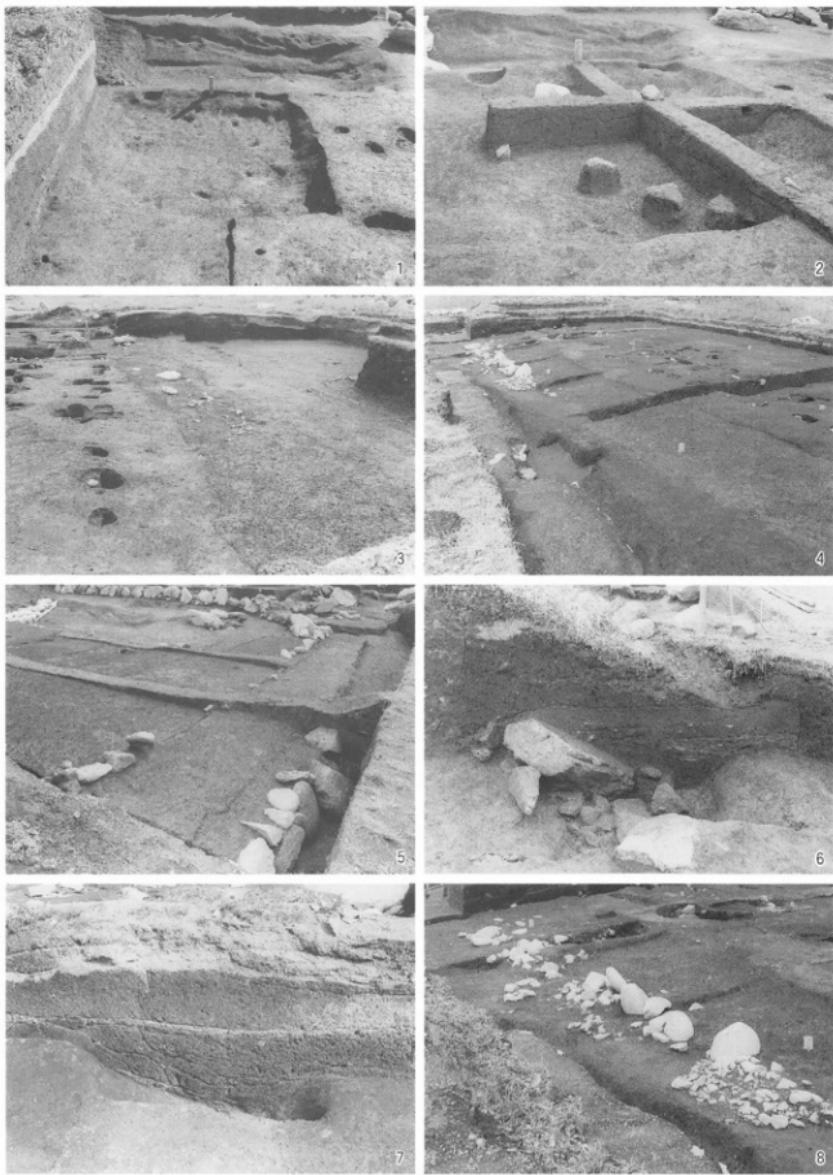
5 築地塀に伴う盛土部分断面層位(X座標0ライン、南から)



1 地鎮造構SP148 墓書土師器皿出土状況(1)(1枚目の土師器皿、南から)



2 地鎮造構SP148 墓書土師器皿出土状況(2)(2枚目の土師器皿、南から)



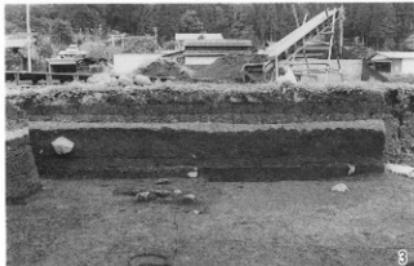
1 壁穴住居SI21発掘後全景(北から) , 2 壁穴住居SI21断面層位(北東から) ,  
3 SD22検出状況(I地区内, 北東から) , 4 SD22検出状況(II地区内, 南西から) ,  
5 SD22・SV06・SF01・SD23・SV07検出状況(III地区内, 北西から)  
6 SD22断面層位1(III地区X座標49.7ライン, 北から)  
7 SD22断面層位2(II地区南壁内X座標6.5ライン, 北から)  
8 SD22内縫検出状況(II地区内, 南西から)



1 不明土坑SX41検出状況  
(上が南西)



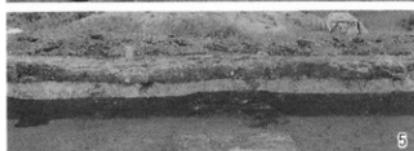
2 不明土坑SX41断面層位  
(南西から)



3



4



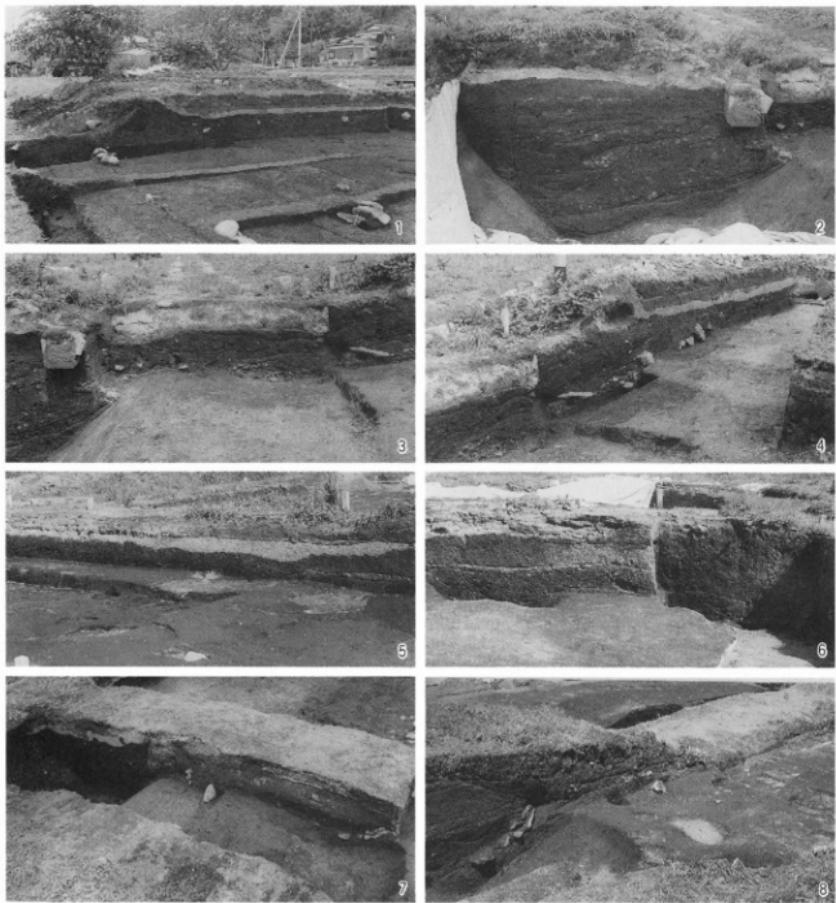
5



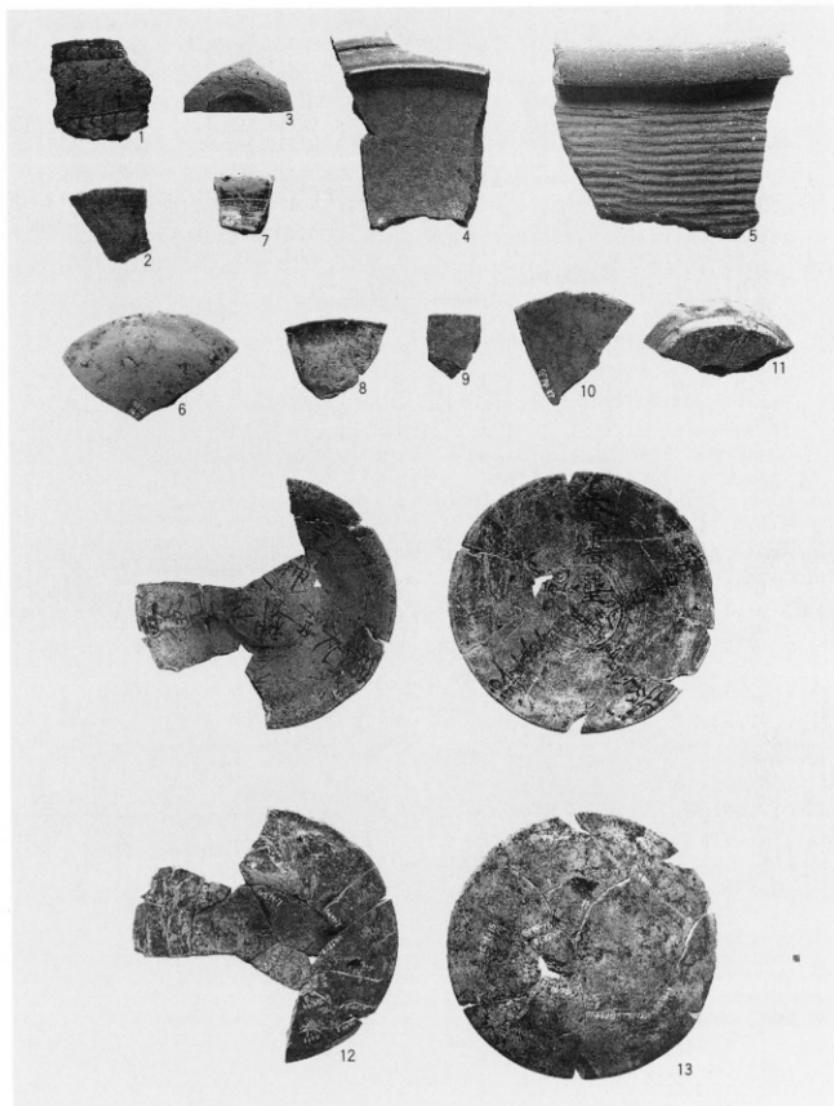
6

3～6 調査地区東壁断面層位：

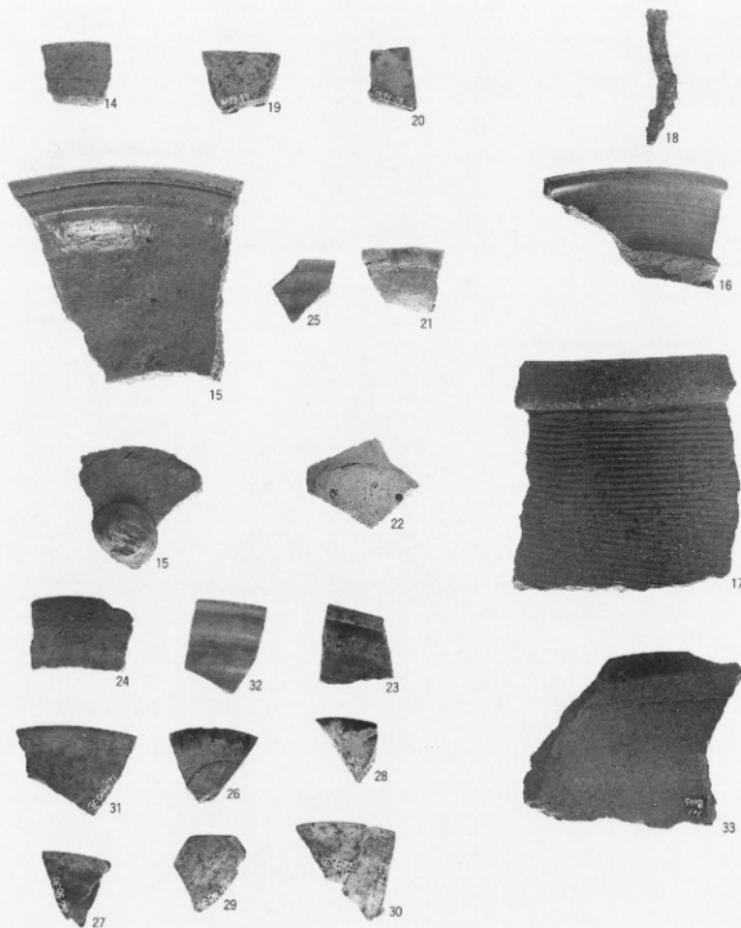
- 3 III地区北側部分(堀外地区, 西から)
- 4 III地区南側部分(9トレンチ西壁北半分, 南東から)
- 5 II地区X座標30ライン付近(1976・77年度調査時の畦部分, 西から)
- 6 I地区X座標3ライン付近(西から)



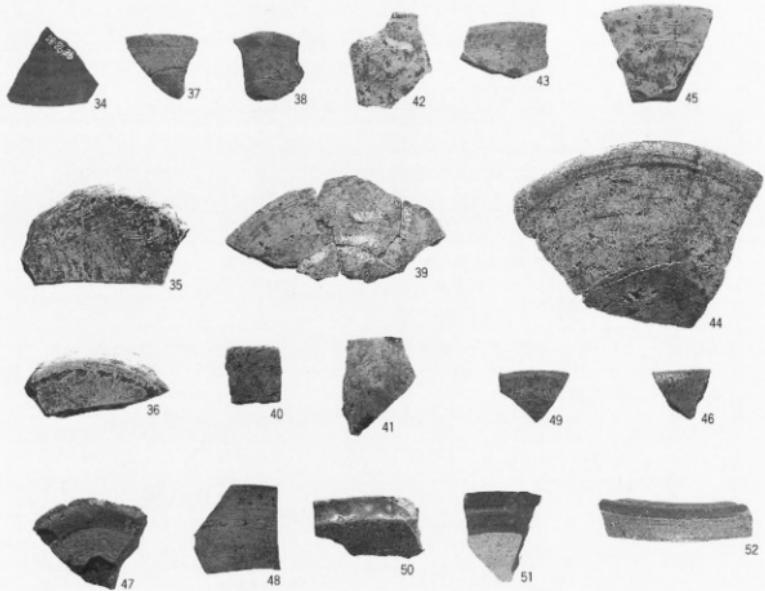
1. III地区北壁断面層位(南西から)。  
2～4 II地区北壁断面層位：  
2 Y座標-10～-6西堀箱掘南半部断面層位(南から)、3 Y座標-7～-3(南から)  
4 Y座標-4～-6(南西から)  
5・6 II地区南壁断面層位：  
5 Y座標5～-1(北西から)  
6 Y座標-2～-5 1976・77年度調査・1994年度調査地区との境付近(北から)  
7・8 I地区1トレンチ北壁断面層位：  
7 Y座標-9～-1(南東から)、8 Y座標-6～-2(南西から)



出土遺物写真 (1)：下館基盤土(基盤造成土)(1)、A・B期遺構面構築土(2~4)、  
西堀(5)、北堀(6・7)、SA52柱穴SP121(8)、SP174(9)、SP175(10)、  
SP309(11)、地鎮遺構SP148(12・13)



出土遺物写真(2) : SI21(14~18), SD22埋土(19~24), SV05裏込め(25),  
<耕地造成土>(26~32), SV06裏込め(33)



出土遺物写真(3)：(旧耕作土・1978年度調査埋め戻し土)(34~52)

## 報告書抄録

ふりがな	えまじょうかんあと						
書名	江馬氏城館跡						
副書名	下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査						
巻次	V						
シリーズ名	神岡町埋蔵文化財調査報告書・江馬氏城館跡調査報告書						
シリーズ番	第6集・第6集						
編著者名	大平 愛子・酒井 英男・田中 保士・中埜 貴元・笹井 隆・新谷 崇・松倉 大作						
編集機関 所在地	神岡町教育委員会 〒506-1195 岐阜県吉城郡神岡町大字東町378番地 TEL 0578-2-1271						
発行年月日	西暦2001年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号						
岐阜県吉城郡神岡町 大字殿宇中通り・ 山越・馬場西・ ヲカモ	21625	G07K00093	36° 19' 25"	137° 18' 43"	19980902 19981211 288m <sup>2</sup>  19990610 19991019 500m <sup>2</sup>		史跡保存 整備事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
江馬氏城館跡	城館	中世	堀、門、築地堀柱 穴列、櫓列、築地 堀基底部石列、堅 穴住居、地鎮遺構	土師器、瓦器、青磁、白磁、 瀬戸・美濃、珠洲、八尾、 瓷器系陶器、鉄製品			

神岡町埋蔵文化財調査報告第6集  
江馬氏城館跡調査報告書 第6集

江馬氏城館跡 V  
下館跡地内地区西辺と北西隅部の調査—

印 刷 2001年3月25日  
発 行 2001年3月30日

編集・発行 神岡町教育委員会  
〒506-1195 群馬県吉城郡桜町大字東町378  
TEL 0578-2-1271

印 刷 ヨシダ印刷株式会社  
〒339-8204 富山県富山市根尾町1丁目5番5号  
TEL 076-493-3321

江馬氏城館跡 V —下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査— 2001年3月発行  
岐阜県吉城郡神岡町教育委員会編

# 江馬氏城館跡 V

—下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査—

付図1 江馬氏下館跡遺構平面図

